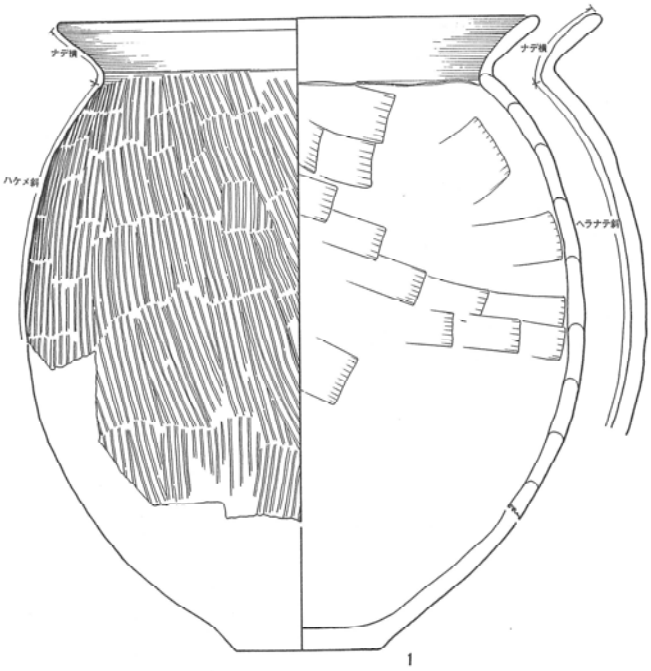
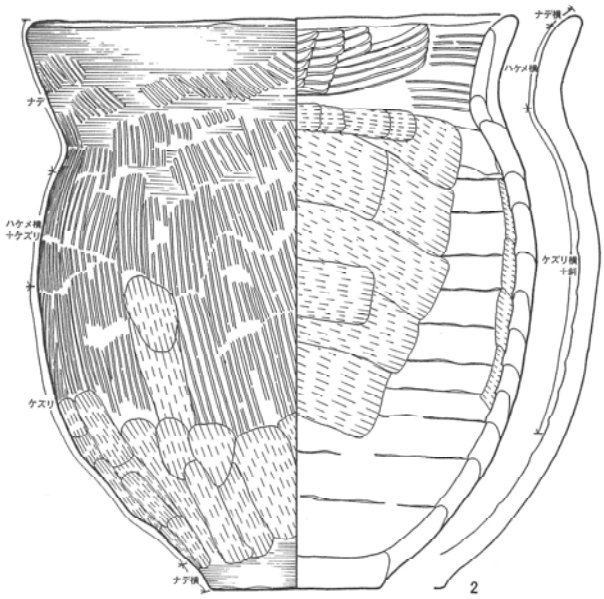
高坏・器台を一括した。107図2～4は高坏の高坏部,107図9～11は同脚部に相当し，11はその中で器台の脚部とみられる。

Ⅴ群c類〔第107図5～8〕

椀形土器4点がある。いずれも底面調整をケズリで施すのが特徴であり，外面はハケメないしナデを呈するが，107図5の様にケズリをなすものもある。内面調整は甕形と同様にヘラナデを有するものとミガキを行う二者がある。





第108図八幡原No.4遺跡出土土器実測図(4)

第6章　考　　察

Ⅰ　使用痕跡をもつ石器について

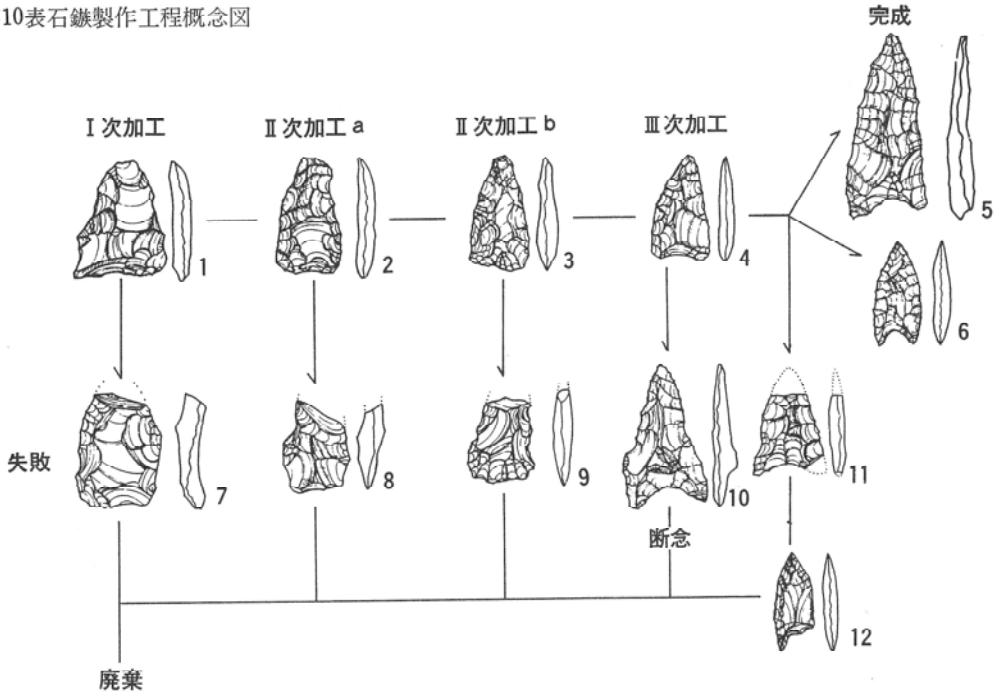
1）磨滅・使用痕を有する石器とその状態

磨滅等を有する石器は石鏃・石槍を除く大半の器種にあると考えて良い。今回使用した完成石器（使用目的を意図した器種の明確なもの）の他，剥片に簡単な調製を施こした石器や，剥片をそのまま使用するものなど，分類不可欠な程多様面をもっている。

ここでは完成石器から廃棄までの過程で，めまぐるしく形態が把握できる打製石器，石篦状石器を題材として，製作時点の復元と器種の変化を探ろうとするものである。

かって手塚は山形県川西町千松寺の調査において，石鏃製作を目的とした作業小屋（石器工房跡と呼んでいる）と石器製作途上に出る剥離片の廃棄場を発掘し，得られた石鏃未完成（失敗・破損・製作断念〕と作業小屋内部から出土した石鏃途上品と完成品の整理において下記の石鏃製作工程概念図を発表している。[①]

第10表石鏃製作工程概念図



これは石器製作のある一種に限り，製作工程のプロセスを示めすものとして大変参考ととなるが，打製石斧等の剥離技法の異なるものは上記の様な工程概念は無理であろう。しかし，手塚が言うⅠ次加工，Ⅱ次加工は明らかに直撃打法（ハンマーストン・骨角器等で

直打剝離するもの）に手法を用い，Ⅲ次加工で押圧剝離を用いて細調製を行うもので，Ⅲ次加工を直撃打法による細調製に置き変えることによって大方はあてはもることが可能と考え下記の石器製作工程概念図を加え，次に言う打製石斧・篦状石器の変容の基本的な方向とする。

2）打製石斧の復元と転用

打製石斧・篦状石器の一群はその残された形状からのa類～j類10形態に便宜上分類しているが,剝離手法より片面加工と両面加工との二者に大別でき,使用目的に応じた器種に限定すると類型は少なくなるものと言えそうである。第12表に示した石器変容概念図はそうした可能性を元に図化したものである。

図1は両面加工に柄着装痕を残す断面図で右の図2は同形態図である。A～Gの7形態を参考とし，1図では刃部の角度を強調している。A・Bでは角度が54°・55°度を示,原形に近いものとみられ，再加工による刃部の調製を繰り返すことによってC 65°・D 67° E 80°，F 76°，G 77°と急角度を呈するものとみられる。図2は正面形状を示したもので,再加工を施したC～Gの大きさがA・Bの両者と比較されよう。しかし,F・Gは基部の再調製を加えていることもあって参考とならない。また波線で示したC・Dの両者は刃部に使用痕が呈さないことから，再加工調製の時点での断念ないし，廃棄したものと理解される。

図3は片面加工の柄着装痕をなす断面図で,図4は同平面形態図である。前者の両面加工の石器と同様に並べてみた。A・Bの両者は原形に近い形態を有するもので，№4遺跡に当該資料がないこともあって№5遺跡の資料を当た。51°と55°をなし，cは66°D 52°,E 74° F 69°，G 77°と刃部の再調製による変容が判る。図4からも大きさの比較が著しく異り，特に基部の形状が殆んど変化を示さない点が重要である。

以上の整理から図1のG・図2の5を除く他は現形（粗形）に打製石斧を置いていたものと推測され，再加工による刃部の調製から最終工程の廃棄に至ったものとみられる。

しかし，図1のE・Fと図2のGは明らかに石篦に転用を係ったものと推察され，図1Gと図2の5は当初からの石篦とみられる。

3）磨滅痕と柄着装例

石斧が柄に着装された状態で検出された例はないが，柄は低湿村帯の遺跡で数例報告されている。図6は福井県鳥浜貝塚出土の膝柄で,[②] 磨製石斧を主体とするが打製石斧に際しても基本的に同様であると考えられる。[③]〔縄文前期の所産〕図8は滋賀県滋賀里遺跡出土の直柄で有孔柄である〔縄文晩期〕。図10は石器が着装した唯一の例であり，北海道の江別太遺跡出土である[④]〔続縄文〕。

第11表石器製作工程概念図

1．素材の選出　（使用目的等による，原石採集）

2．石核の作製

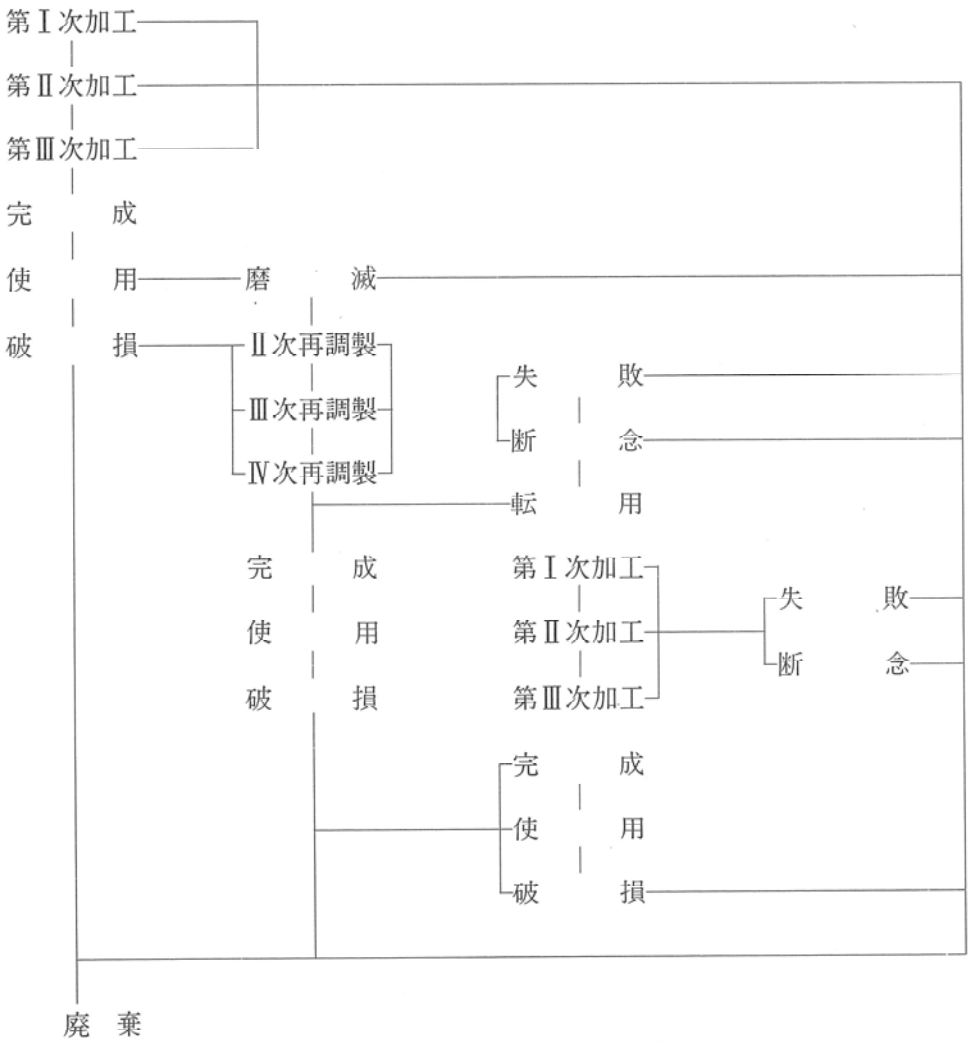
3．フレークの作成（目的品の一次剝離組形）および，原石から直接目的品を製作するものは適性原石と呼ぶ。

4．第Ⅰ次調製（現形作製）『第Ⅰ次加工』とする。

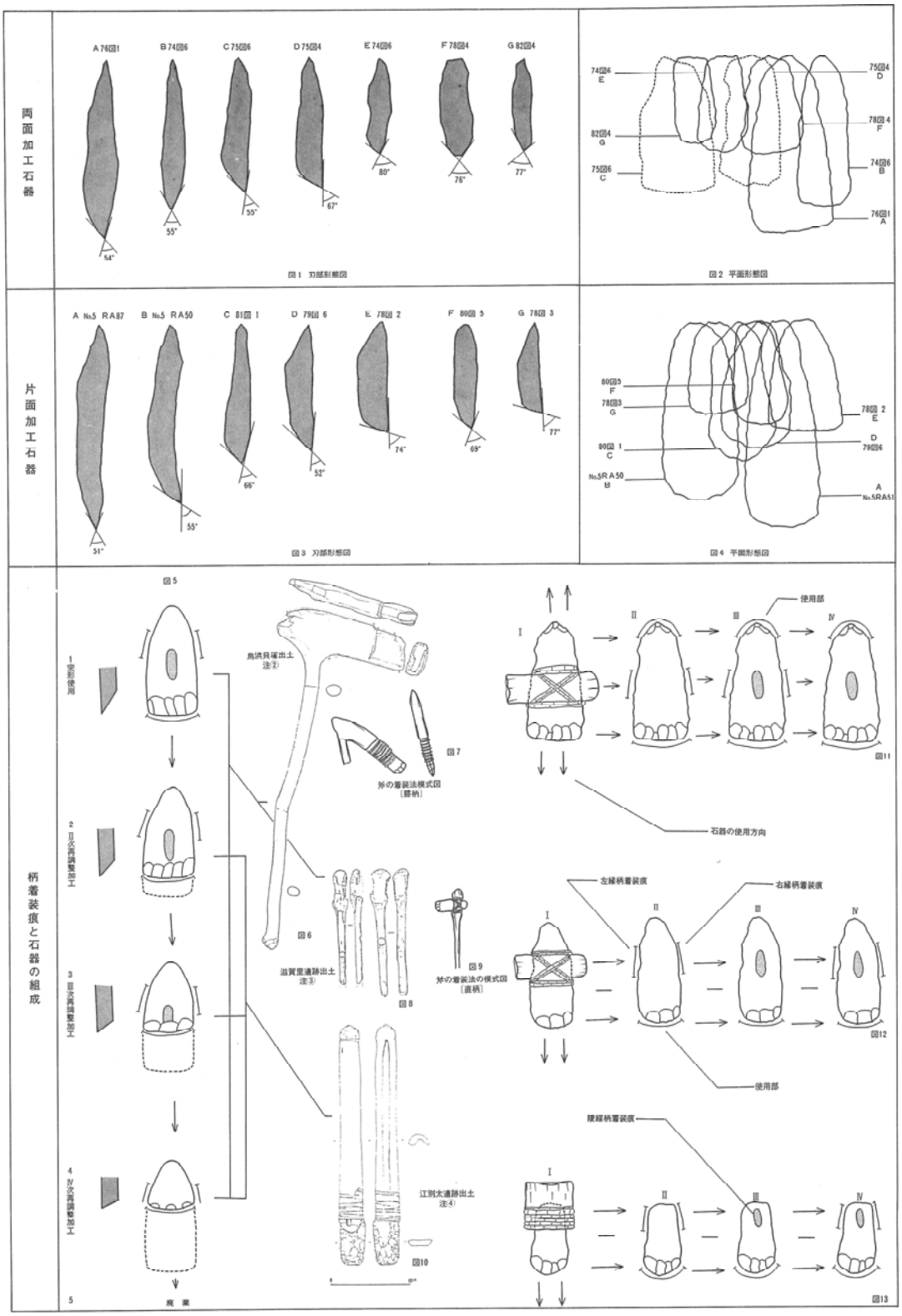
5．第Ⅱ次調製（基部・刃部の調製）『Ⅱ次加工』とする。

6．第Ⅲ次調製（横からの細調製で刃部・基部，縁片の最終剝離）『Ⅲ次加工』とする。

7．完成→使用



第12表石器変容概念図



第12表内図11～図13は，柄着装によって生じる磨滅痕を本遺跡出土石器の類例をもって様式図化したものであり，図11は両端を刃部とした打製石斧の柄着装痕Ⅰ～Ⅳ概念図で，図12は一面刃部の打製石斧の柄着装痕Ⅰ～Ⅳ・図13は石篦状石器の柄着装および同磨滅痕概念図である。┣━━┫は磨滅および使用痕，刃毀れ等を示し，↑↓は使用方向，スクリーントーン箇所は柄擦れによる光沢，磨滅部部分を現わした。ただし図11～図13のⅠによる着装図はかならずとも正しくはない。

4）まとめ

図5は打製石斧の再調製加工からの変容を様式化したもので，Ⅰの完成形態からⅡ次再調製加工～Ⅳ次再成加工までを類形づけた。この分類からすると2のⅡ次再調製加工までを打製石斧として器態を整えるが，3・4になると器態を失い，廃棄または他の器種に転用せざるを得ないものと言えよう。図6～図10は柄および着装　式図であり，図10は所謂『石篦』としての柄着装法と理解して大方は妥当と考える。図6～図10は磨製石斧に着装手法を求められるもので，打製石斧に置き変るのは無理があるが，基本的な考え方としてあえて参考とした。

注 ① 手塚　孝他　1980『千松寺遺跡調査報告書』川西町教育委員会
② 鳥浜貝塚研究グループ1979『鳥浜貝塚』福井県教育委員会
③ 湖西線関係遺跡発掘調査団1973『湖西線関係調査報告書　図録編』真陽社
④ 北海道先吏学協会1979『江別太遺跡』江別市教育委員会

Ⅱ　剝片石器の形態と細別

—第Ⅲ層～第Ⅴ層出土剝片を基準として—

ここでは本遺跡から出土した剝片石器の形態が，年代（時期）的にどのような変容を呈すかを第Ⅲ層～第Ⅴ層の剝片形態分類をもって考えてみたい。

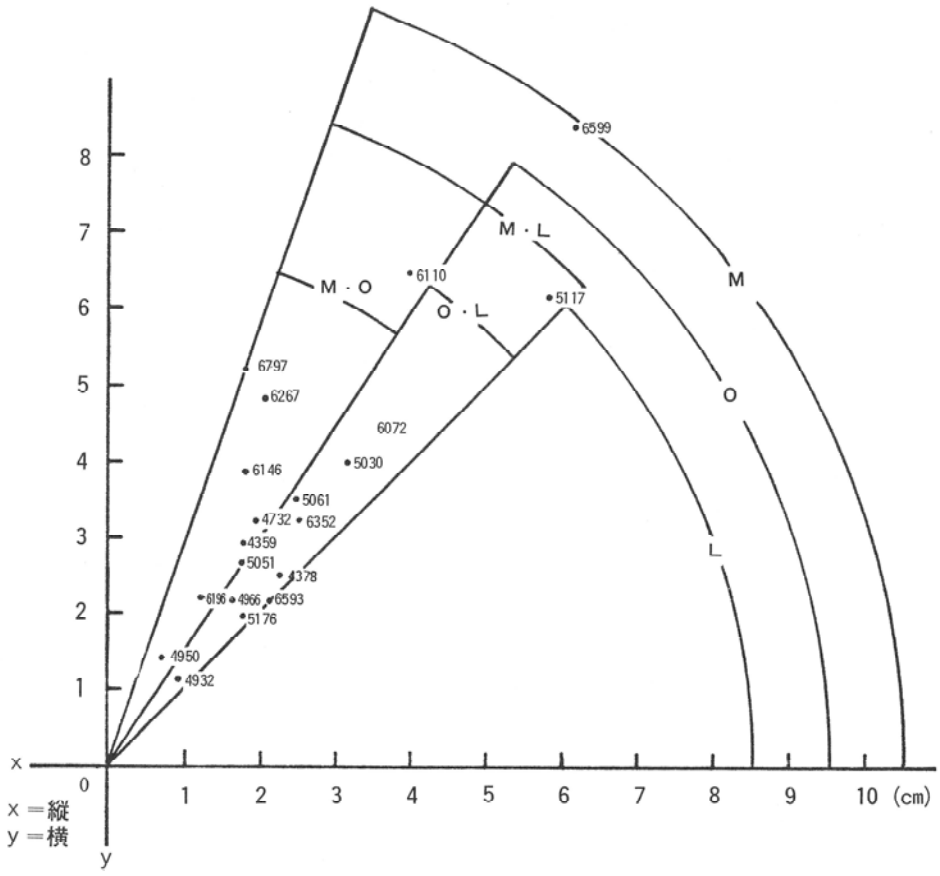
第Ⅲ層・第Ⅳ層・第Ⅴ層から検出された剝片石器（剝片に1次剝離を施こしたものも含める）は4915点検出されている。大半は石核から直接剝脱した剝片（フレーク）と石器の製作過程内で剝離される剝片（チップ等）の所謂—調製を加えられていない剝片によるものであり，その他に剝片に意図的な切断面（切離）や簡単な加工を加えたものが含まれている。

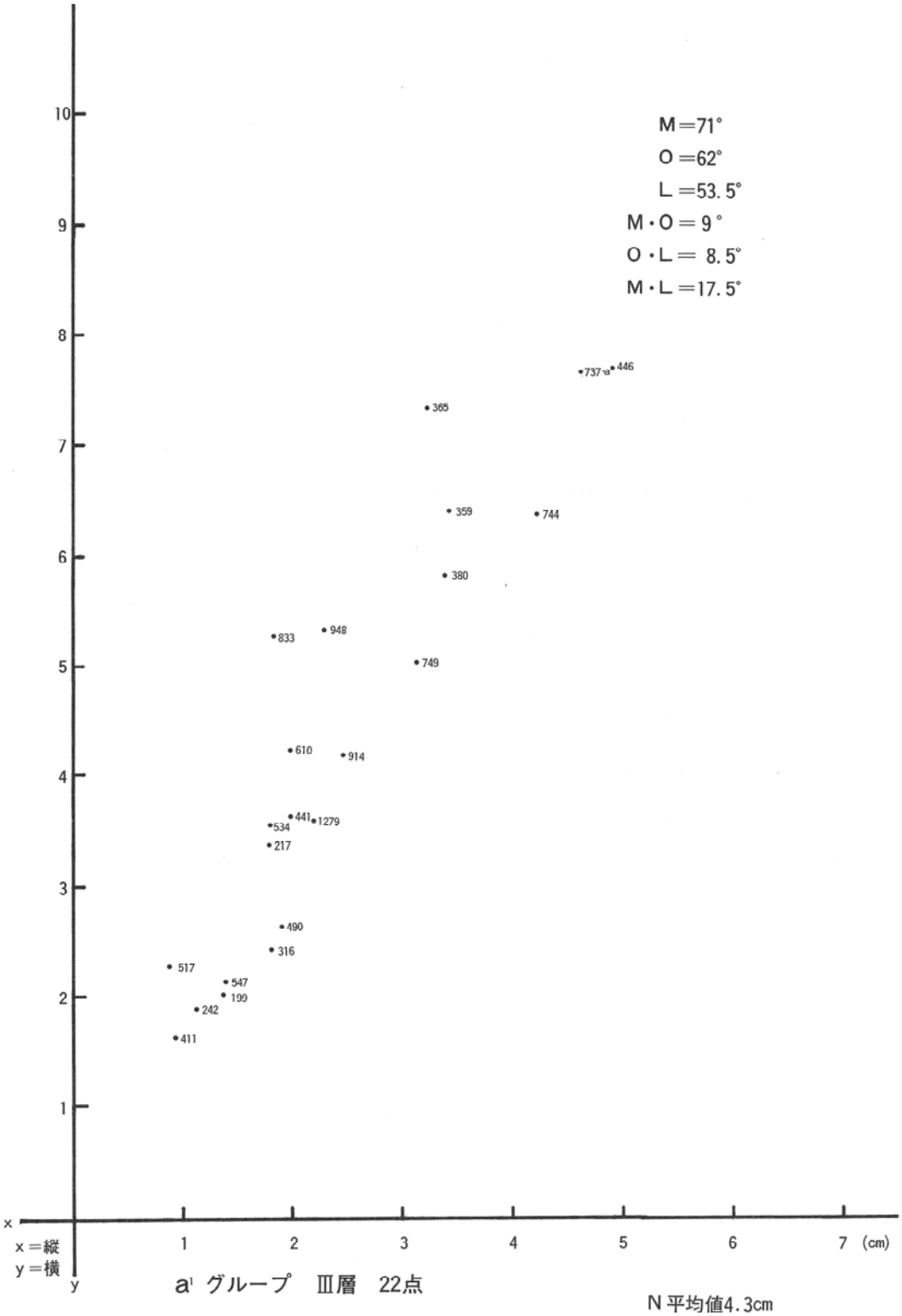
ここで扱う剝片石器（以下剝片と称する）は剝片が切断や調製を施こして，以前の形態が　われたものax・bx・xを除いた剝片のみを基本とする2649点である。

1）剝片石器の計測と応用

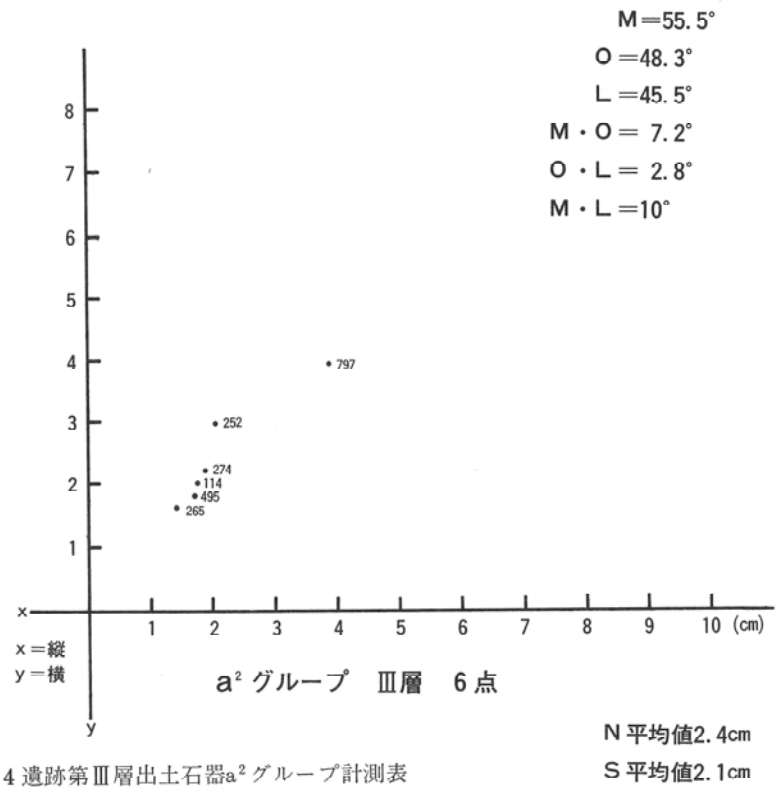
剝片は剝脱された形状，技法から縦形（a形態）・横形（b形態）に大別され，さらにa

第13表剝片石器計測概念図

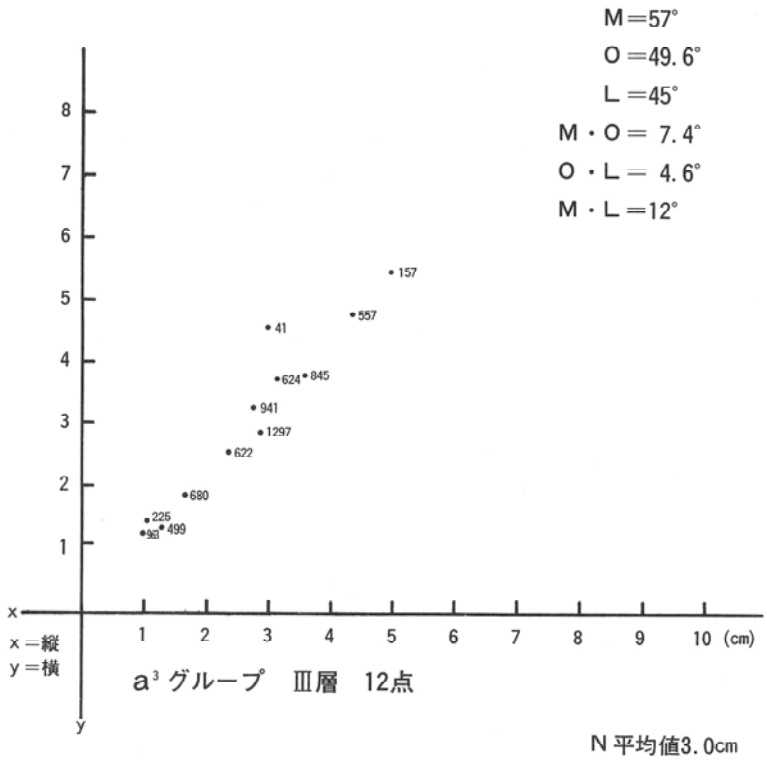




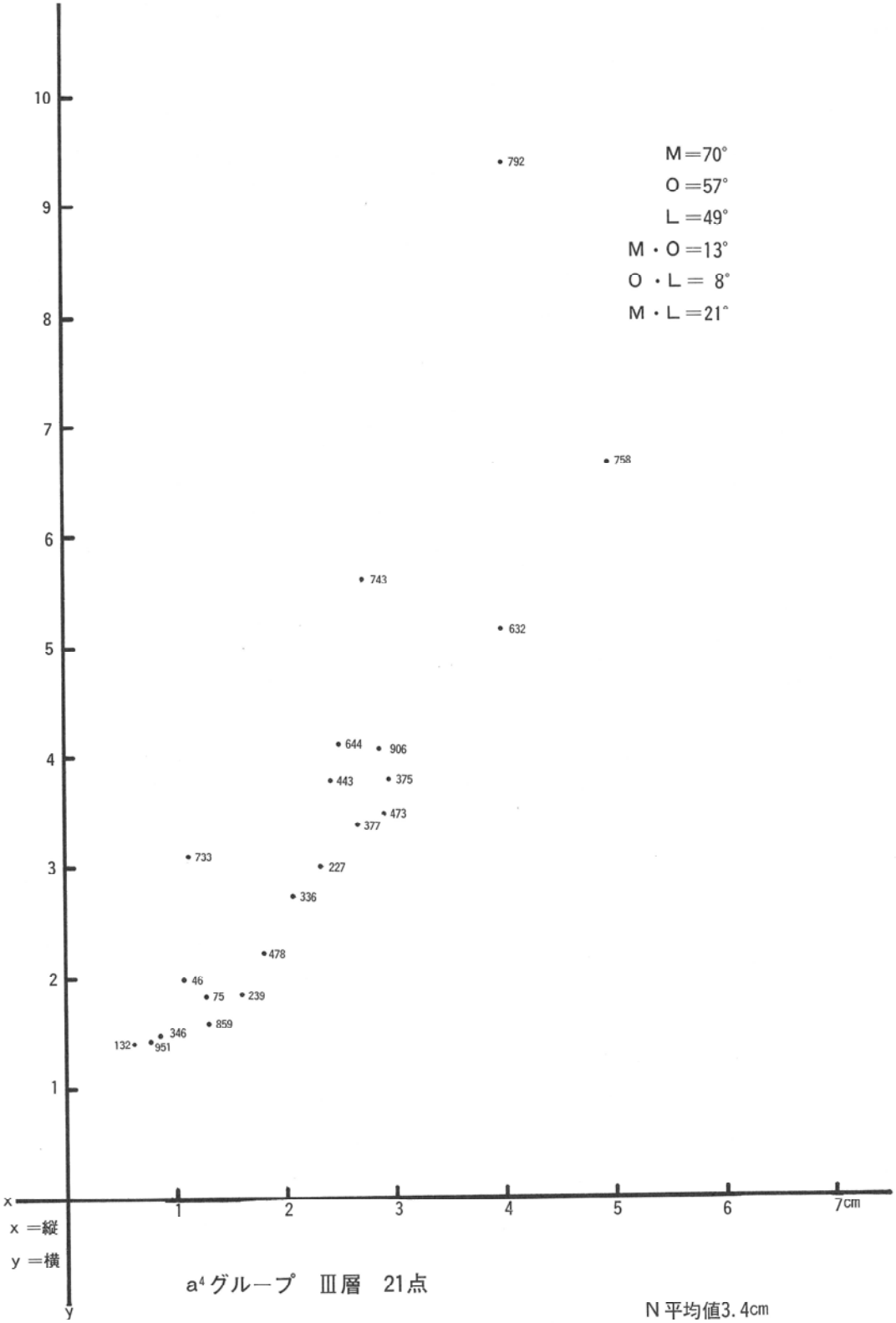
第14表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a¹ グループ計測表



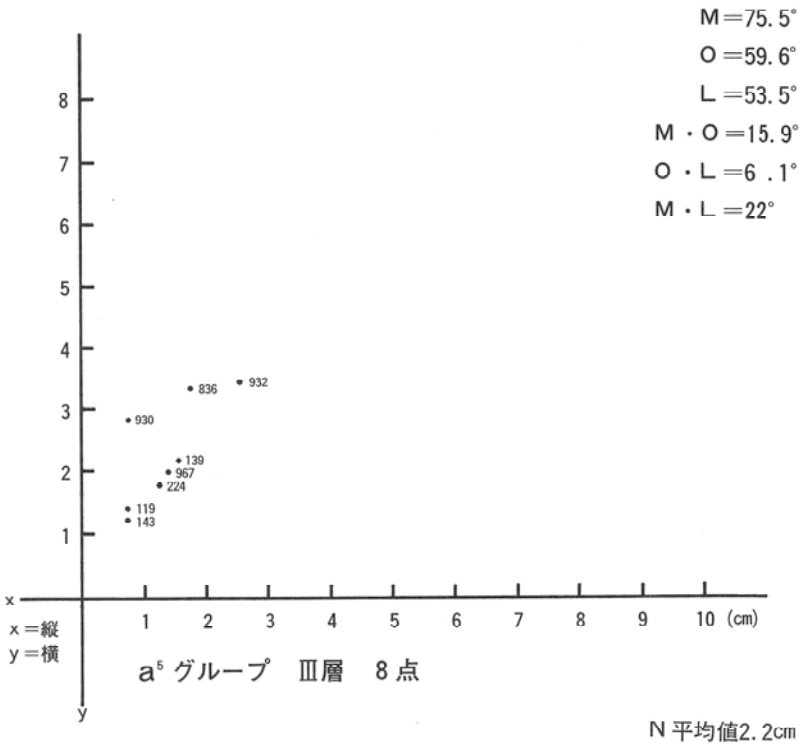
第15表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a² グループ計測表



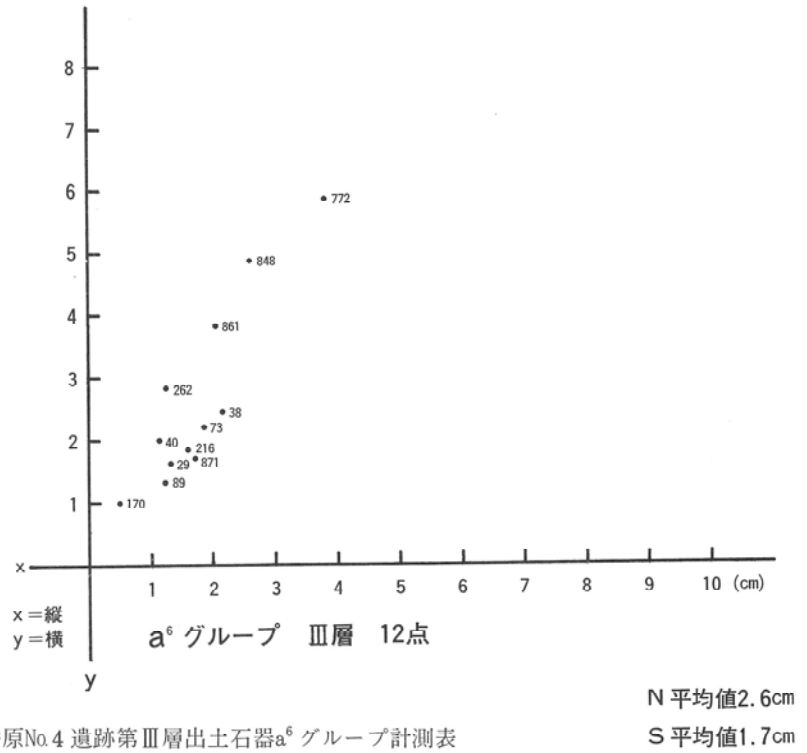
第16表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a³ グループ計測表



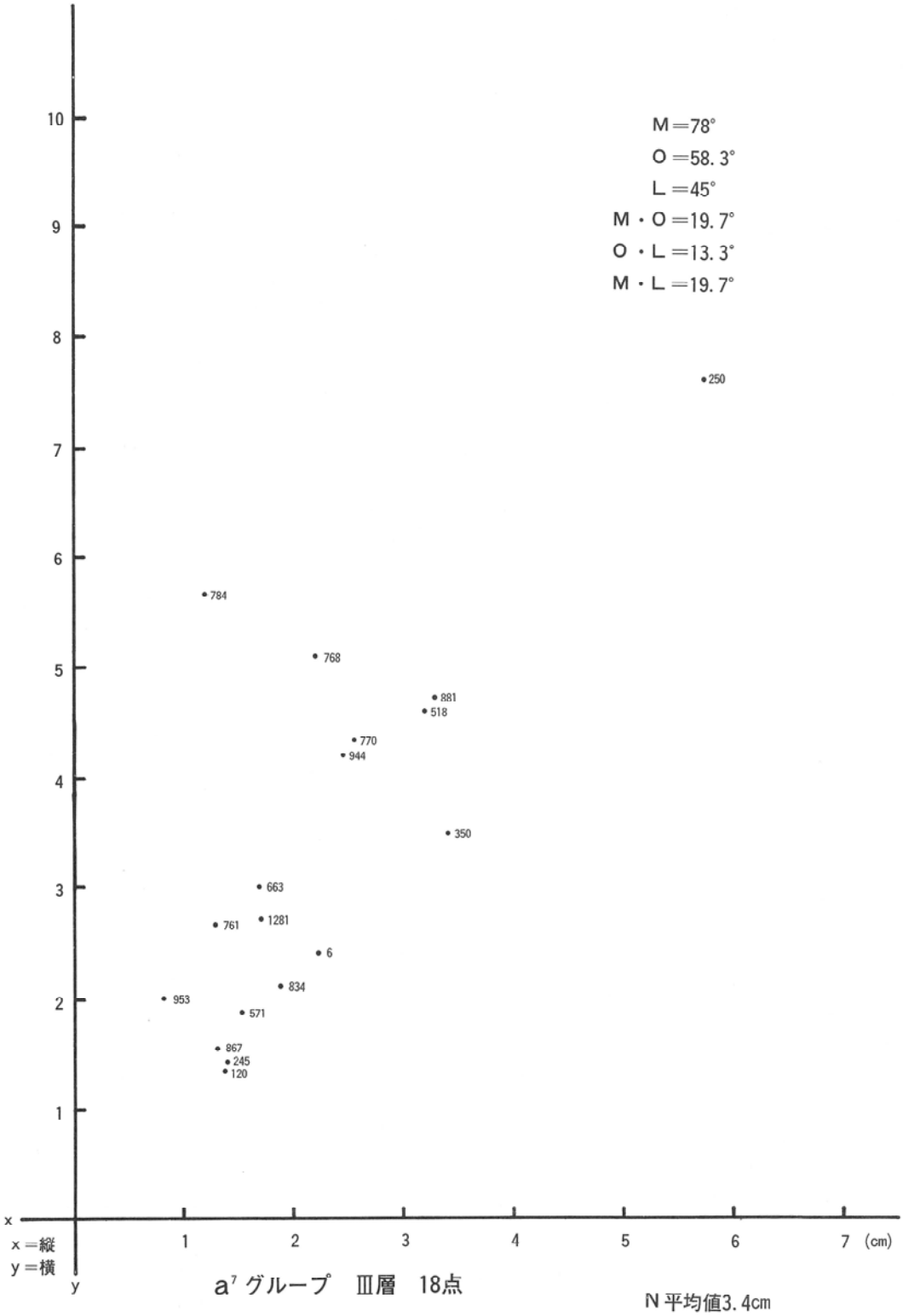
第17表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a⁴ グループ計測表



第18表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a^5 グループ計測表



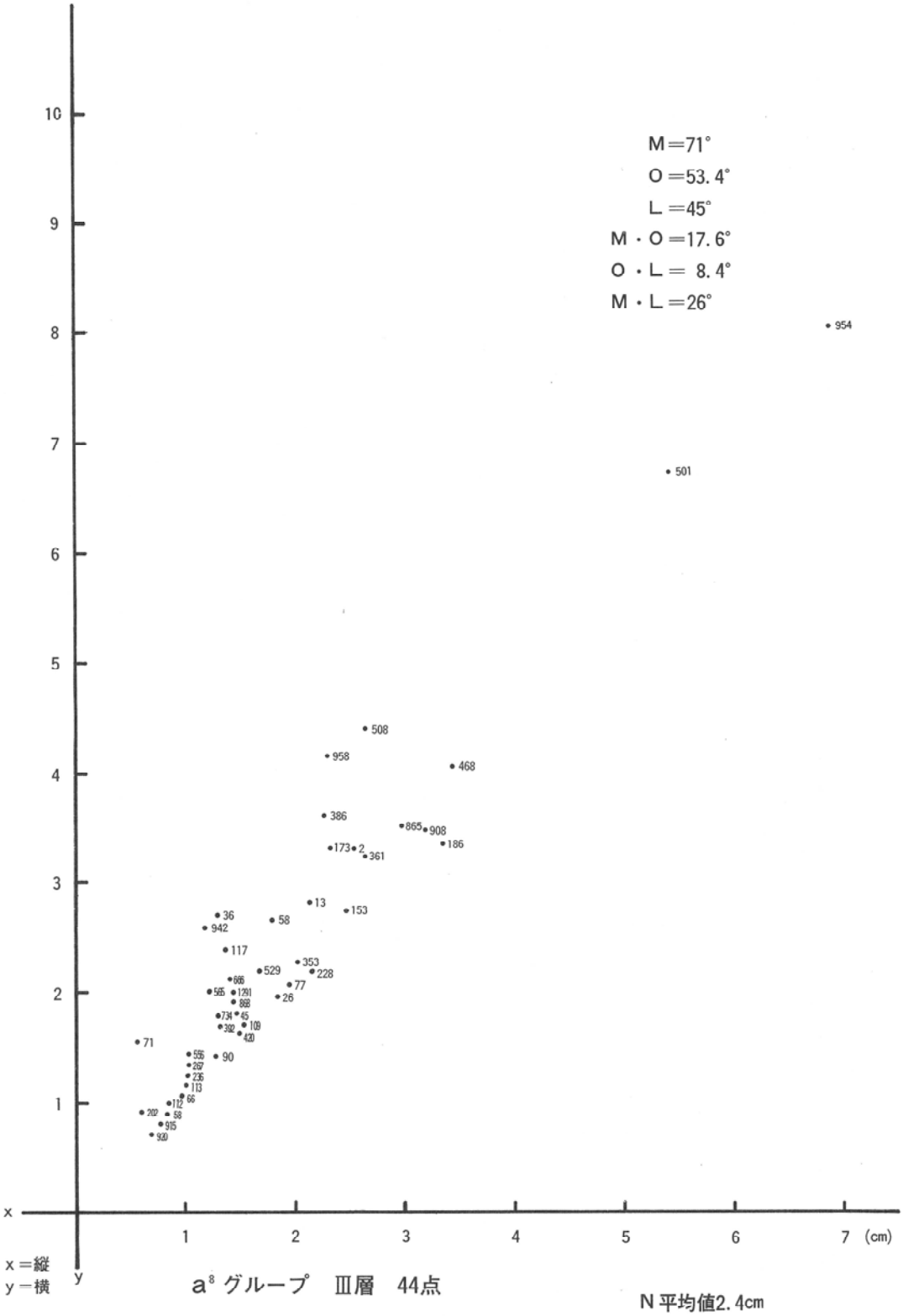
第19表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a^6 グループ計測表



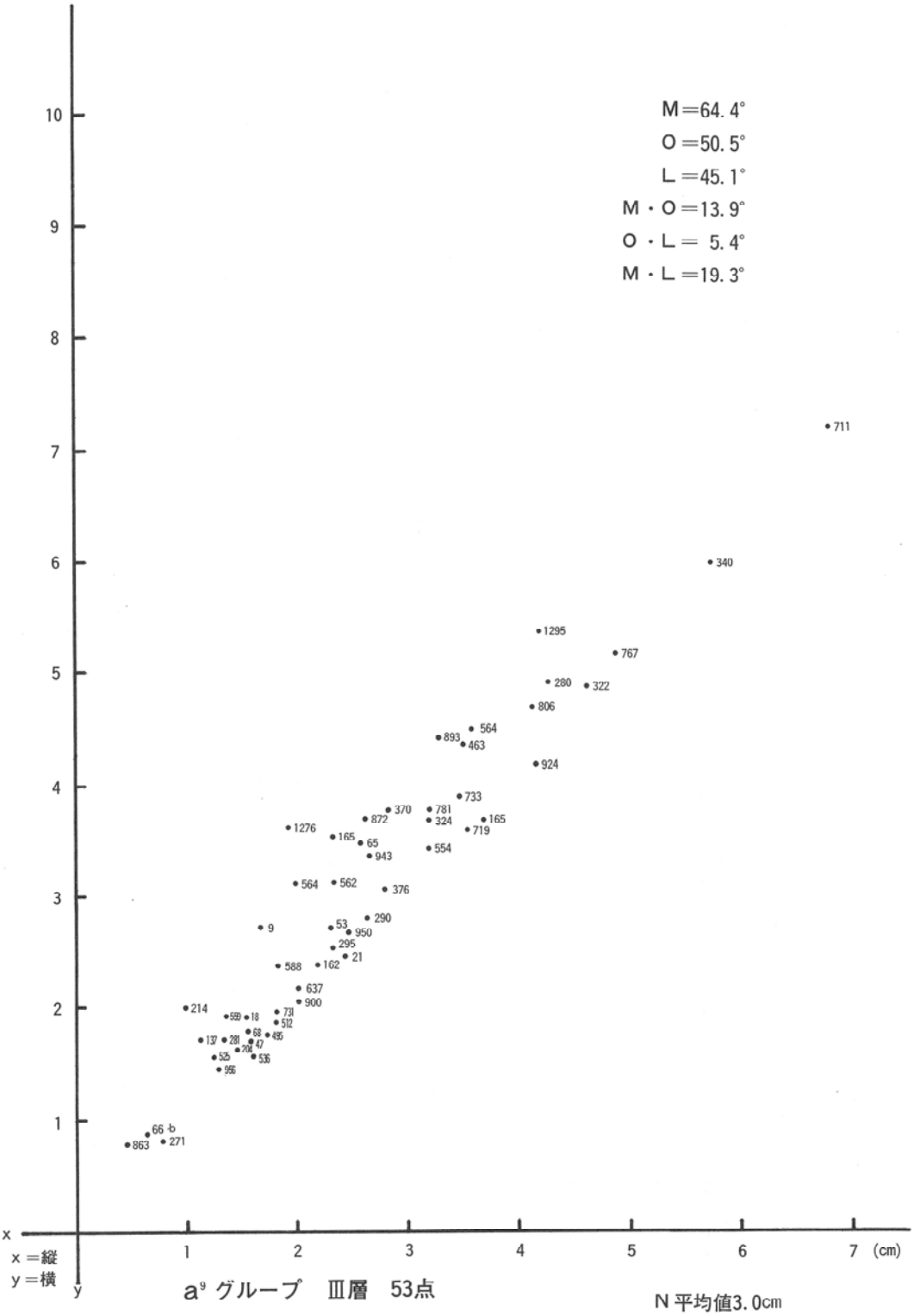
a⁷ グループ　Ⅲ層　18点

N 平均値3.4cm
S 平均値2.1cm

第20表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a⁷ グループ計測表



第21表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a⁸ グループ計測表

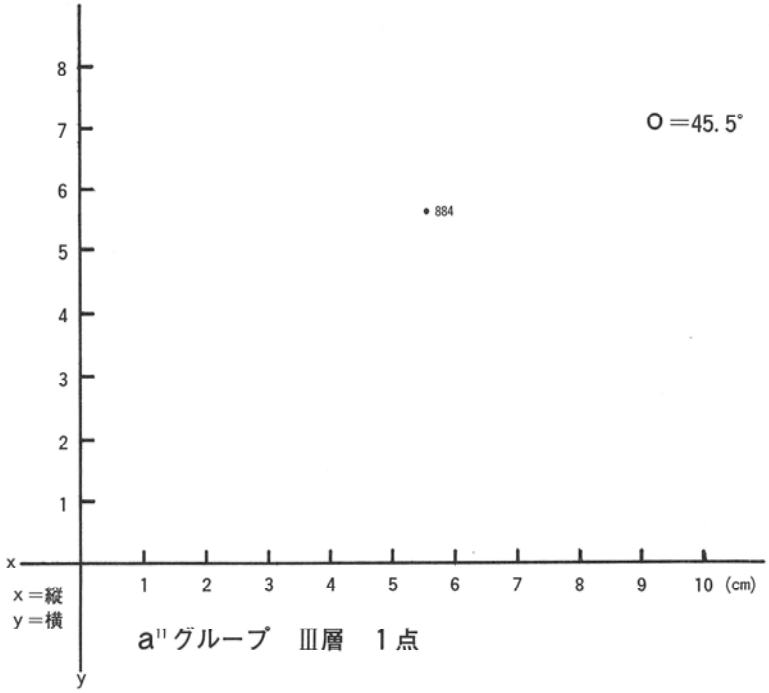


a⁹ グループ　Ⅲ層　53点

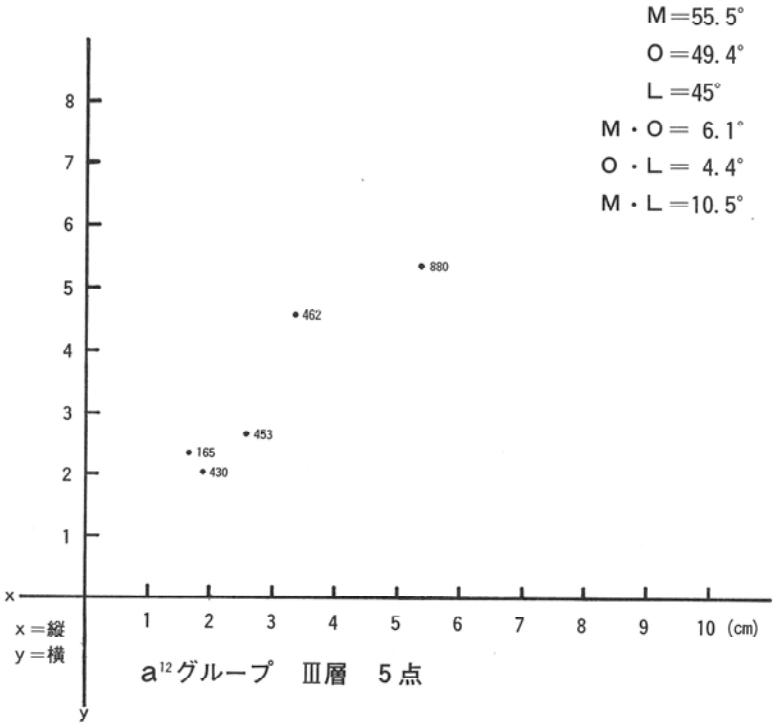
N 平均値3.0cm

S 平均値2.5cm

第22表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a⁹ グループ計測表

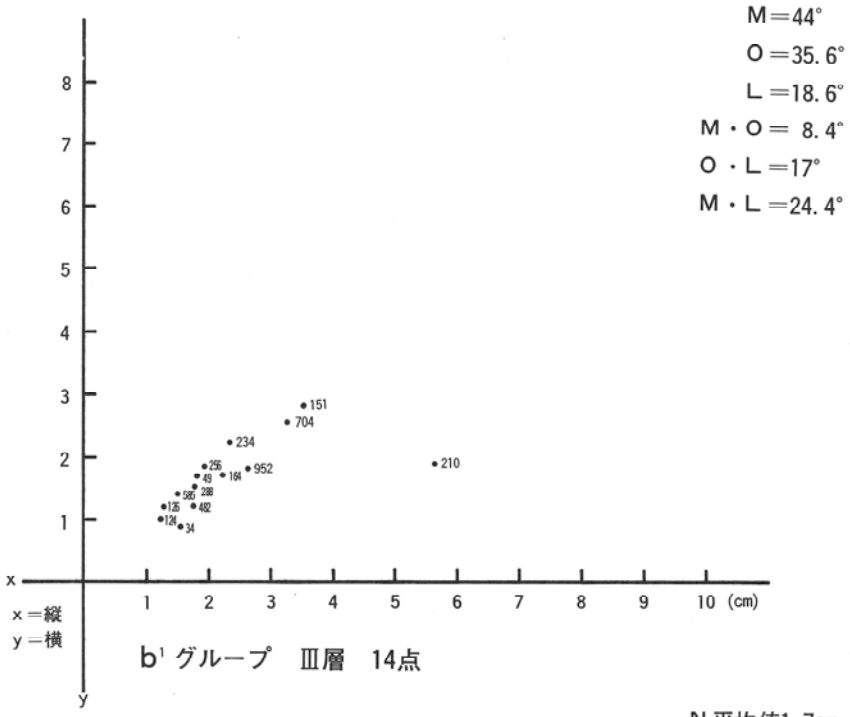


第23表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a11グループ計測表

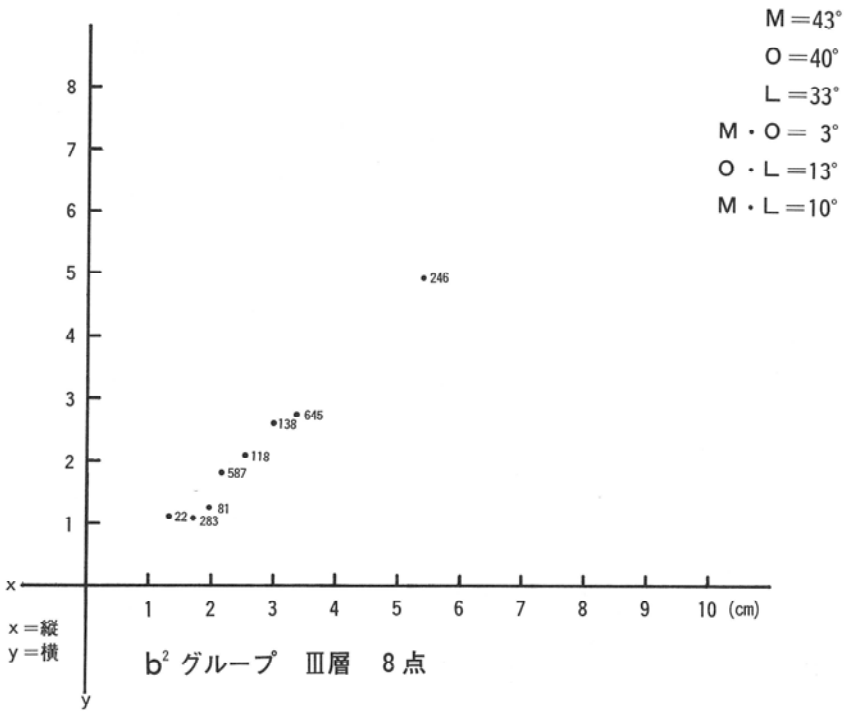


N平均値3.4cm
S平均値2.9cm

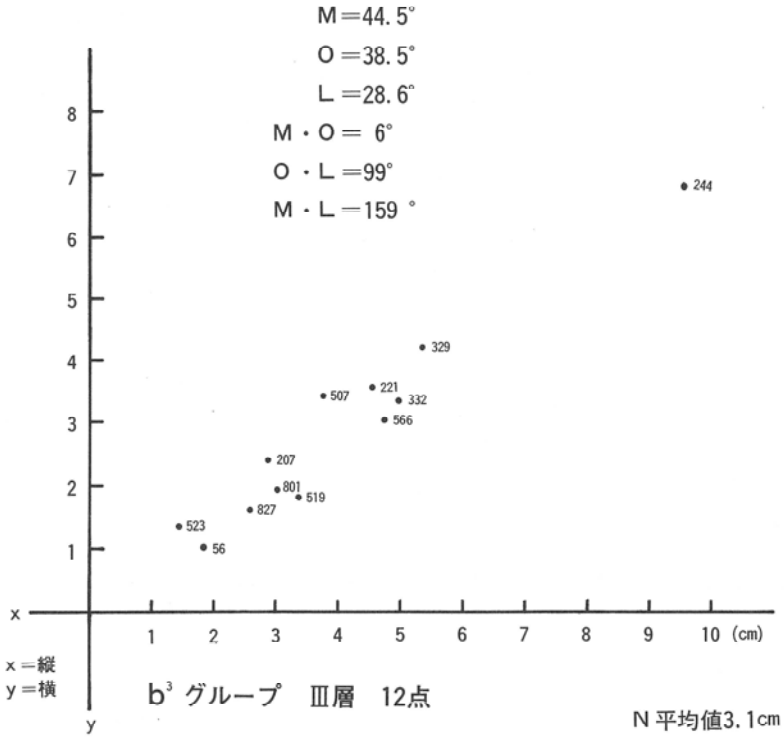
第24表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器a12グループ計測表



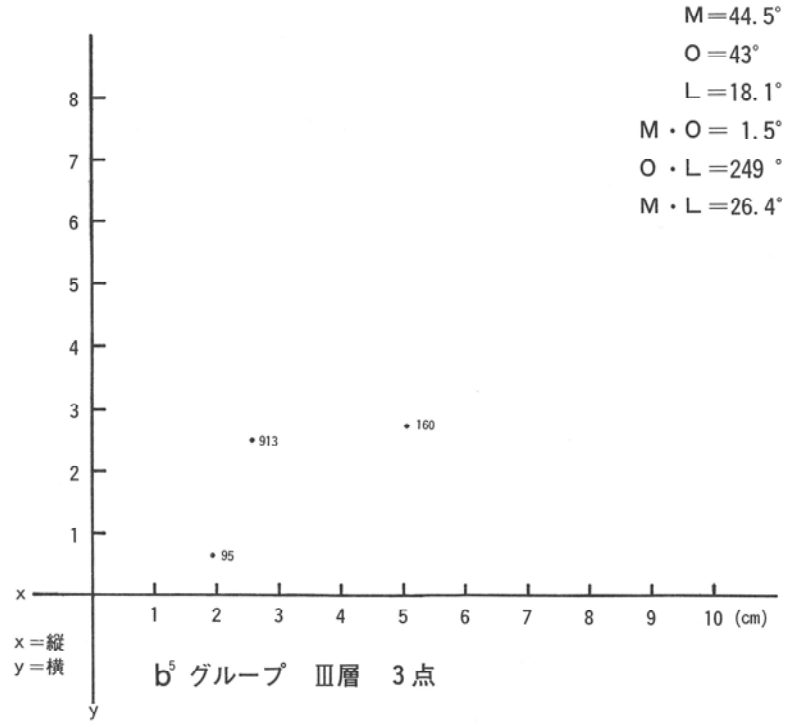
第25表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b¹ グループ計測表



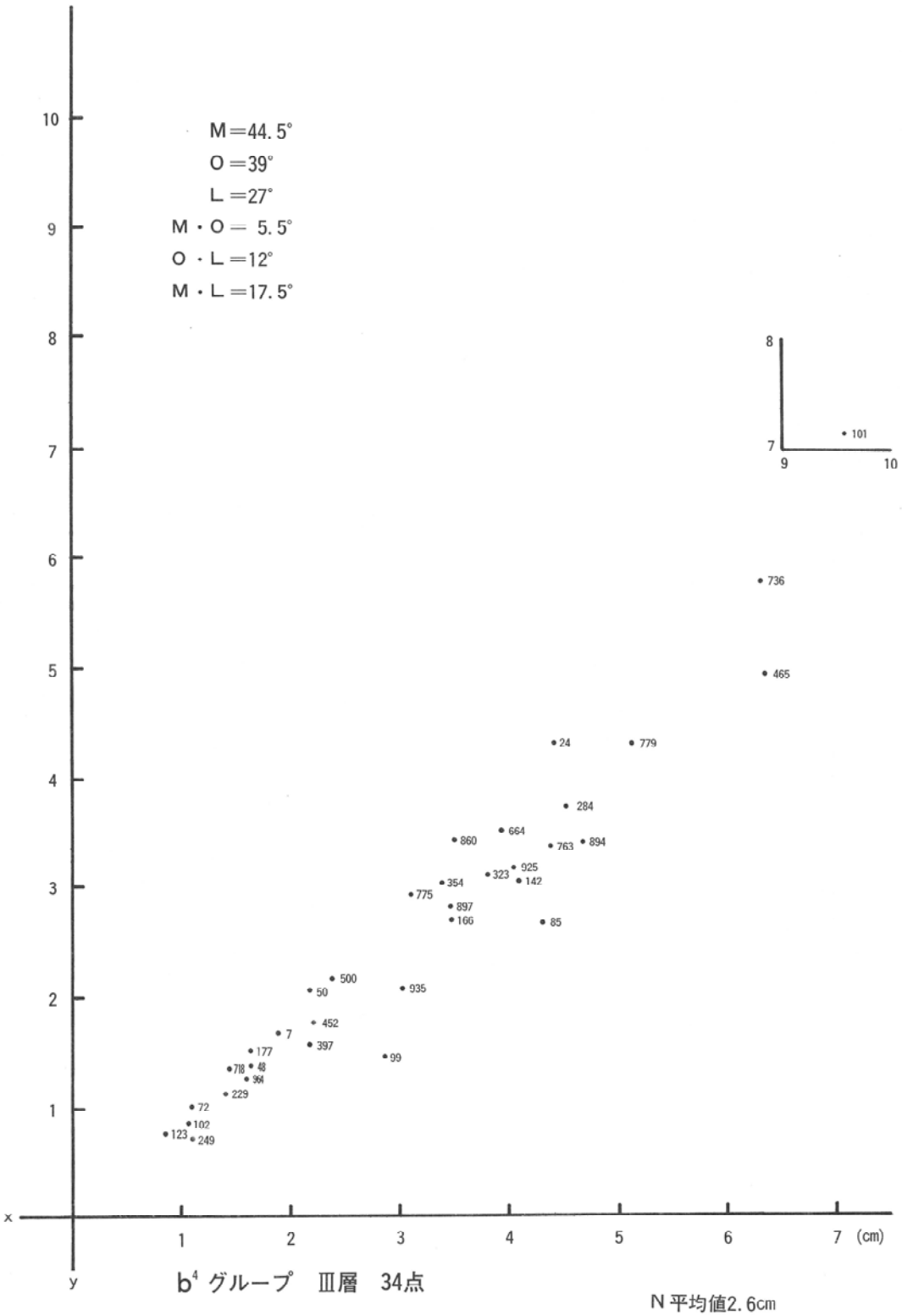
第26表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b² グループ計測表



第27表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b³ グループ計測表

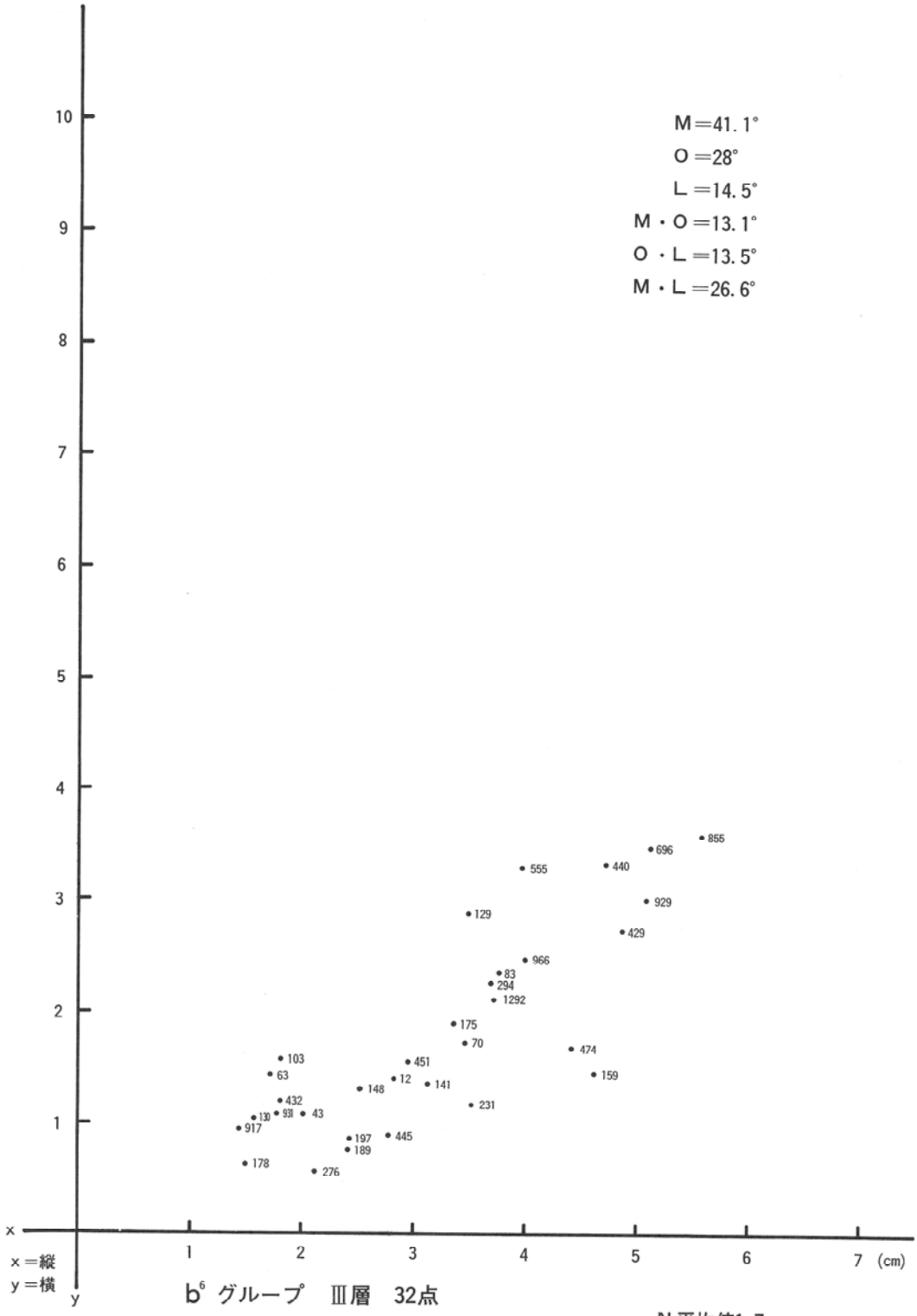


第28表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b⁵ グループ計測表



N 平均値2.6cm
S 平均値3.2cm

第29表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b4 グループ計測表

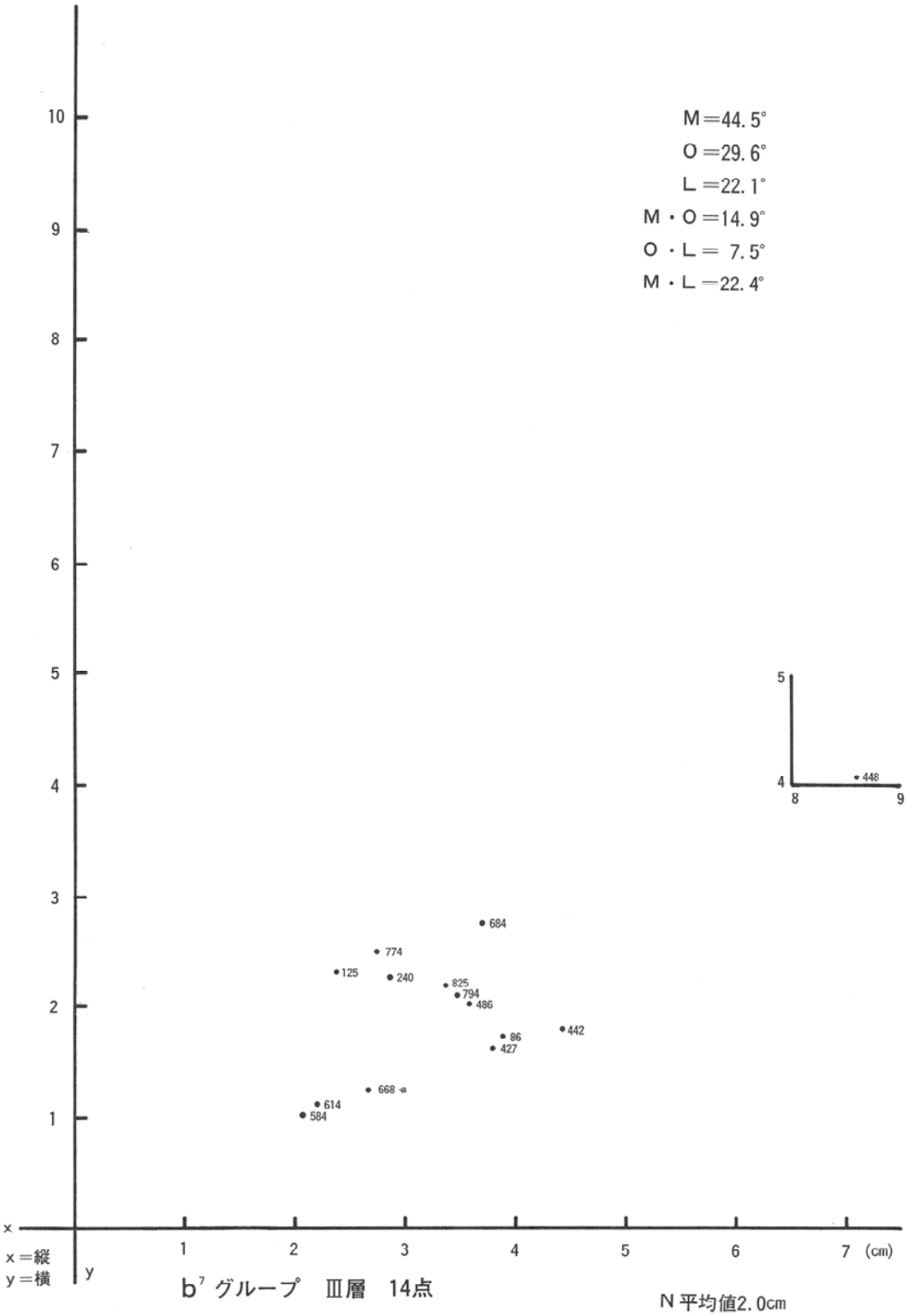


b^6 グループ　Ⅲ層　32点

N 平均値1.7cm

S 平均値3.1cm

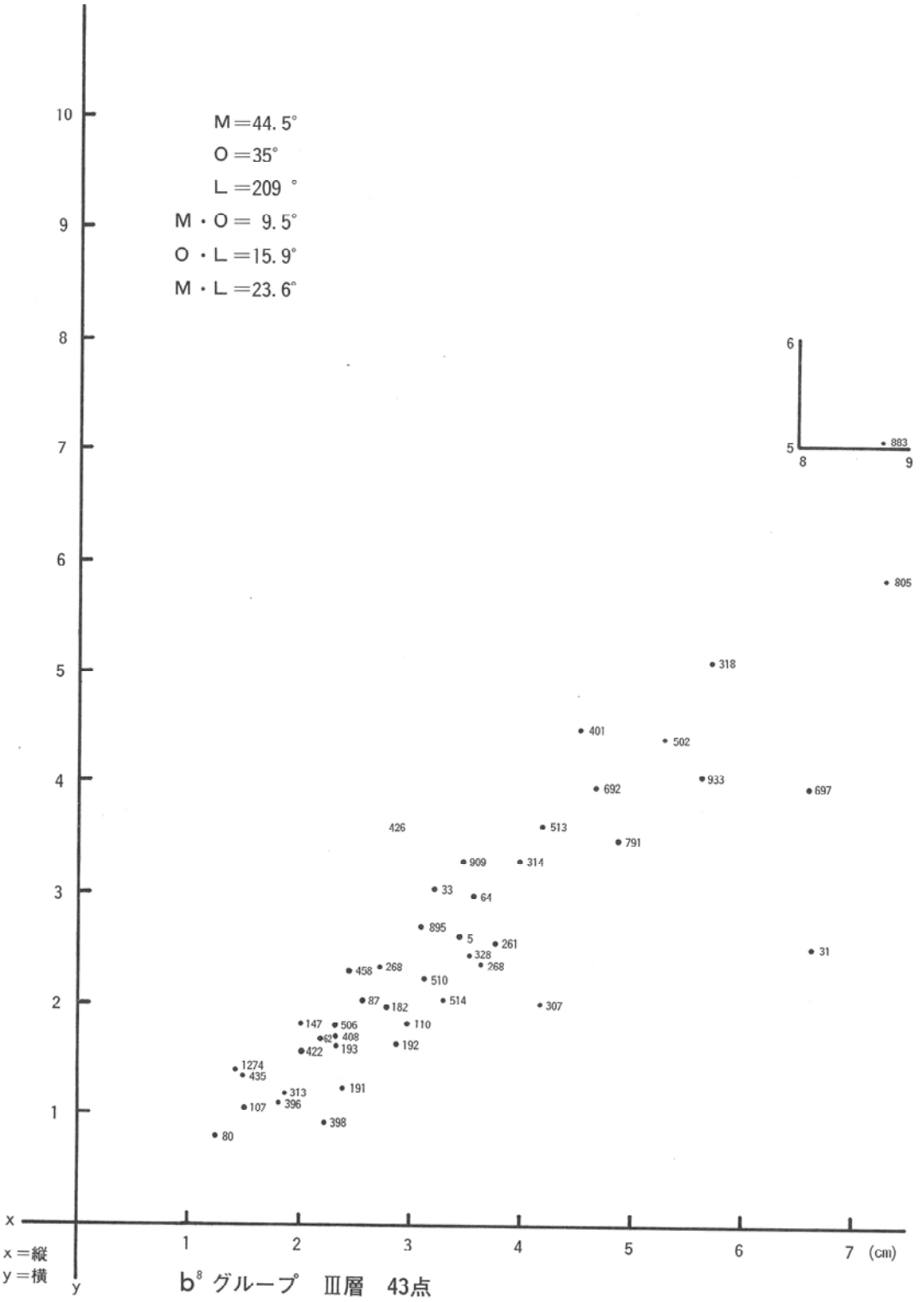
第30表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b^6 グループ計測表



b⁷ グループ　Ⅲ層　14点

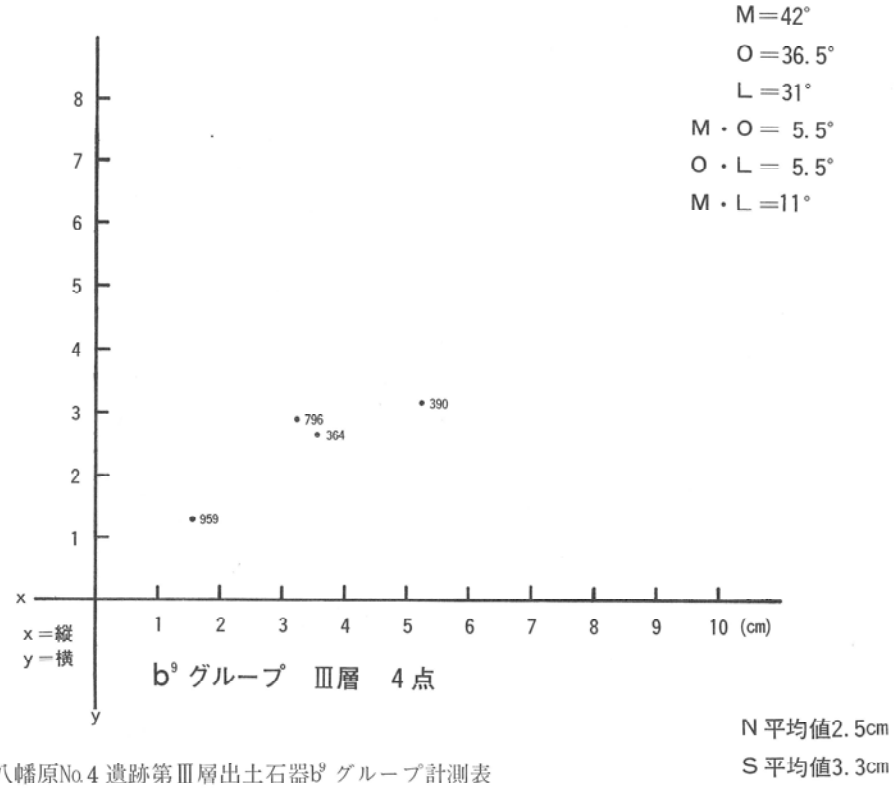
N 平均値2.0cm
S 平均値3.5cm

第31表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b⁷ グループ計測表



N 平均値2.5cm
S 平均値3.5cm

第32表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b⁸ グループ計測表



第33表八幡原No.4 遺跡第Ⅲ層出土石器b^9 グループ計測表

形態はa^1～a^{12}・b形態はb^1～b^6 の21のグループにその形状をもって細別していることは第4表に詳しいが，これらのグループの縦径(N)横径(S)を表化し，再計測における平均値と計測幅を角度に現わしたのが次の表である。

表では，縦径をy軸・横径をx軸とし，得られた測定箇所にドット（点）とその遺物番号を記している。さらに縦形の上限幅をM・同下限幅をL・MとLの平均をOとして，縦軸（y）と横軸（x）の接点（0cm）を線で結んだのが，M・O・Lの各主軸線であり，x軸から角度を測定することによって，各グループの平均値（度数）を得ることができるのである。すでにN＞Sは縦・S＞Nは横と区分しているので，y軸とx軸の角度が90°であるため，平均角度が45°となり，45°以上を有するものa形態，45°以内を有するものb形態と簡単に判別することが可能である。

また，O点（平均線）からMO，OL，MLの争度の測定値より，各グループに属する計測幅を知ることができ，MOの値が多い程，縦長の剥片となり，LOの値比が大の場合は横径の剥片となり，両者の傾比を知ることができ，MLの角度の広がり差位によって剥片の企画性（偶然の可能性が相当高いことも考慮して）や意図する剥片の形を示唆することも言えよう。

今回は資料不足と同様な参考資料がないことからあえて冒険はせず，得られた結果のみの記載にとどめておく。

2）第Ⅲ層出土の剝片形態

a形態　〔第14表～第24表〕

a^1グループ 22点＝10.9%(3), a^2グループ 6点＝3 %(8), a^3グループ 12点＝ 5.9%(6)

a^4グループ 21点＝10.4%(4), a^5グループ 44点＝ 4 %(7), a^6グループ 12点＝ 5.9%(6)

a^7グループ 18点＝ 8.9%(5), a^8グループ 44点＝21.8%(2), a グループ 53点＝26.2%(1)

a^{11}グループ 1点＝ 0.5%(10), a^{12}グループ 5点＝ 2.5%(9)

総　計　202点

b形態　〔第25表～第33表〕

b^1グループ 14点＝ 8.5%(3), b^2グループ 8点＝ 4.9%(5), b^3グループ 12点＝ 7.3%(4)

b^4グループ 34点＝20.7%(2), b^5グループ 3点＝ 1.8%(7), b^6グループ 32点＝19.5%(2)

b^7グループ 14点＝ 8.5%(3), b^8グループ 43点＝26.2%(1), b^9グループ 4点＝ 2.4%(6)

総　計　164点

3）第Ⅳ層出土の剝片形態

a形態　〔第34表～第45表〕

a^1グループ 65点＝ 5.7%(8), a^2グループ138点＝12.1%(4), a^3グループ139点＝12.2%(3)

a^4グループ186点＝16.4%(2), a^5グループ124点＝10.9%(5), a^6グループ 39点＝ 3.4%(9)

a^7グループ 69点＝ 6.1%(7), a^8グループ108点＝ 9.5%(6), a^9グループ195点＝17.2%(1)

a^{10}グループ 11点＝ 1 %(12), a^{11}グループ 24点＝ 2.1%(11), a^{12}グループ 38点＝ 3.3%(10)

総　計1136点

b形態〔第46表～第54表〕

b^1グループ117点＝15.2%(3), b^2グループ 51点＝ 6.6%(7), b^3グループ 65点＝ 8.5%(6)

b^4グループ174点＝22.6%(1), b^5グループ 15点＝ 2 %(9), b^6グループ120点＝15.6%(2)

b^7グループ 91点＝11.8%(5), b^8グループ110点＝14.3%(4), b^9グループ 26点＝ 3.4%(8)

総　計 769点

4）第Ⅴ層出土の剝片形態

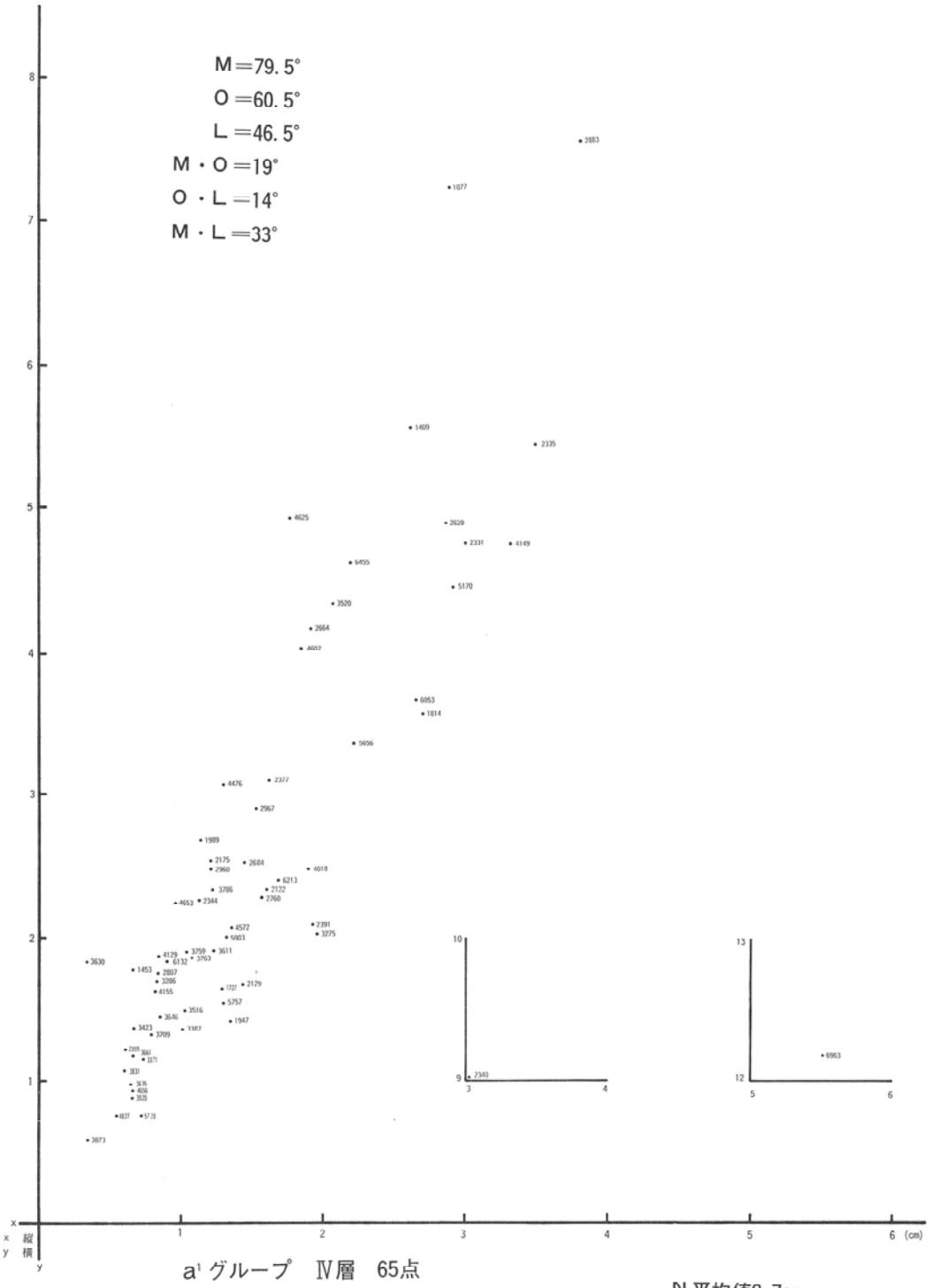
a形態　〔第55表～第66表〕

a^1グループ 10点＝ 5.0%(7), a^2グループ 13点＝ 6.5%(6), a^3グループ 2点＝ 1 %(10)

a^4グループ 20点＝10 %(5), a^5グループ 22点＝10.9%(4), a^6グループ 9点＝ 4.5%(8)

a^7グループ 27点＝13.4%(3), a^8グループ 55点＝27.7%(1), a^9グループ 37点＝18.4%(2)

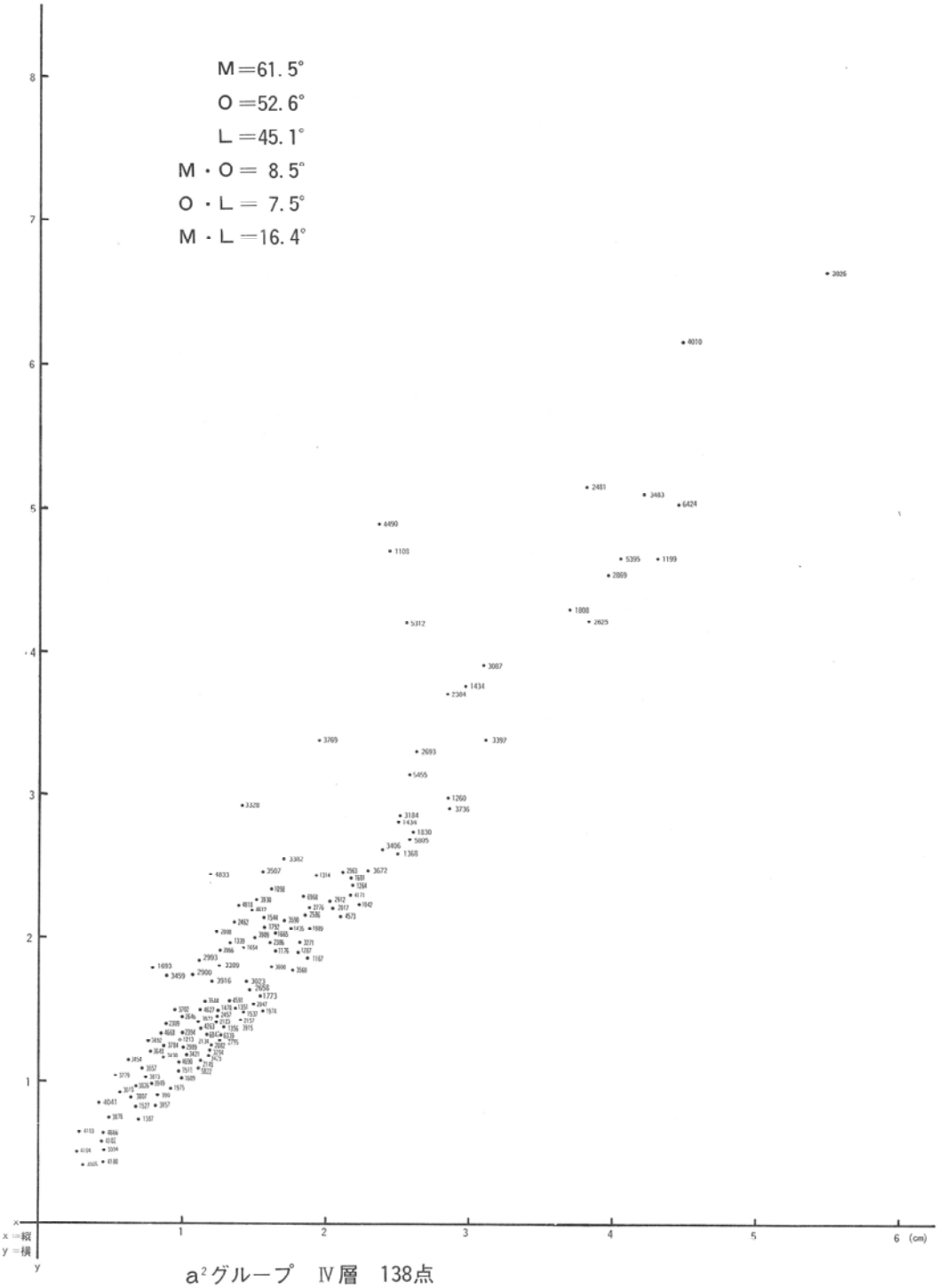
a^{11}グループ 1点＝ 0.5%(11), a^{12}グループ 5点＝ 2.5%(9)



a¹ グループ　Ⅳ層　65点

N 平均値2.7cm
S 平均値1.5cm

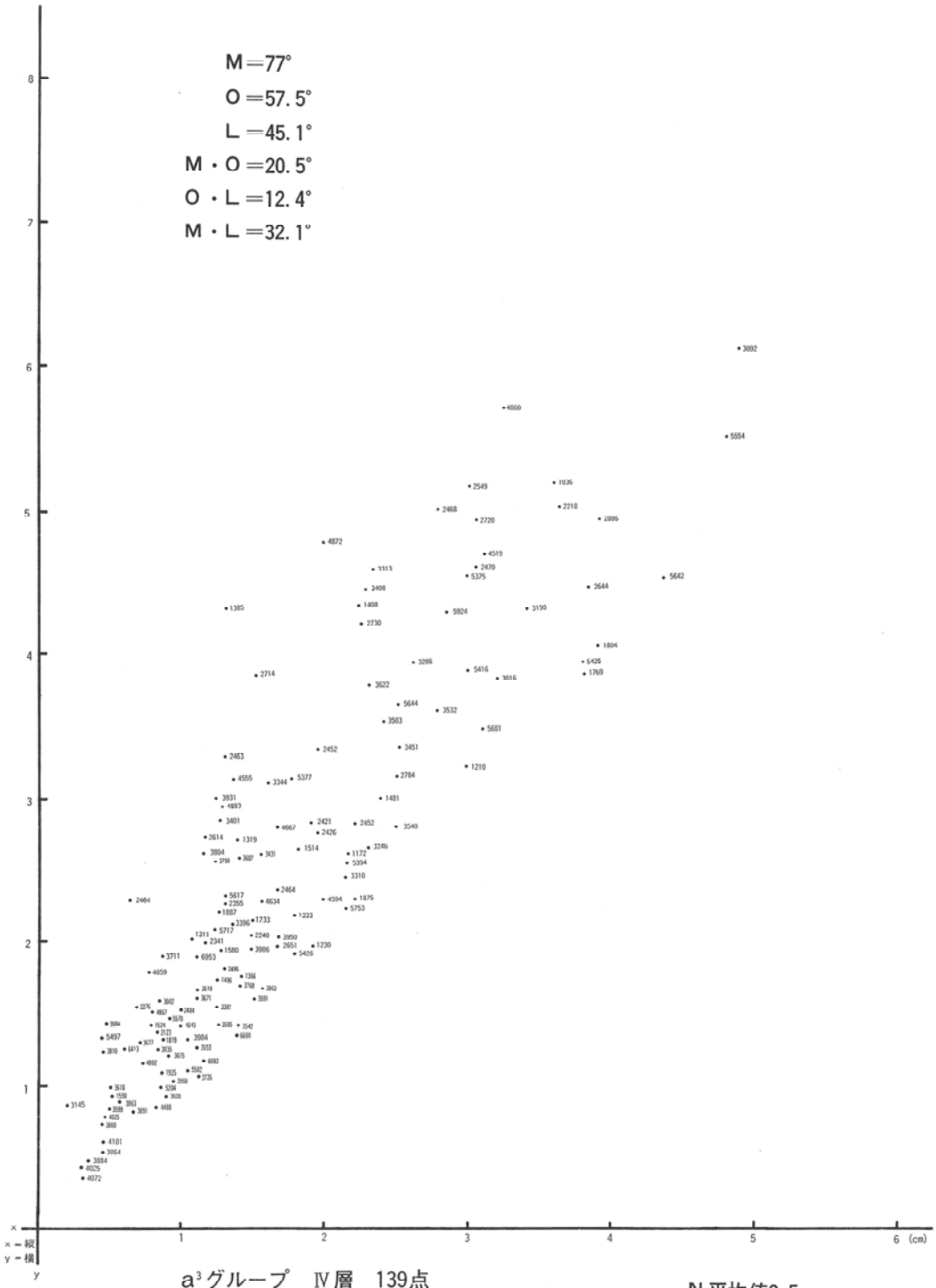
第34表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a¹ グループ計測表



a²グループ　Ⅳ層　138点

N 平均値2.0cm
S 平均値1.6cm

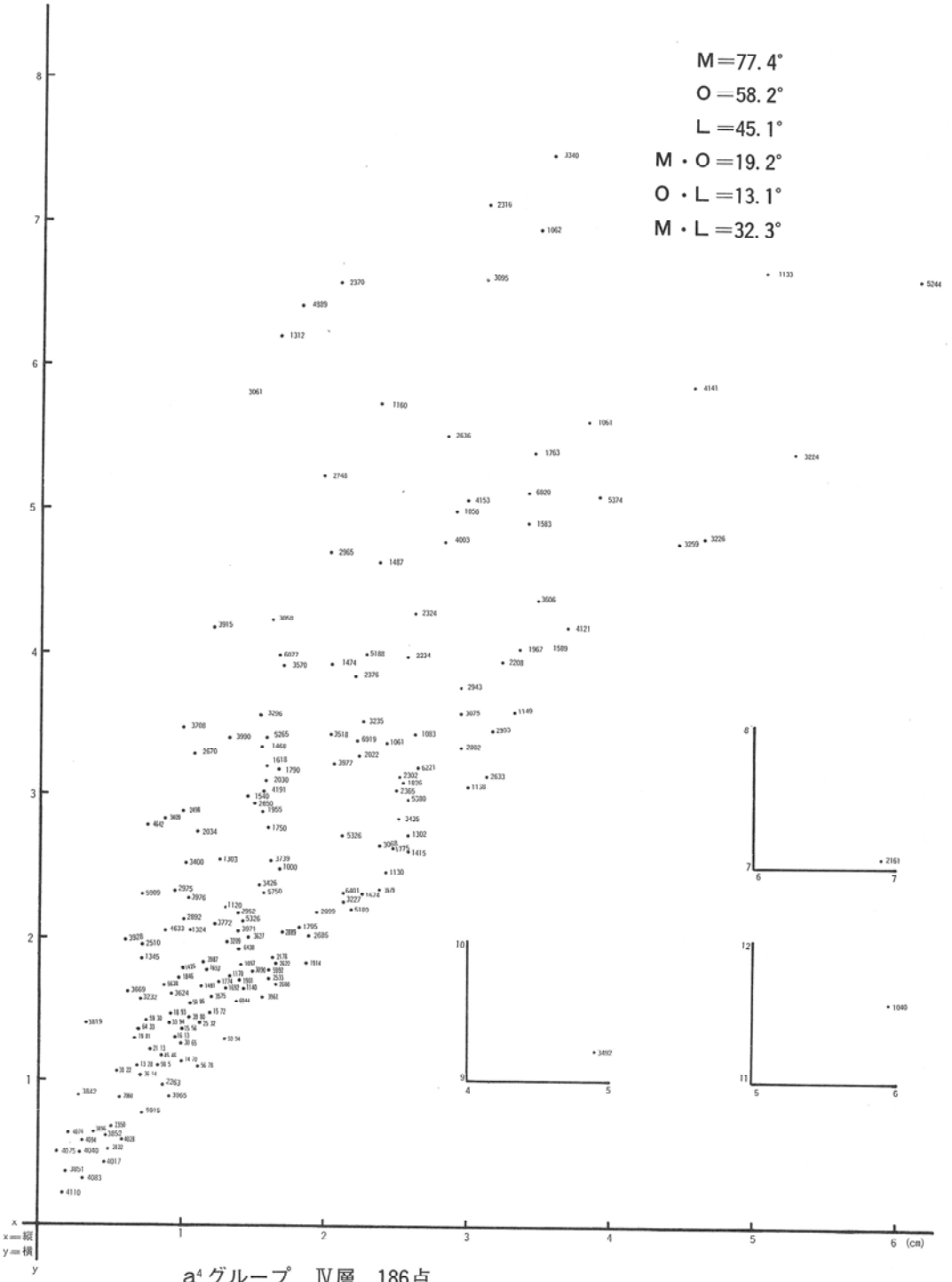
第35表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a² グループ計測表



a³グループ　Ⅳ層　139点

N 平均値2.5cm
S 平均値1.7cm

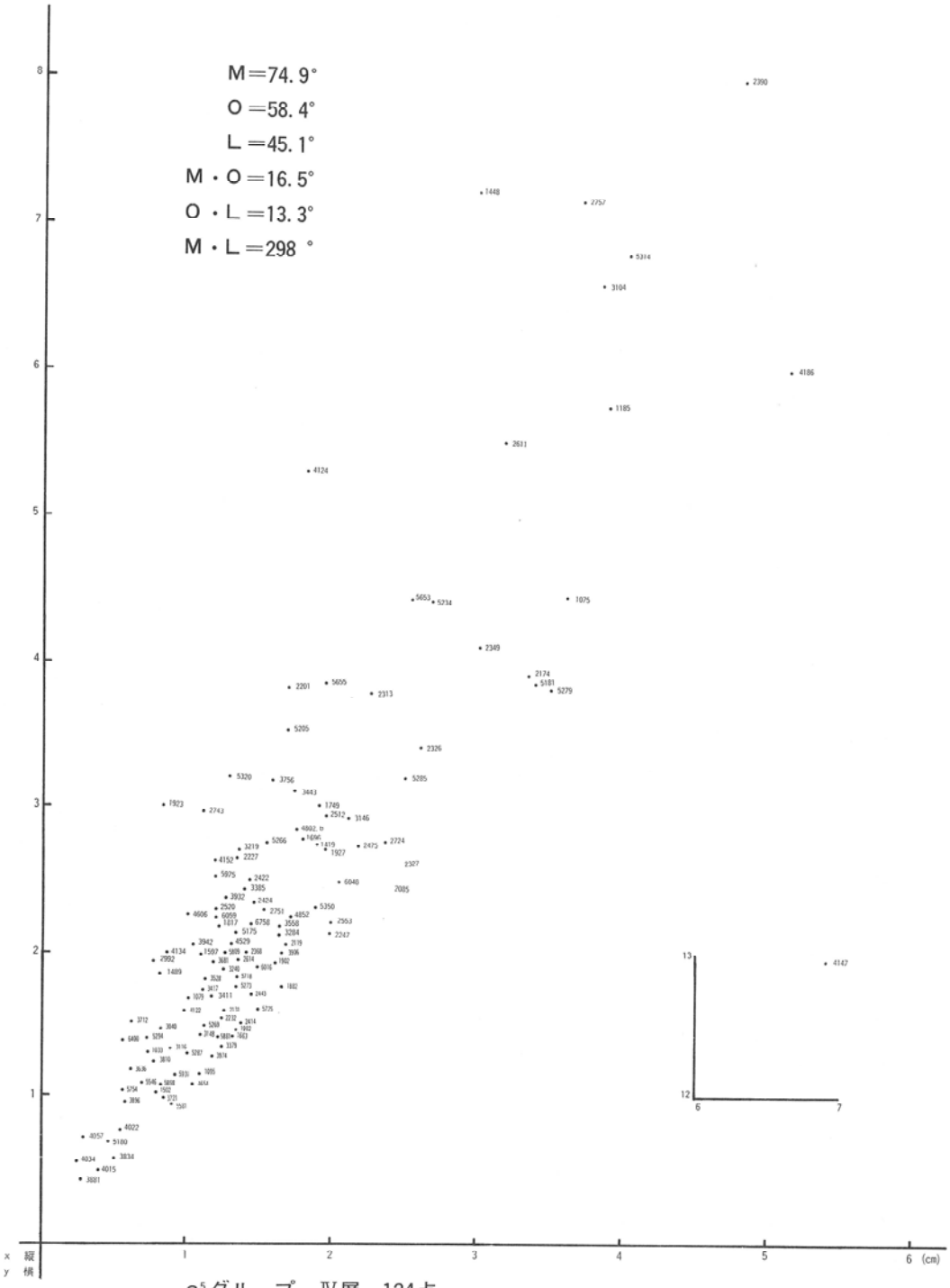
第36表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a³ グループ計測表



a⁴グループ　Ⅳ層　186点

N 平均値2.8cm
S 平均値1.8cm

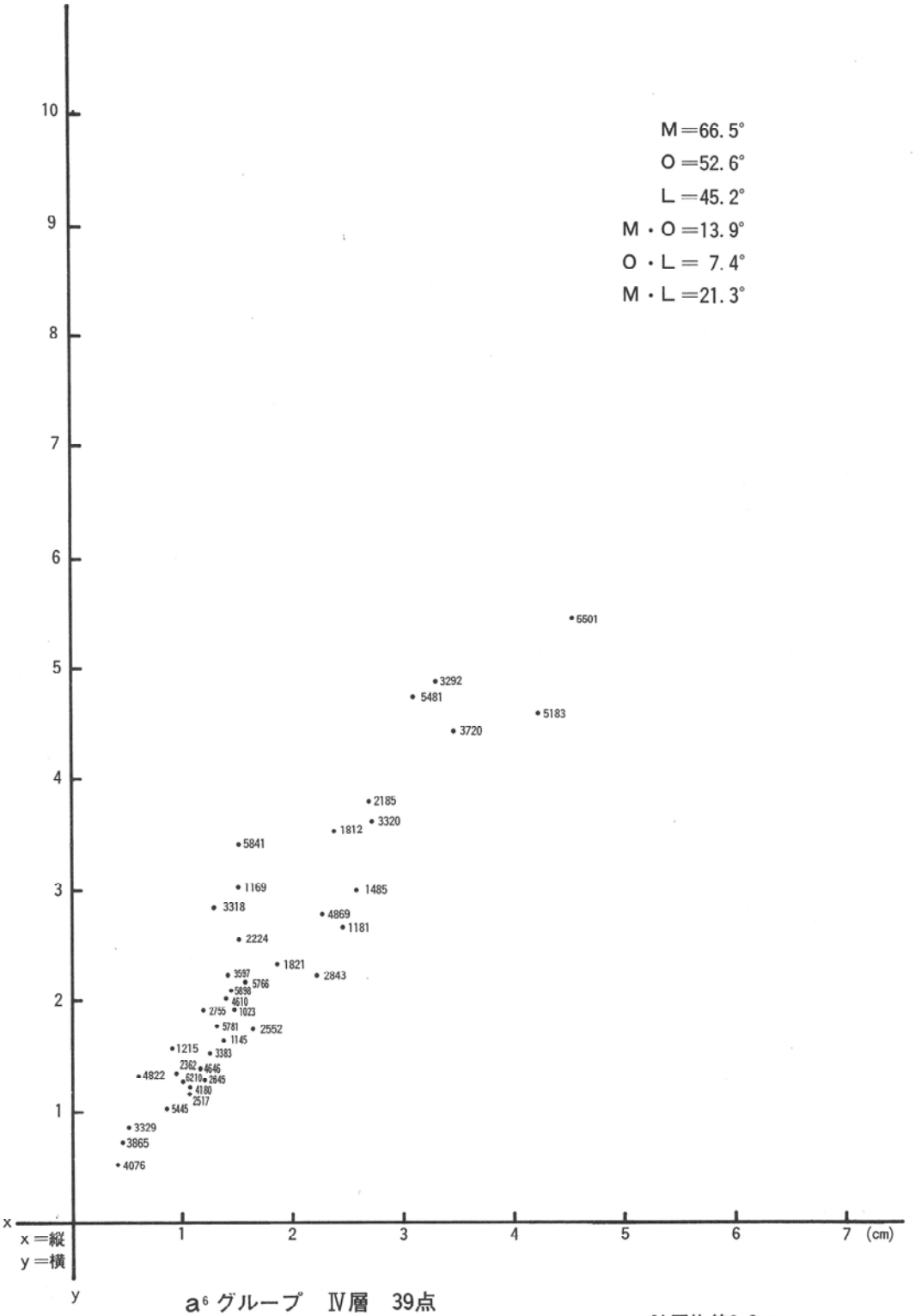
第37表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a⁴ グループ計測表



a⁵グループ　Ⅳ層　124点

N 平均値2.5cm
S 平均値1.6cm

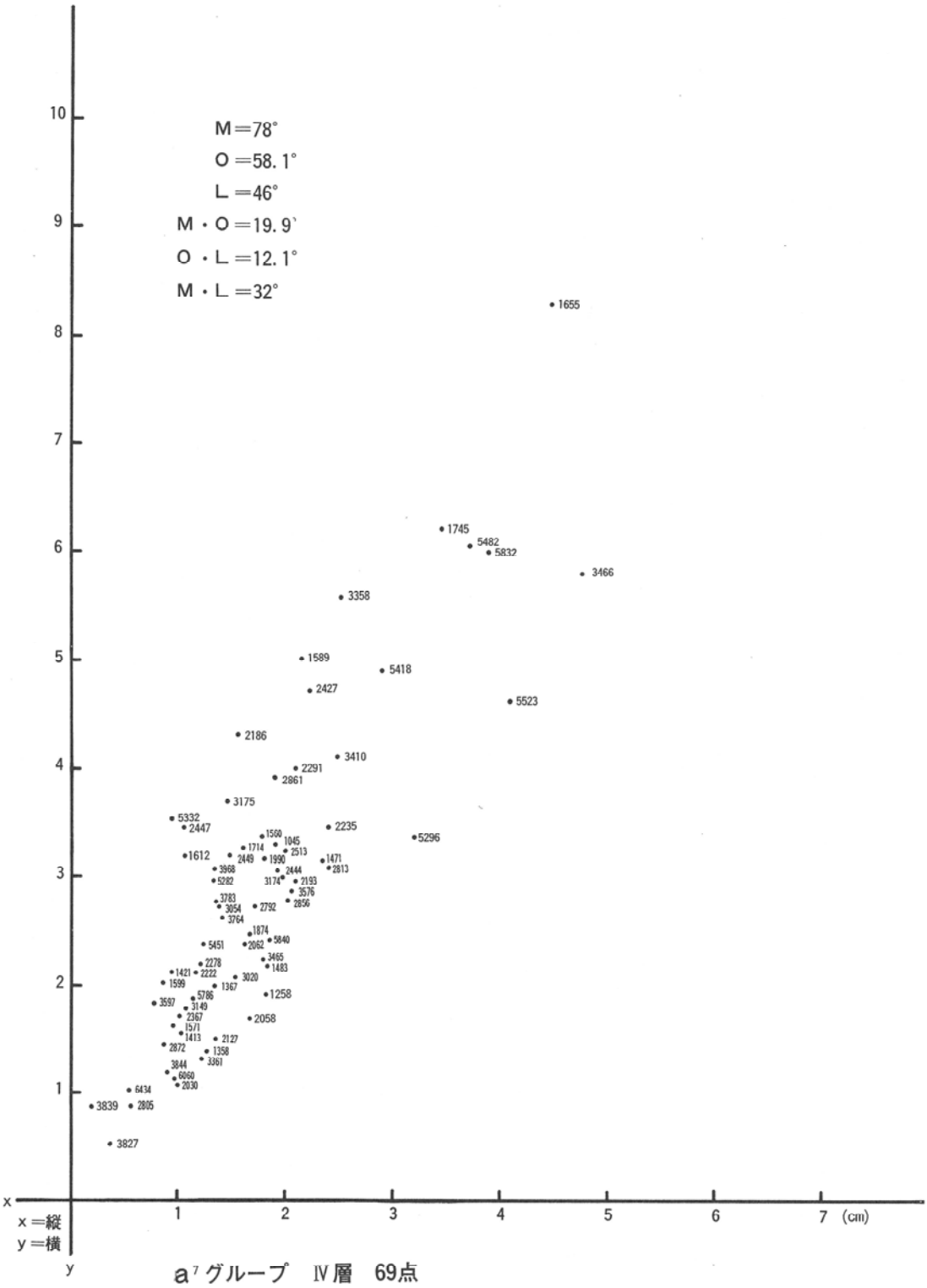
第38表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a⁵ グループ計測表



a⁶ グループ　Ⅳ層　39点

N 平均値2.3cm
S 平均値1.7cm

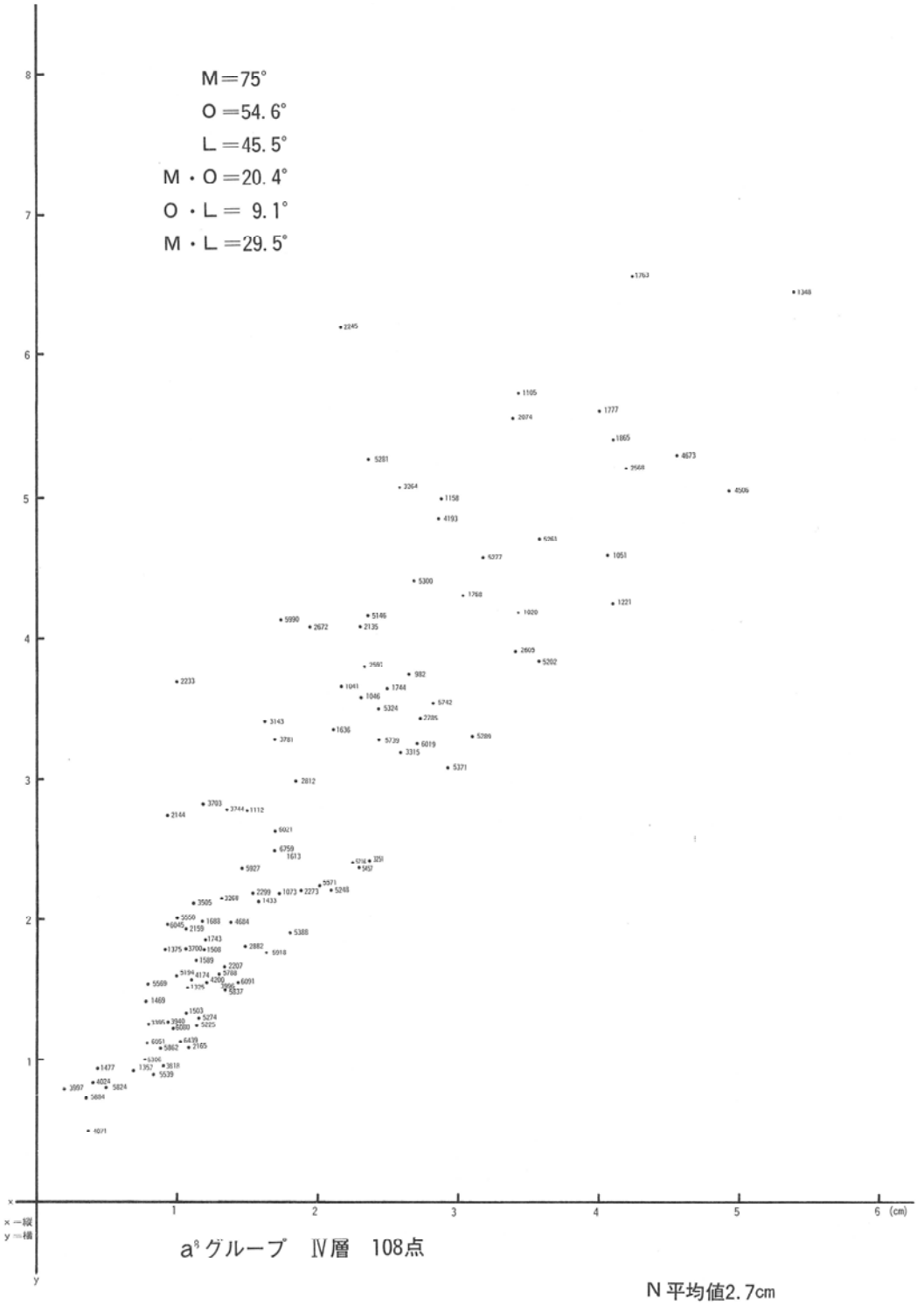
第39表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a⁶グループ計測表



a⁷グループ　Ⅳ層　69点

N 平均値2.9cm
S 平均値1.8cm

第40表八幡原No.4遺跡第Ⅳ層出土石器a⁷グループ計測表

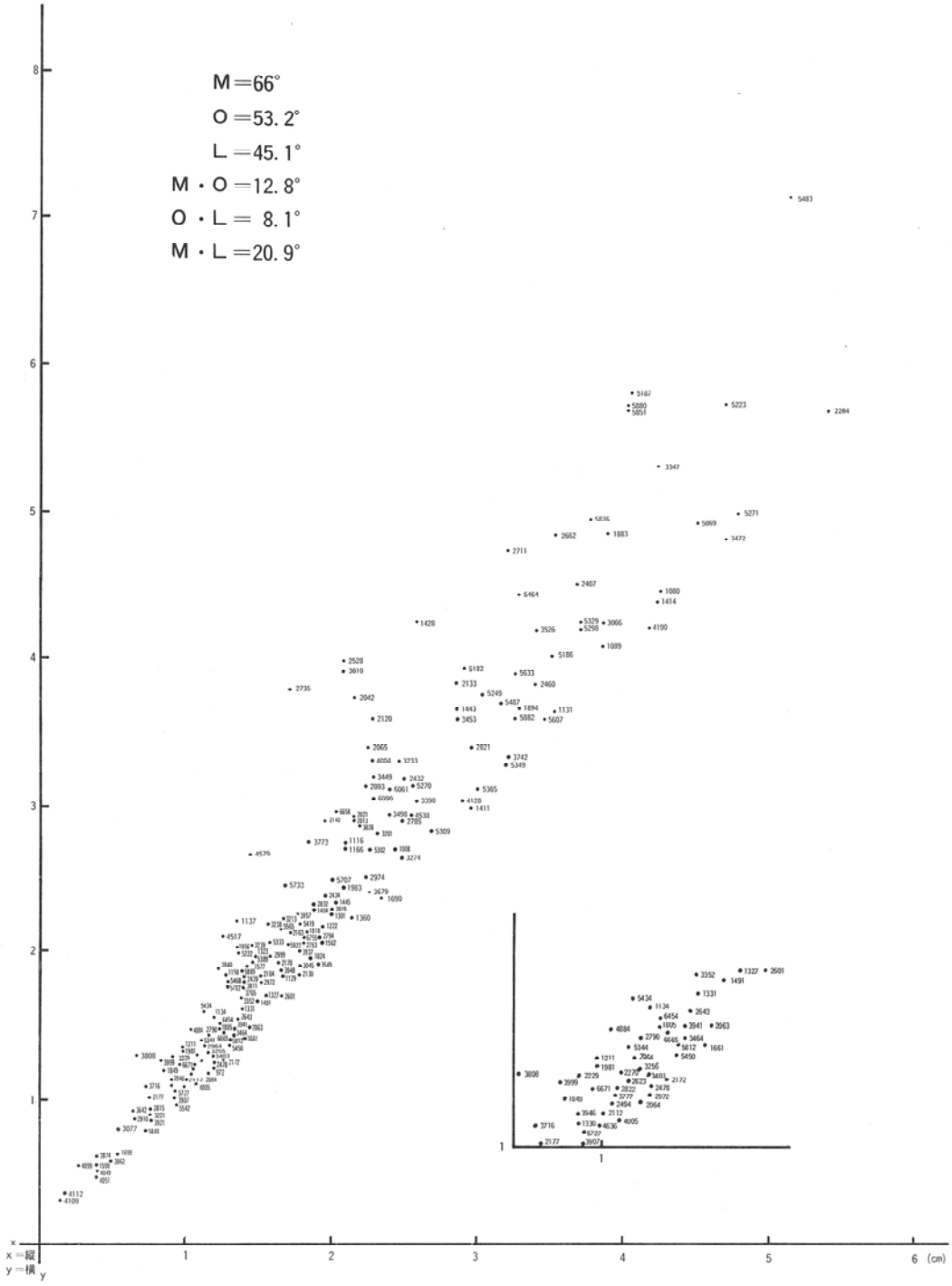


a^8 グループ　Ⅳ層　108点

N 平均値2.7cm

S 平均値1.9cm

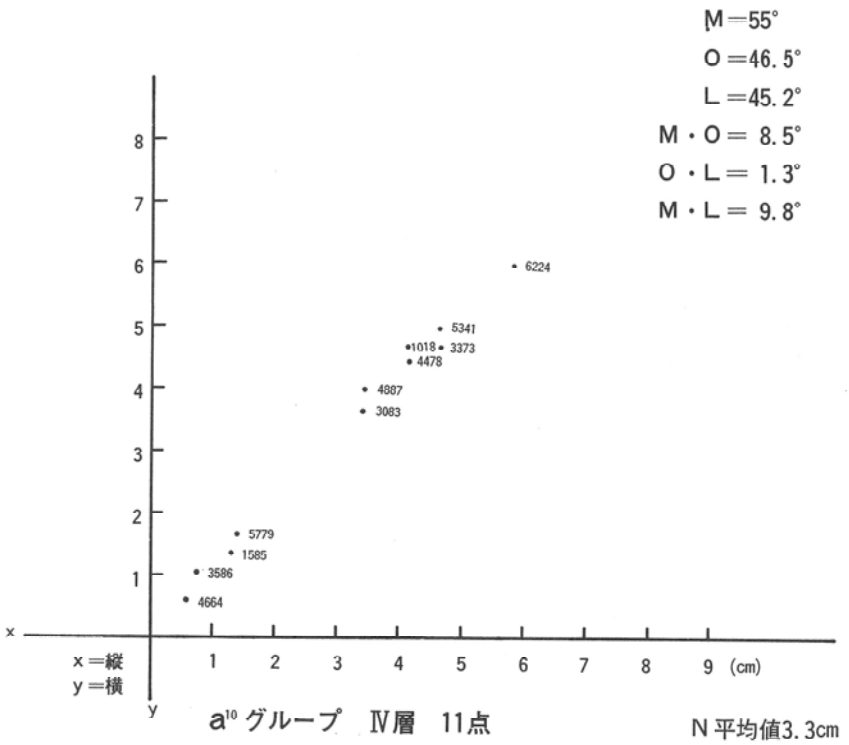
第41表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a^8 グループ計測表



a^9グループ　Ⅳ層　195点

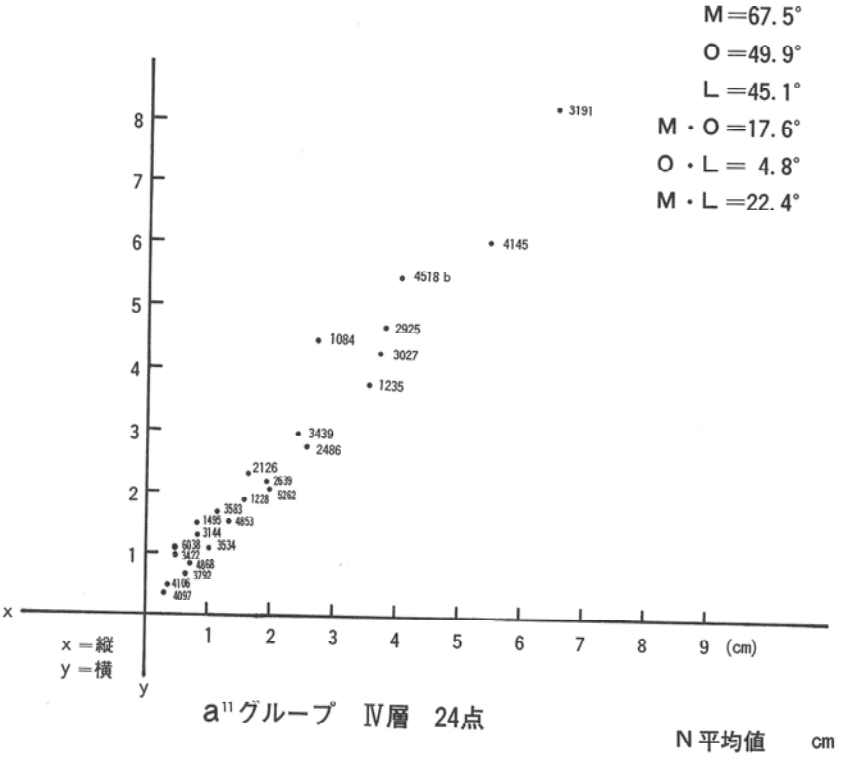
N 平均値2.4cm
S 平均値19cm

第42表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a^9 グループ計測表



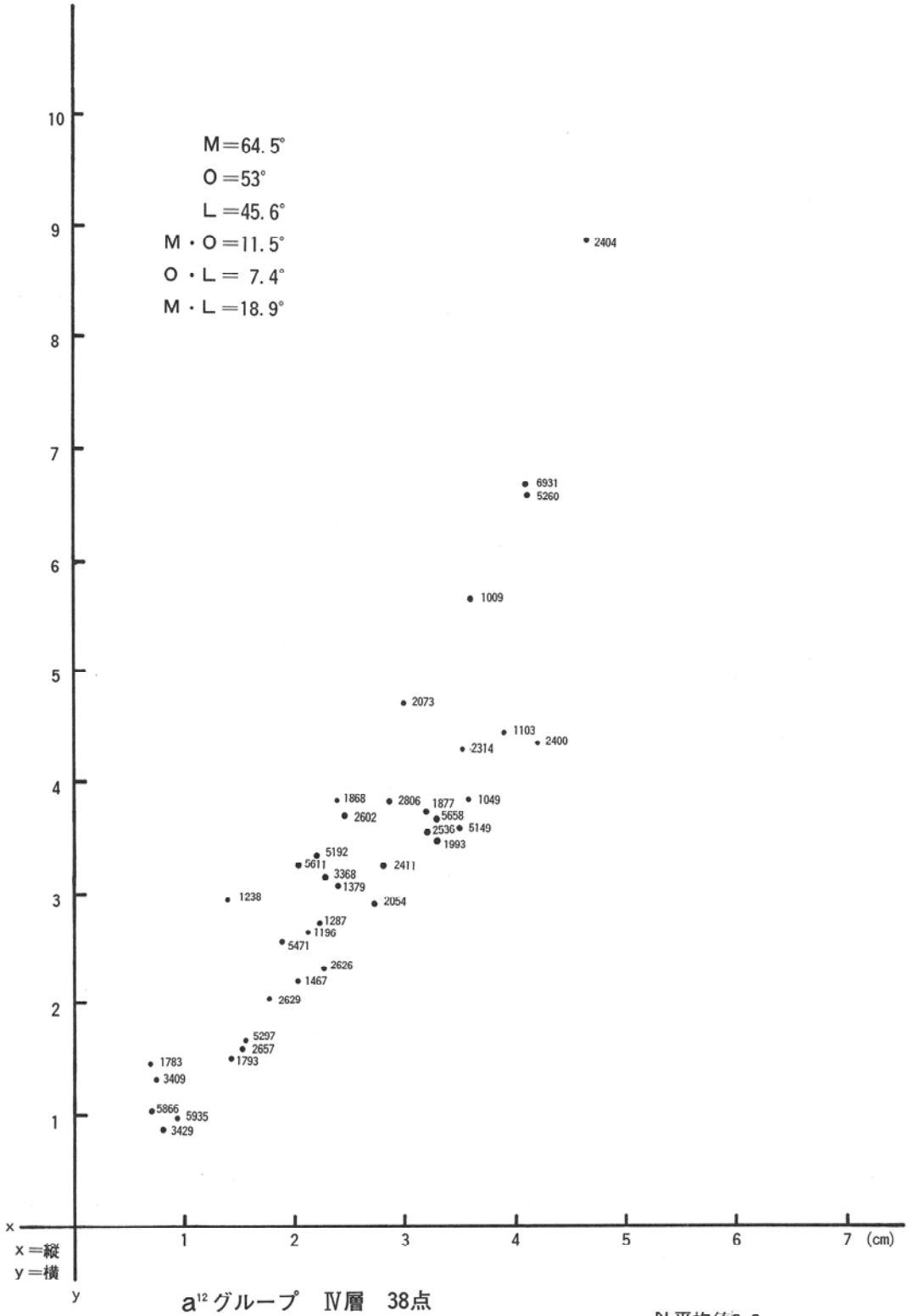
N 平均値3.3cm
S 平均値3.1cm

第43表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a[10]グループ計測表



N 平均値　　cm
S 平均値　　cm

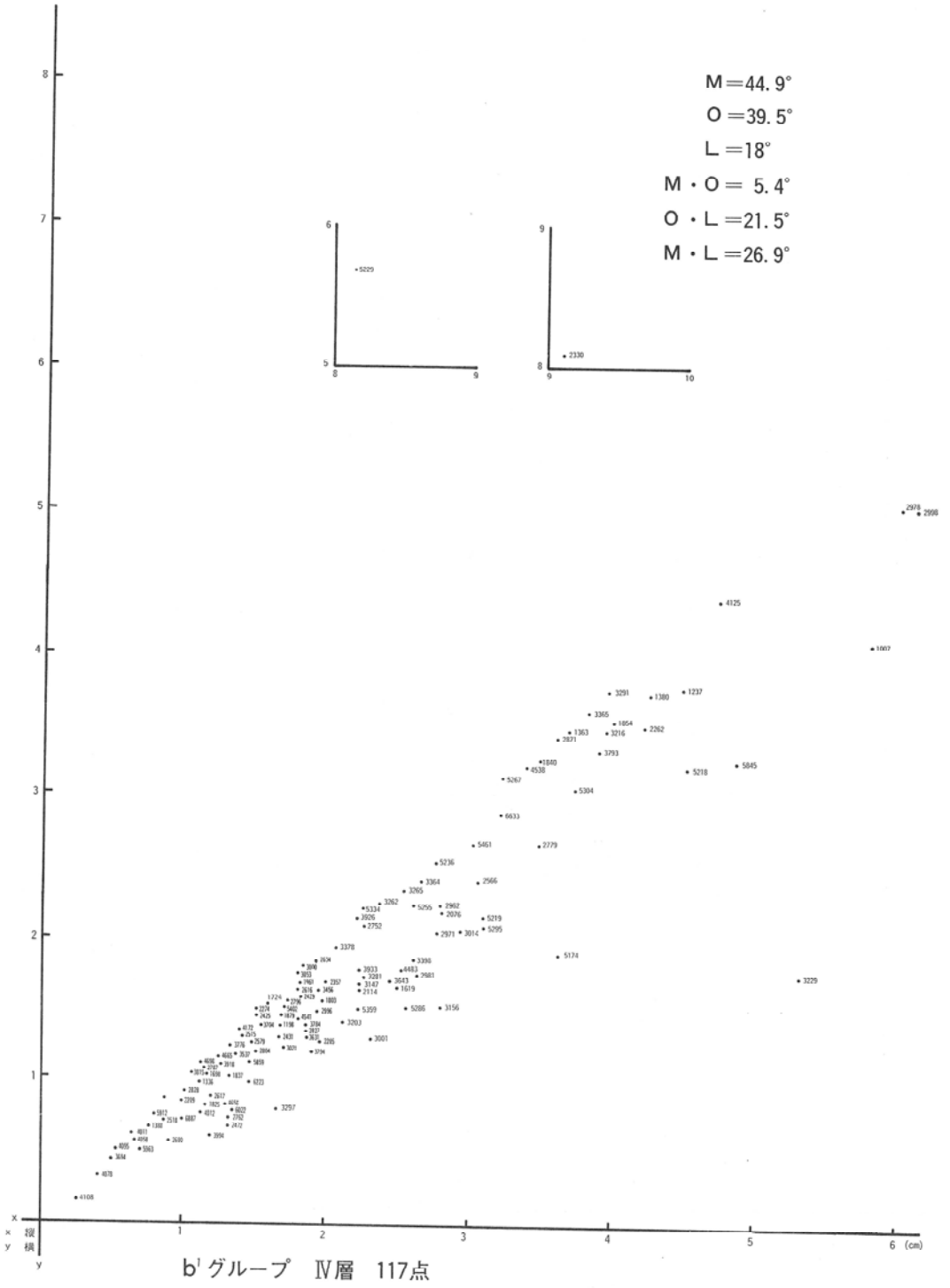
第44表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a[11] グループ計測表



a[12]グループ　Ⅳ層　38点

N 平均値3.3cm
S 平均値2.5cm

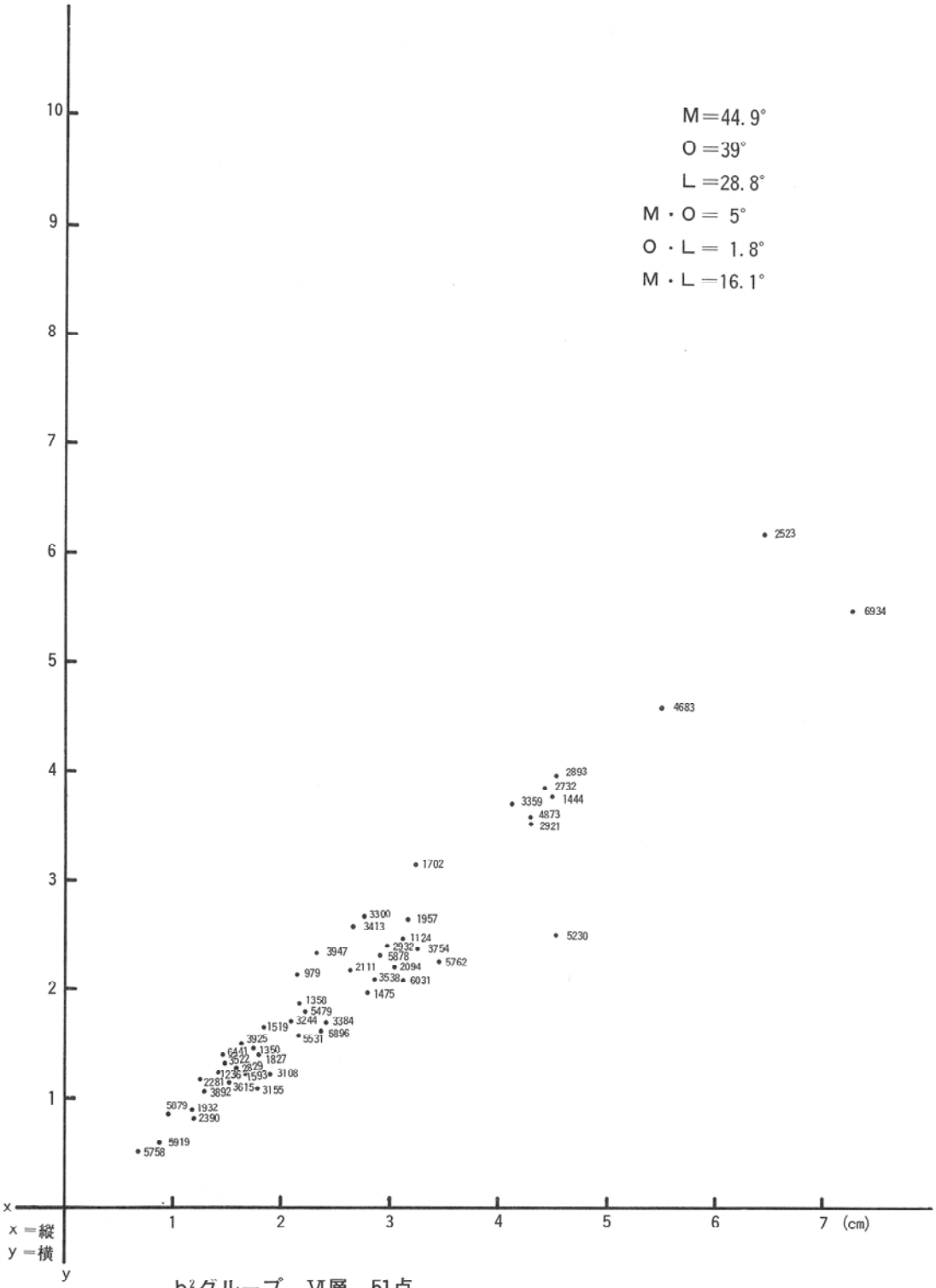
第45表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器a[12]グループ計測表



b¹グループ　Ⅳ層　117点

N 平均値2.0cm
S 平均値2.4cm

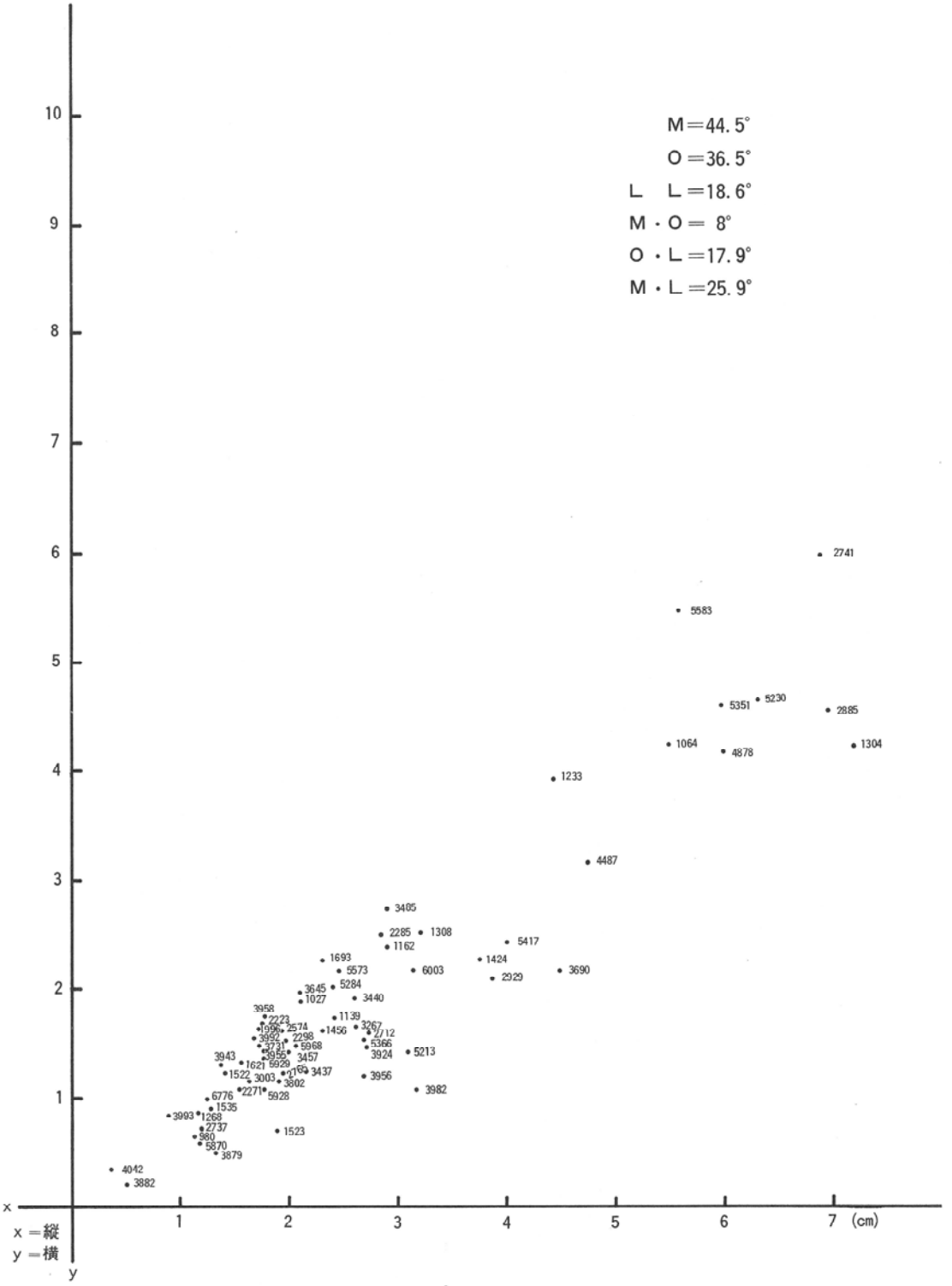
第46表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b¹グループ計測表



b²グループ　Ⅵ層　51点

N 平均値2.1cm
S 平均値2.6cm

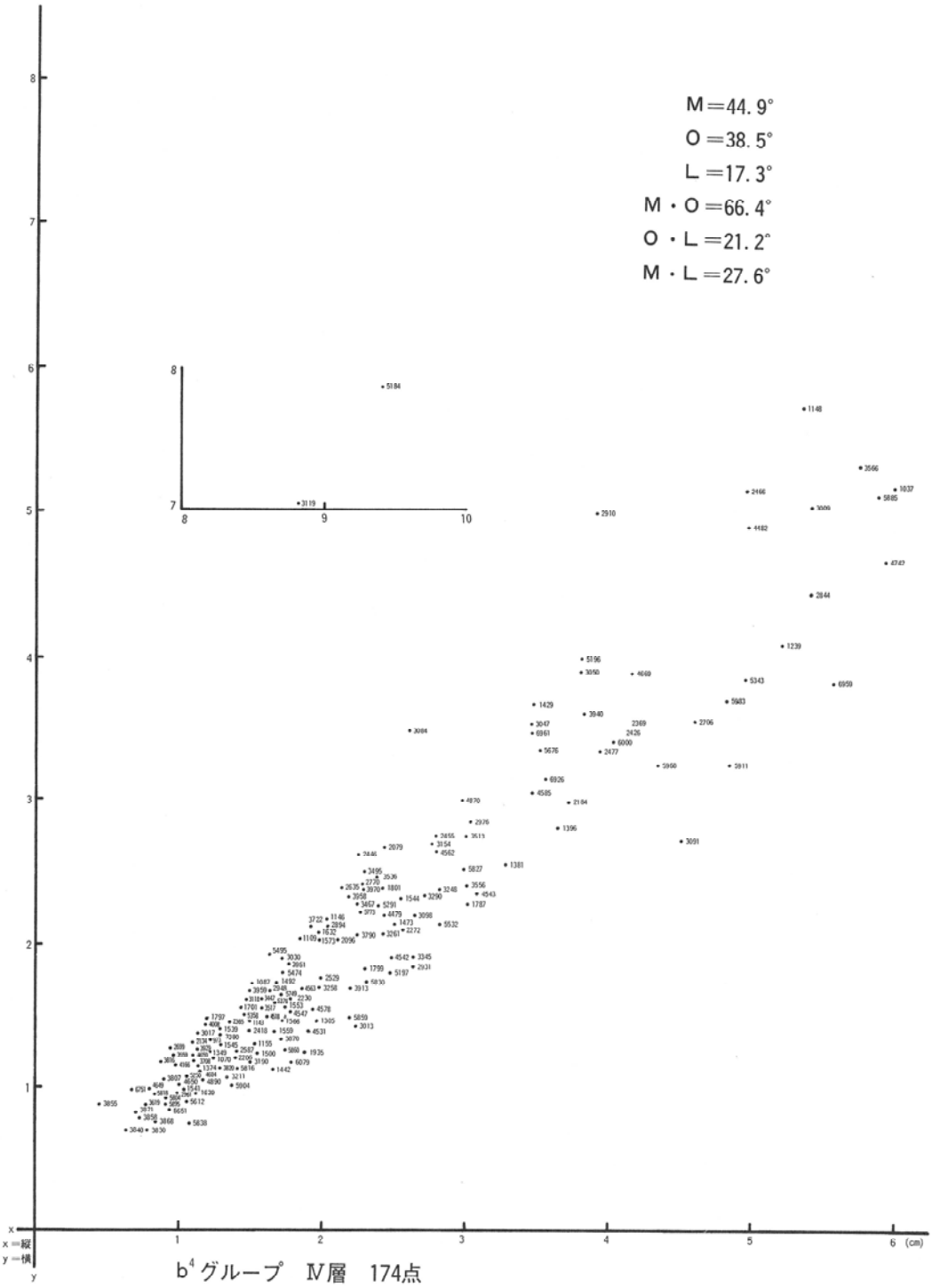
第47表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b² グループ計測表



b³ グループ　Ⅳ層　65点

N 平均値1.9cm
S 平均値2.6cm

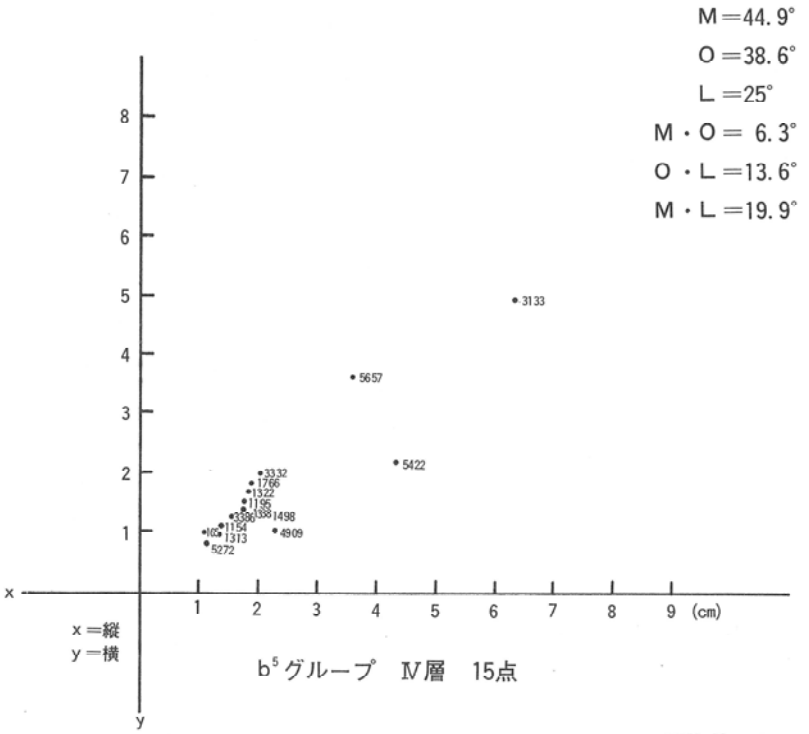
第48表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b³ グループ計測表



b^4グループ　Ⅳ層　174点

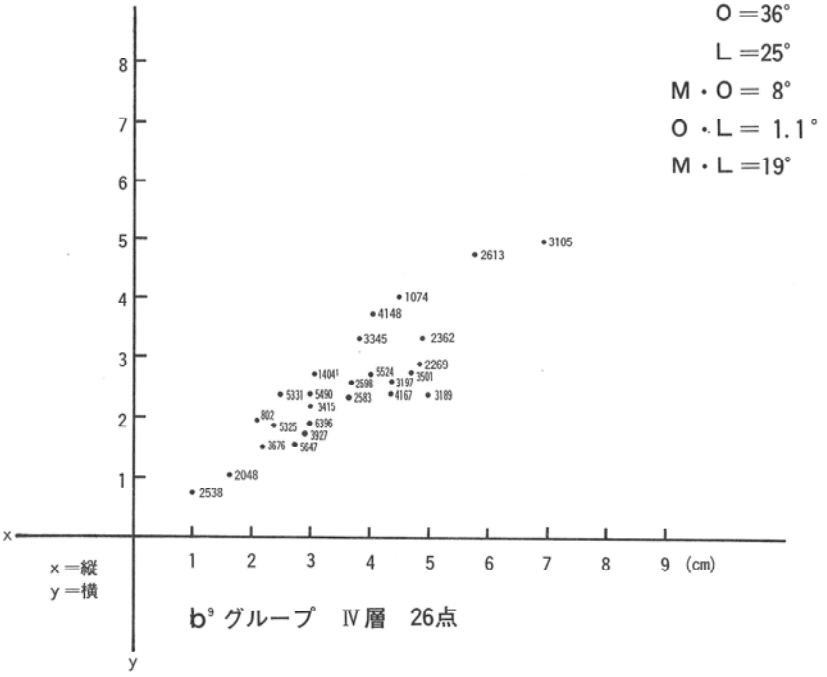
N 平均値1.9cm
S 平均値2.4cm

第49表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b^4 グループ計測表



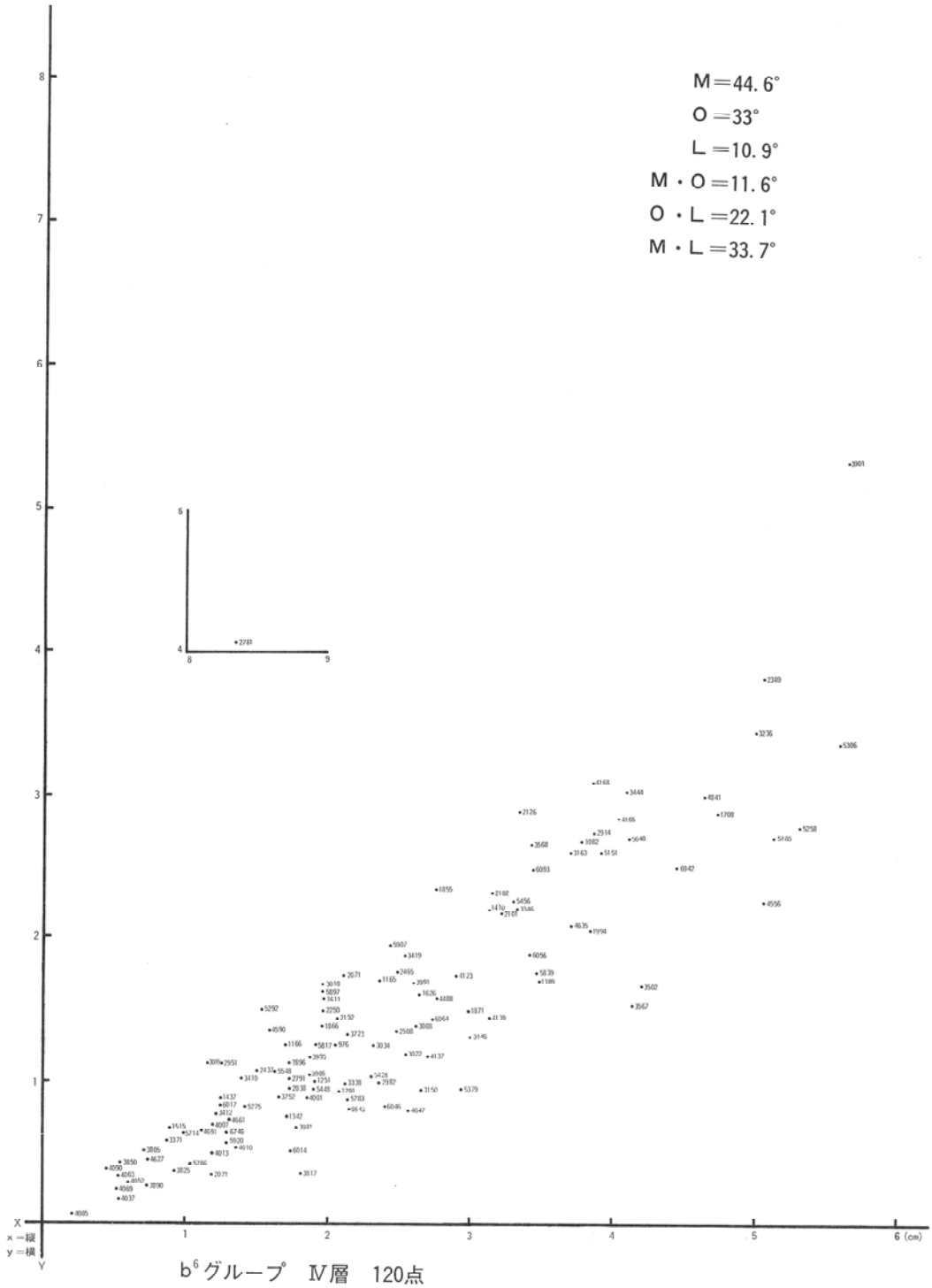
N 平均値1.5cm
S 平均値1.9cm

第50表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b⁵ グループ計測表



N 平均値2.6cm
S 平均値3.6cm

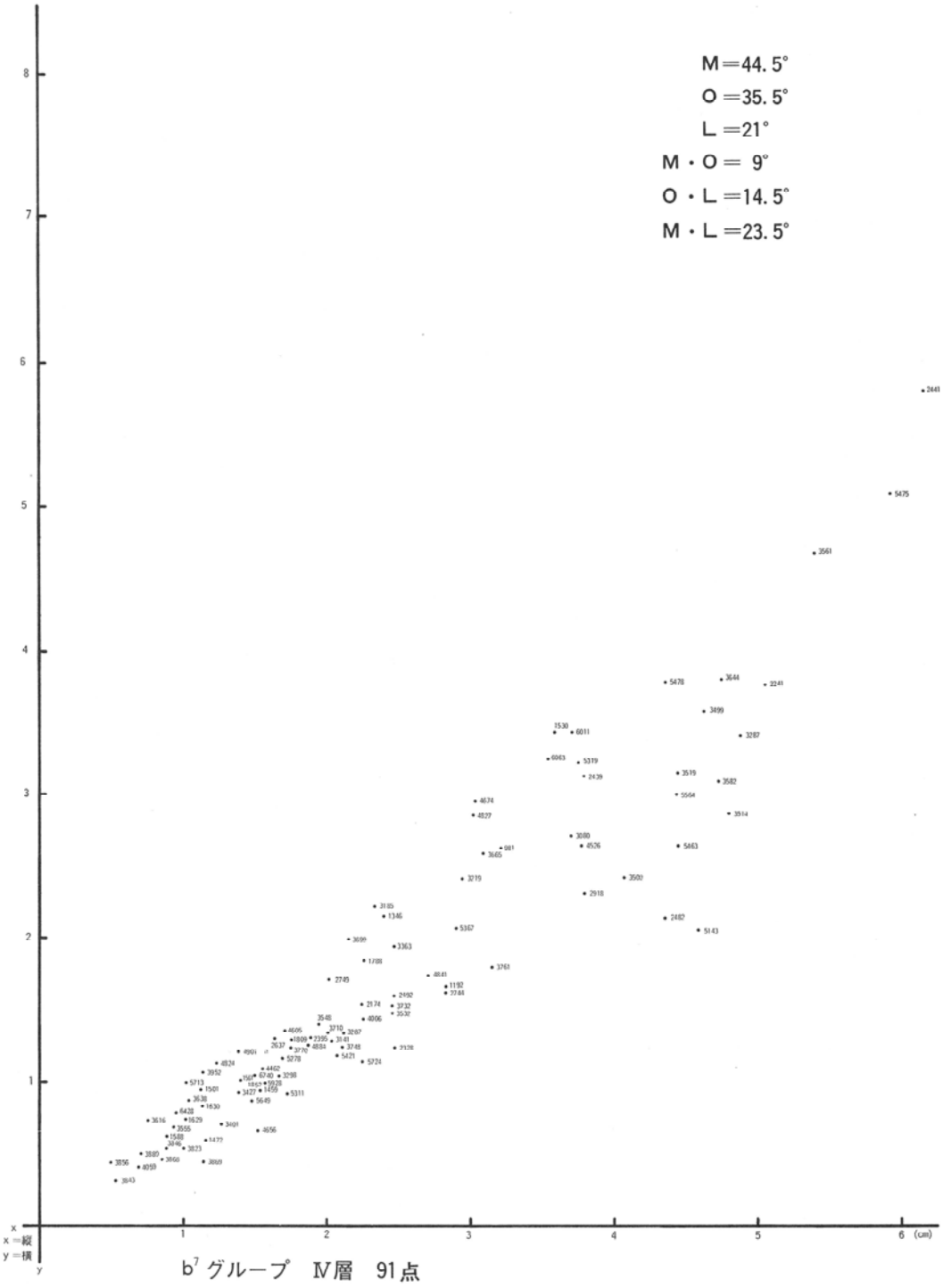
第51表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b⁹ グループ計測表



b⁶グループ　Ⅳ層　120点

N 平均値1.5cm
S 平均値2.3cm

第52表八幡原No.4遺跡第Ⅳ層出土石器b⁶グループ計測表

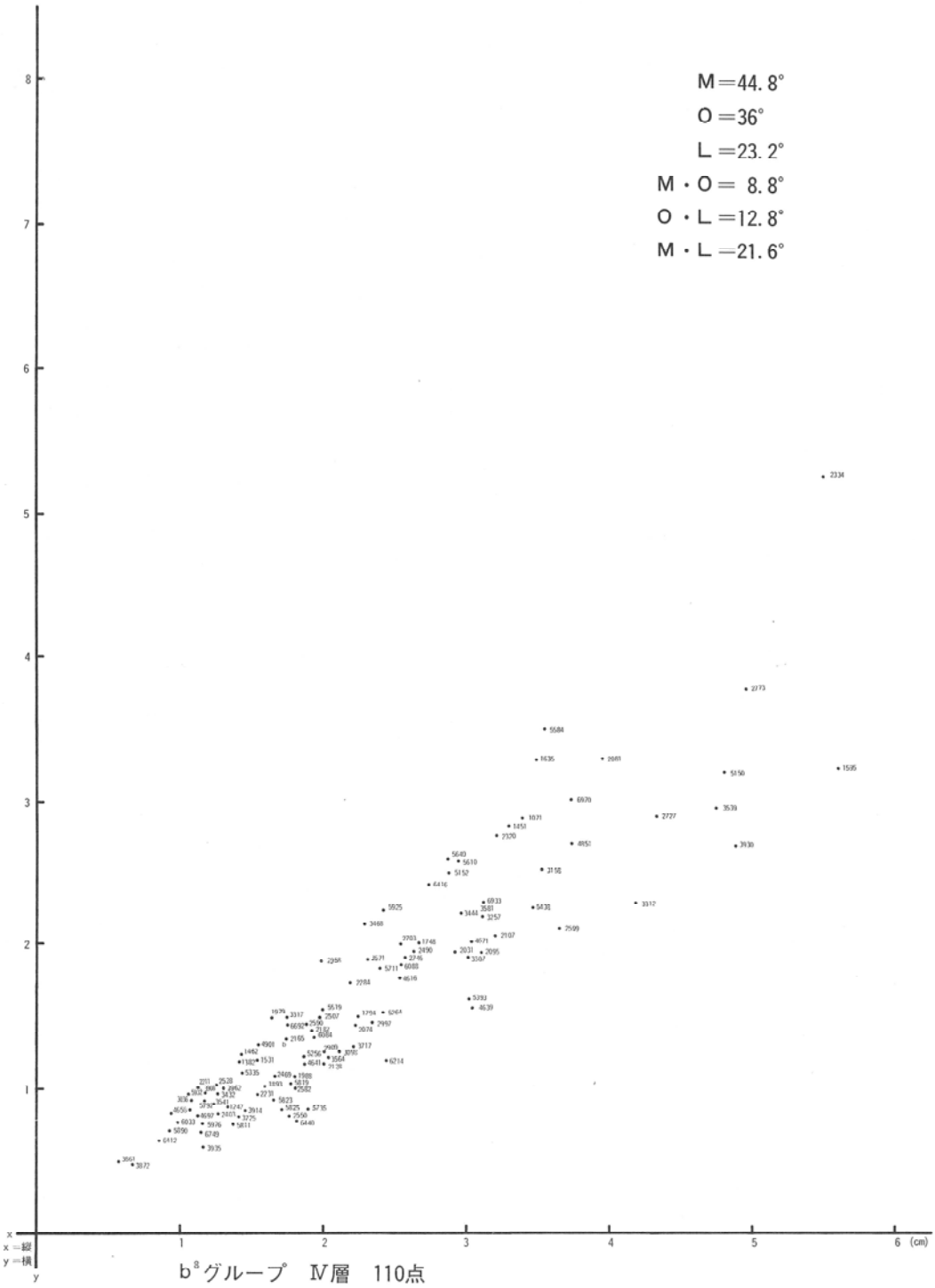


b^7 グループ　Ⅳ層　91点

N 平均値1.8cm

S 平均値2.5cm

第53表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b^7 グループ計測表



b^8グループ　Ⅳ層　110点

N 平均値1.6cm
S 平均値2.2cm

第54表八幡原No.4 遺跡第Ⅳ層出土石器b^8グループ計測表

総　計　201点

b形態〔第67表～第74表〕

b^1グループ 25点＝14.1%(3), b^2グループ　3点＝ 1.7%(6), b^3グループ 20点＝11.3%(4)

b^4グループ 39点＝22　%(1), b^5グループ　2点＝ 1.1%(7), b^6グループ 39点＝22　%(1)

b^7グループ 17点＝ 9.6%(5), b^8グループ 30点＝16.9%(2), b^9グループ　2点＝ 1.1%(7)

総　計177点

5）剝片石器のまとめ

各グループの点数をみると，第Ⅲ層がa形態のa^9グループ・b形態のb^8グループが全体の26%と一方的に多いのに対し，第Ⅳ層の剝片はa形態のa^9グループの17.2%を最高にa^4グループ16.4%，a^3グループ12.2%，a^2グループ12.1%，a^5グループ10.9%と5グループが10%台で集中する。b形態はb^4グループ22.6%を中心として，b^6グループ15.6%, b^1グループ15.2%，b^8グループ14.3%，b^7グループ11.8%と4グループが大半を呈している。

第Ⅴ層の形態はa形態のa^8グループ27.4%，a^9グループ18.4%を主体に，b形態はb^4グループ22%，b^6グループ22%と両者を中心に検出されている。

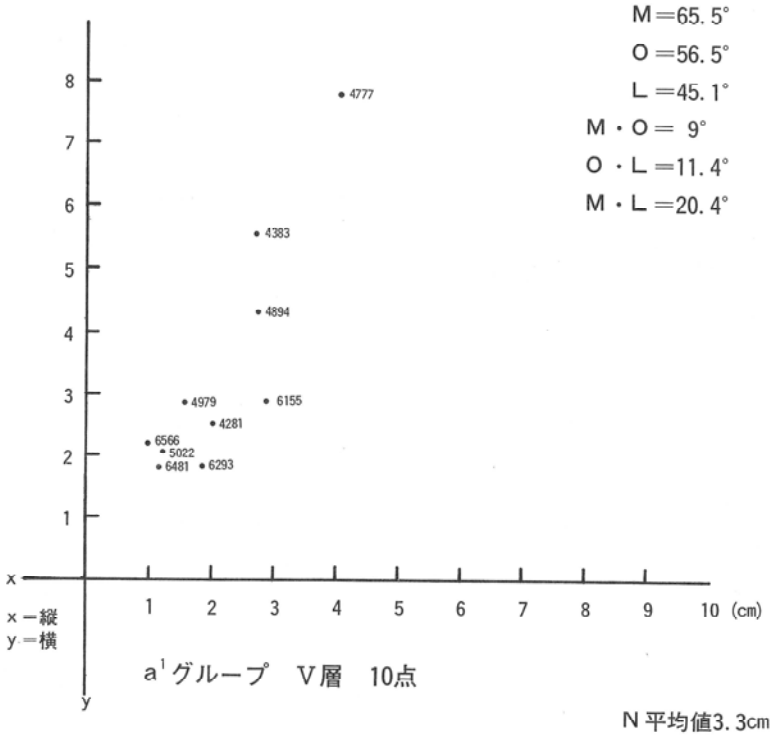
Ⅲ層・Ⅴ層ではあるグループが特に多く集中するのに対し，第Ⅳ層は比較的平均化するのが特徴と言える。

多いグループと少ないグループを各層ごとにベスト・スリーまでを参考のため並べてみよう。a形態の最多グループ，第Ⅲ層a^9，a^8，a^1（次点a^4）の順である。第Ⅳ層a^9，a^4，a^3（次点a^2）の順である。第Ⅴ層a^8，a^9，a^7（次点a^5）の順である。

b形態の最多グループ，第Ⅲ層b^8，b^6，b^7（次点a^3）の順である。第Ⅳ層b^4，b^6，b^1（次点b^7）の順である。第Ⅴ層b^6・b^4・b^8（次点b^3）の順である。これによるとa^9グループが各層ともに多く，次にa^8グループがみられるが，第Ⅳ層はa^4のグループが多く存在し，第Ⅲ層，第Ⅴ層とも中間的な位置を呈するだけに注意されよう。bグループではb^4・b^6グループが各層ともに定着しているが，Ⅲ層ではb^8を最多とする特徴がみられた。

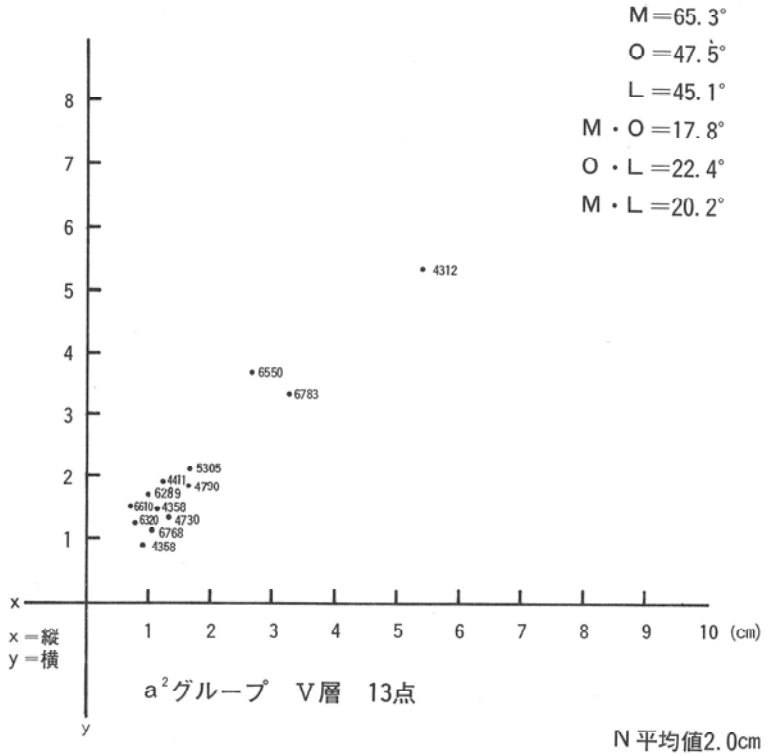
次に最小グループを説介しよう。a形態は第Ⅲ層がa^{11}・a^{12}・a^2・第Ⅳ層a^{10}・a^{11}・a^{12}・第Ⅴ層a^{11}・a^3・a^{12}・の順をなす。この中でa^{10}グループと称した形態は第Ⅳ層内に11点存在するだけで，a^{11}グループも第Ⅲ層1点・第Ⅳ層24点・第Ⅴ層1点と極めて数少なく，形態分類の中で無理があった様に思われる。

b形態ではb^9の不明を除くとb^2とb^5のグループが第Ⅲ～第Ⅴ層全体の傾向として把握された。



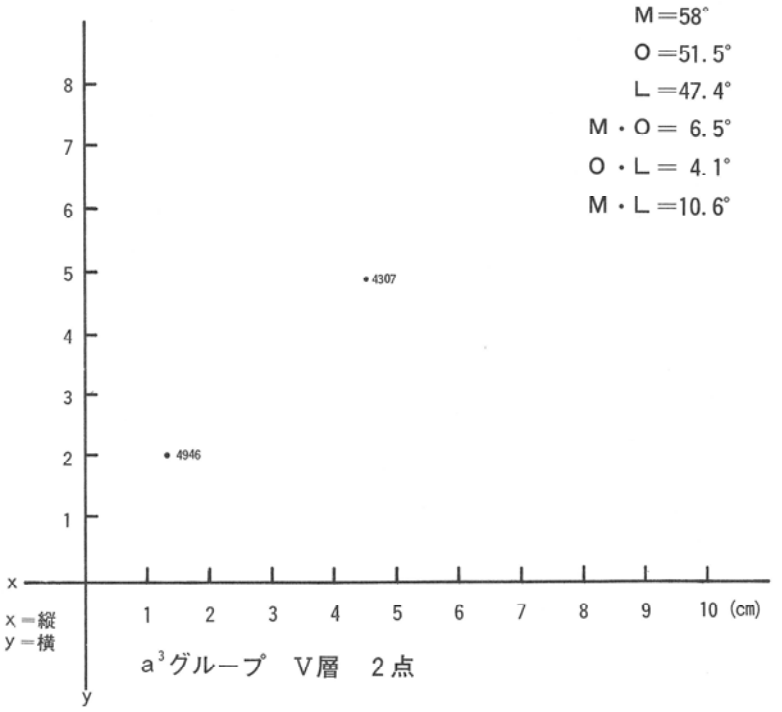
N 平均値3.3cm
S 平均値2.1cm

第55表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器a¹ グループ計測表



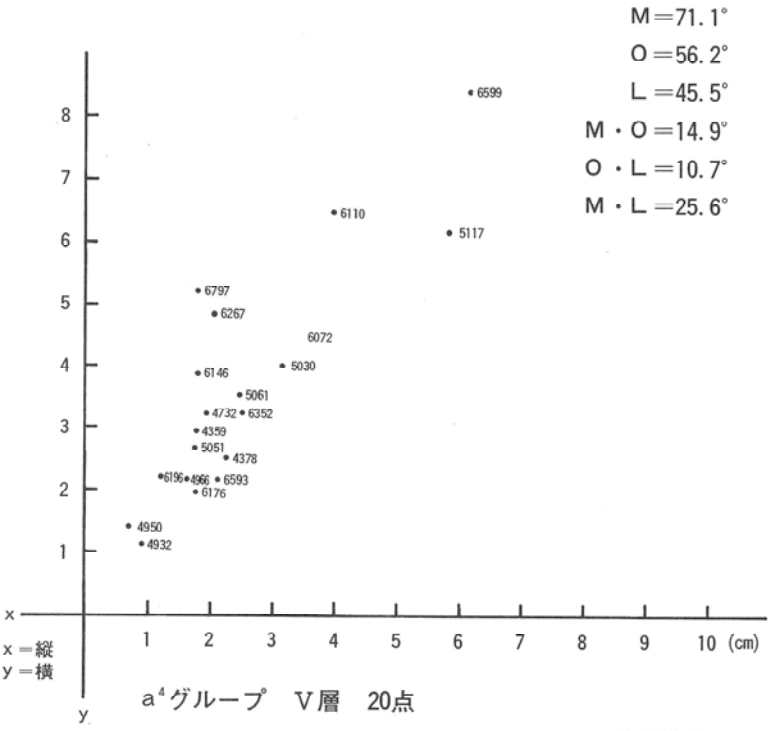
N 平均値2.0cm
S 平均値1.8cm

第56表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器a² グループ計測表



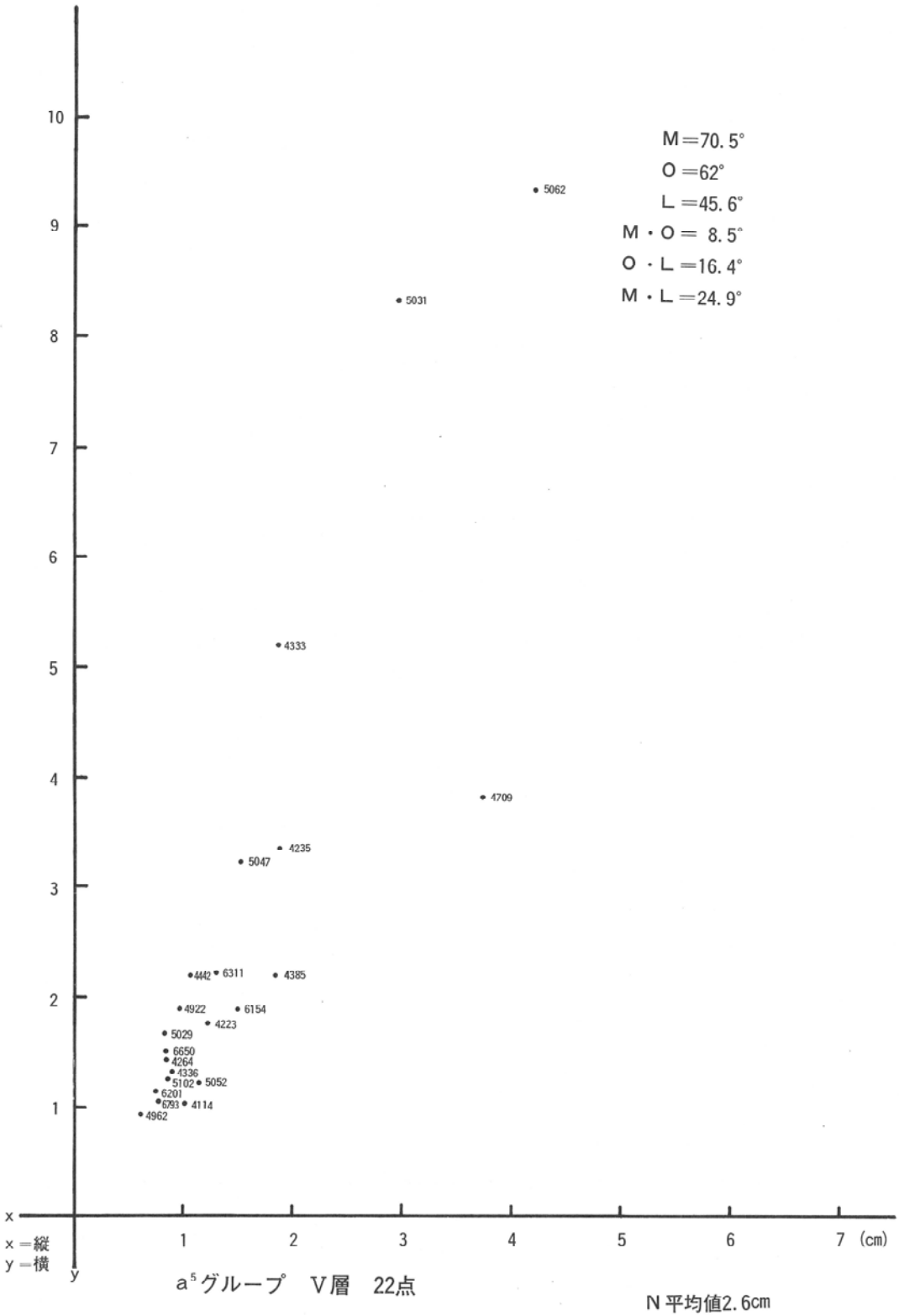
N 平均値3.4cm
S 平均値2.7cm

第57表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器a³ グループ計測表

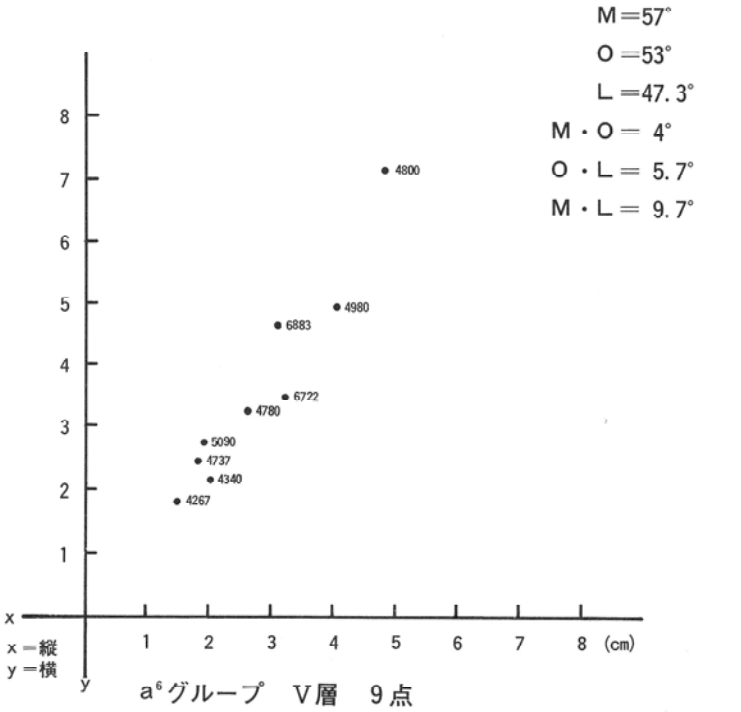


N 平均値3.6cm
S 平均値2.4cm

第58表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器a⁴ グループ計測表

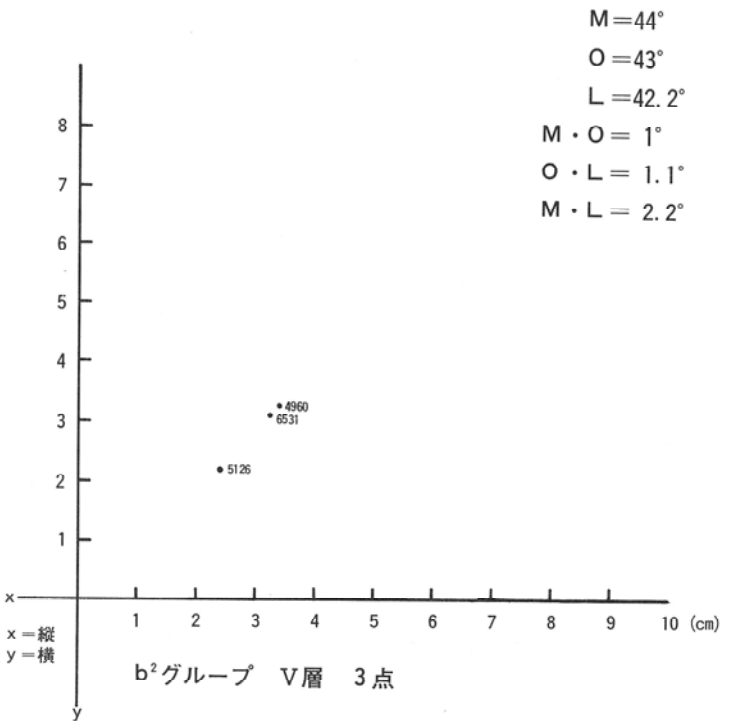


第59表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器a5 グループ計測表



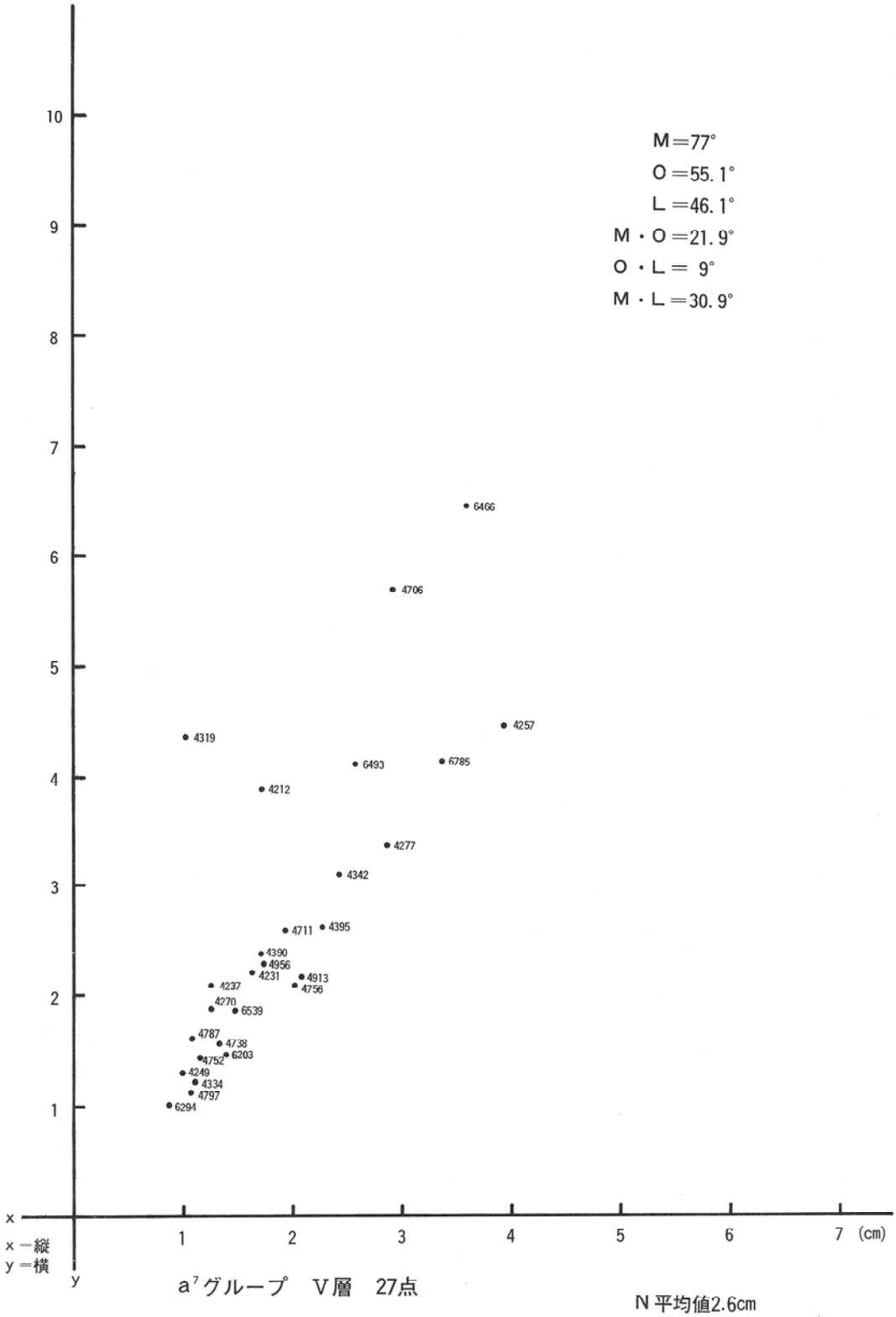
N 平均値3.6cm
S 平均値2.7cm

第60表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器a⁶ グループ計測表



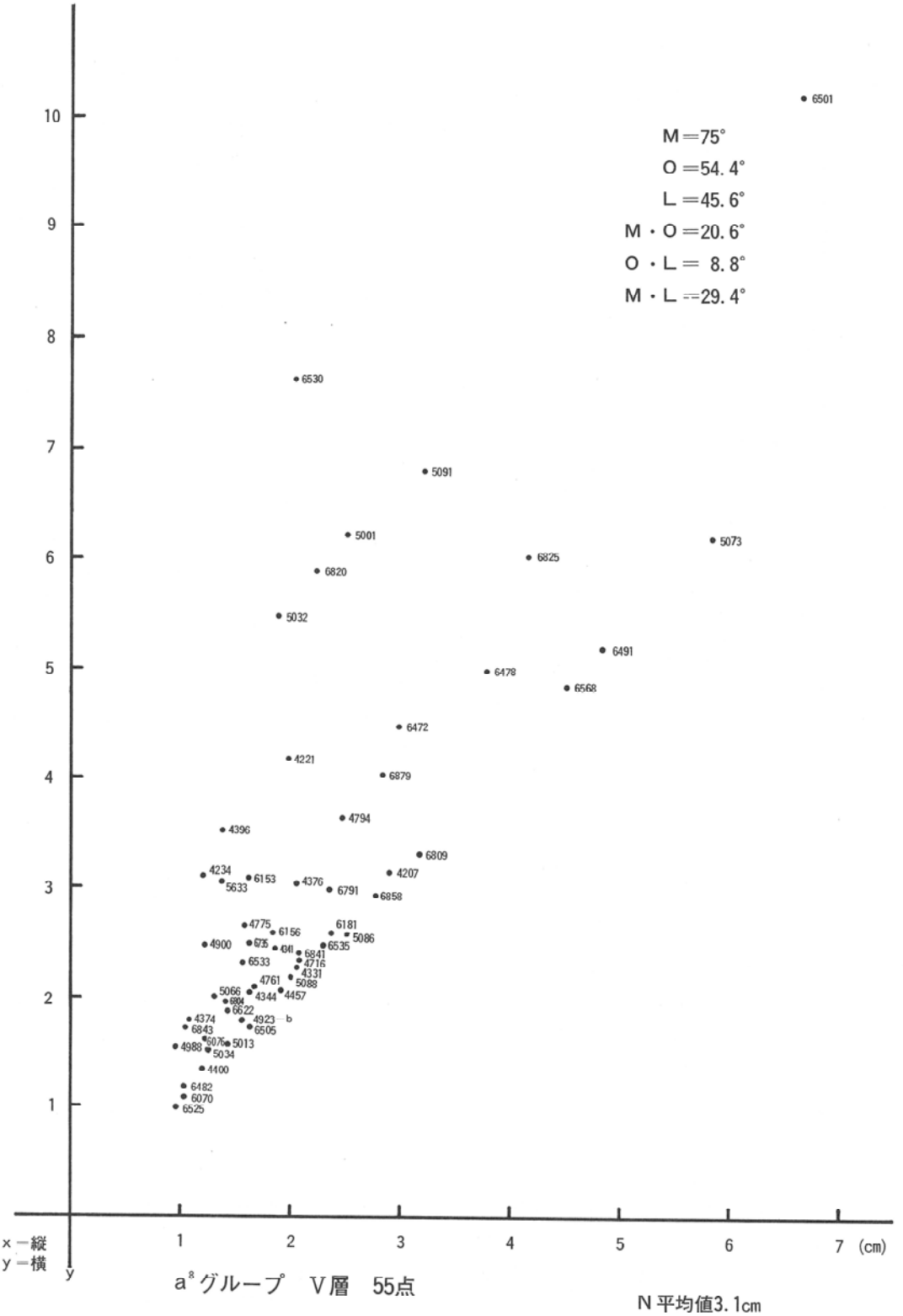
S 平均値3.0cm

第61表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器b² グループ計測表



N 平均値2.6cm
S 平均値1.8cm

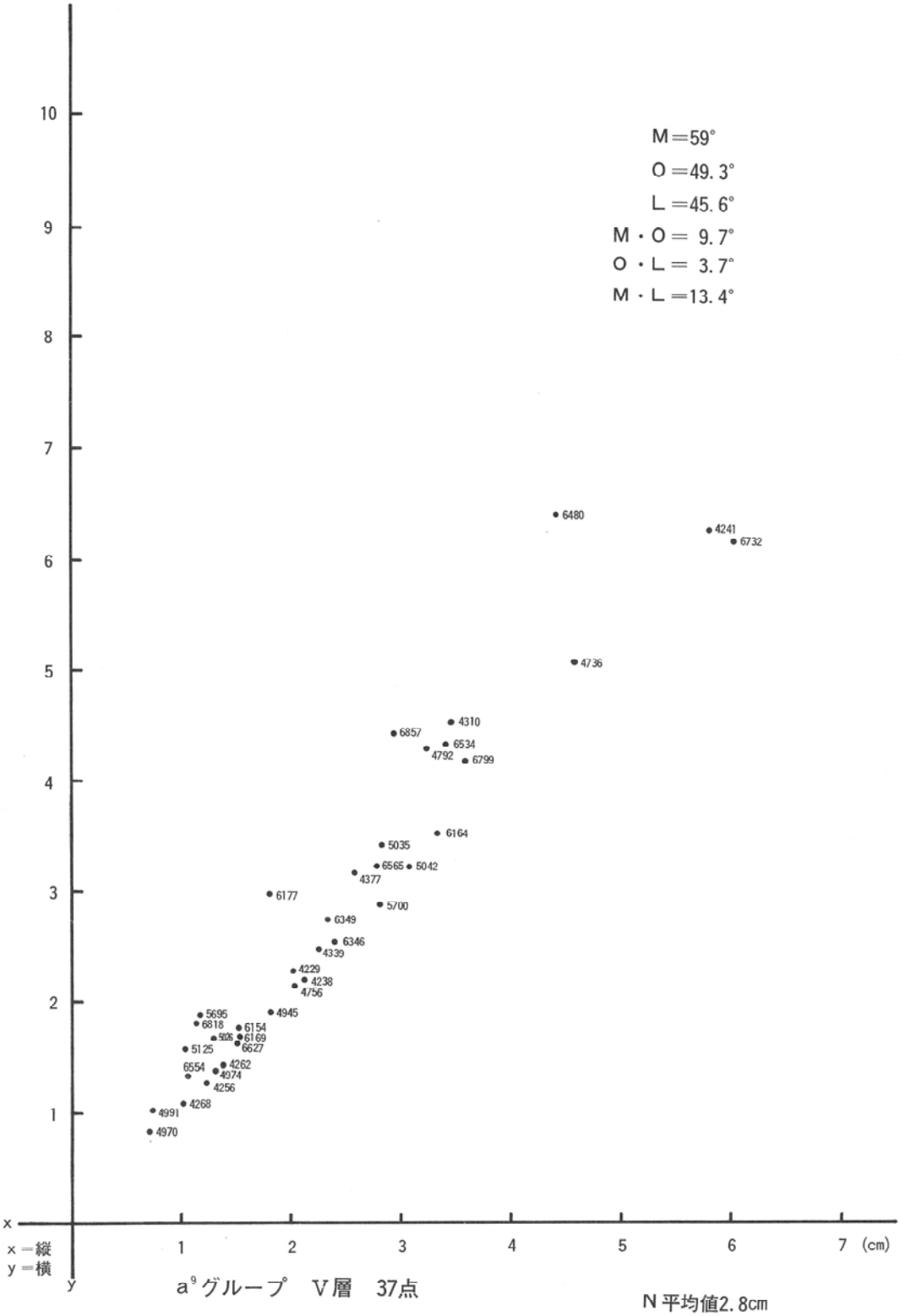
第62表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器a⁷ グループ計測表



a⁸グループ　V層　55点

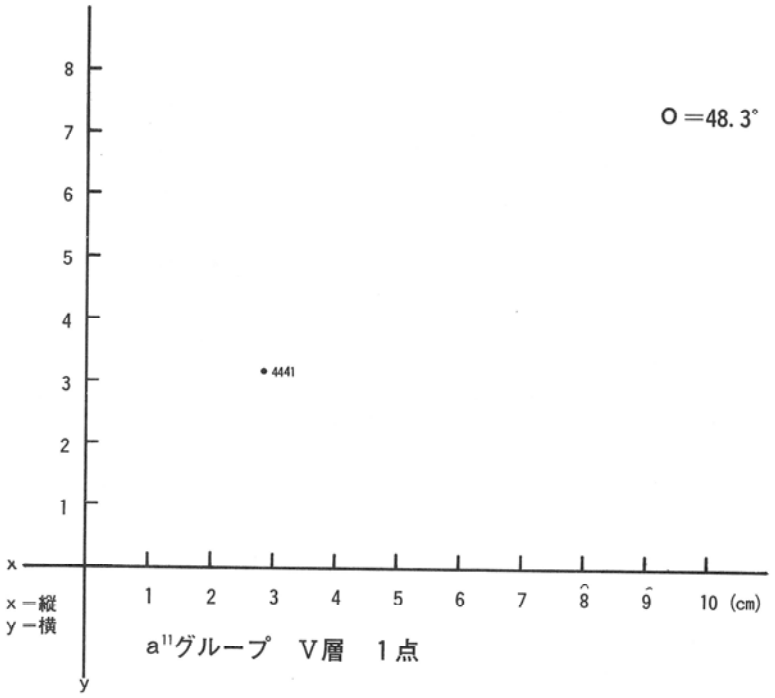
N 平均値3.1cm
S 平均値2.2cm

第63表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器a⁸ グループ計測表

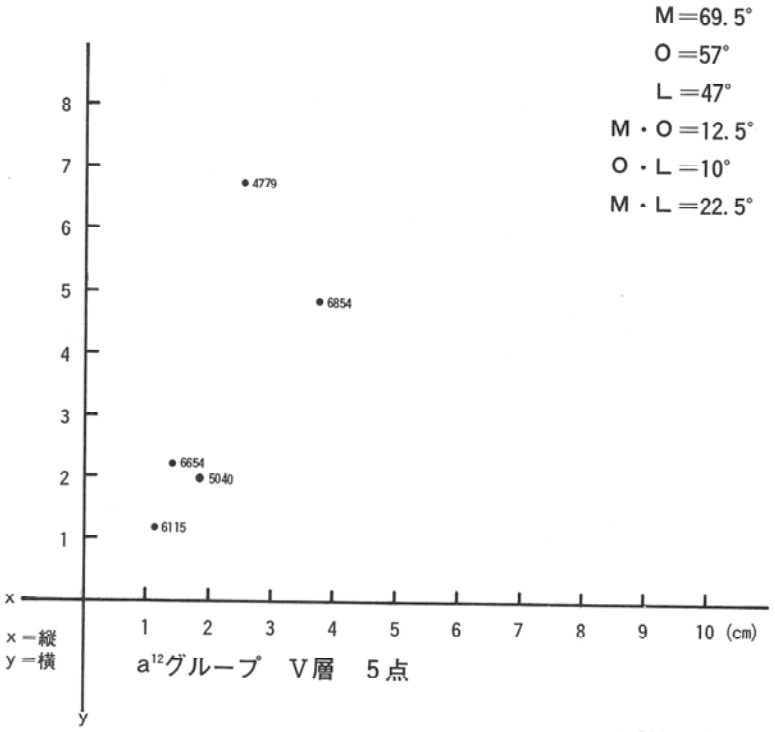


N 平均値2.8cm
S 平均値2.4cm

第64表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器a⁹ グループ計測表

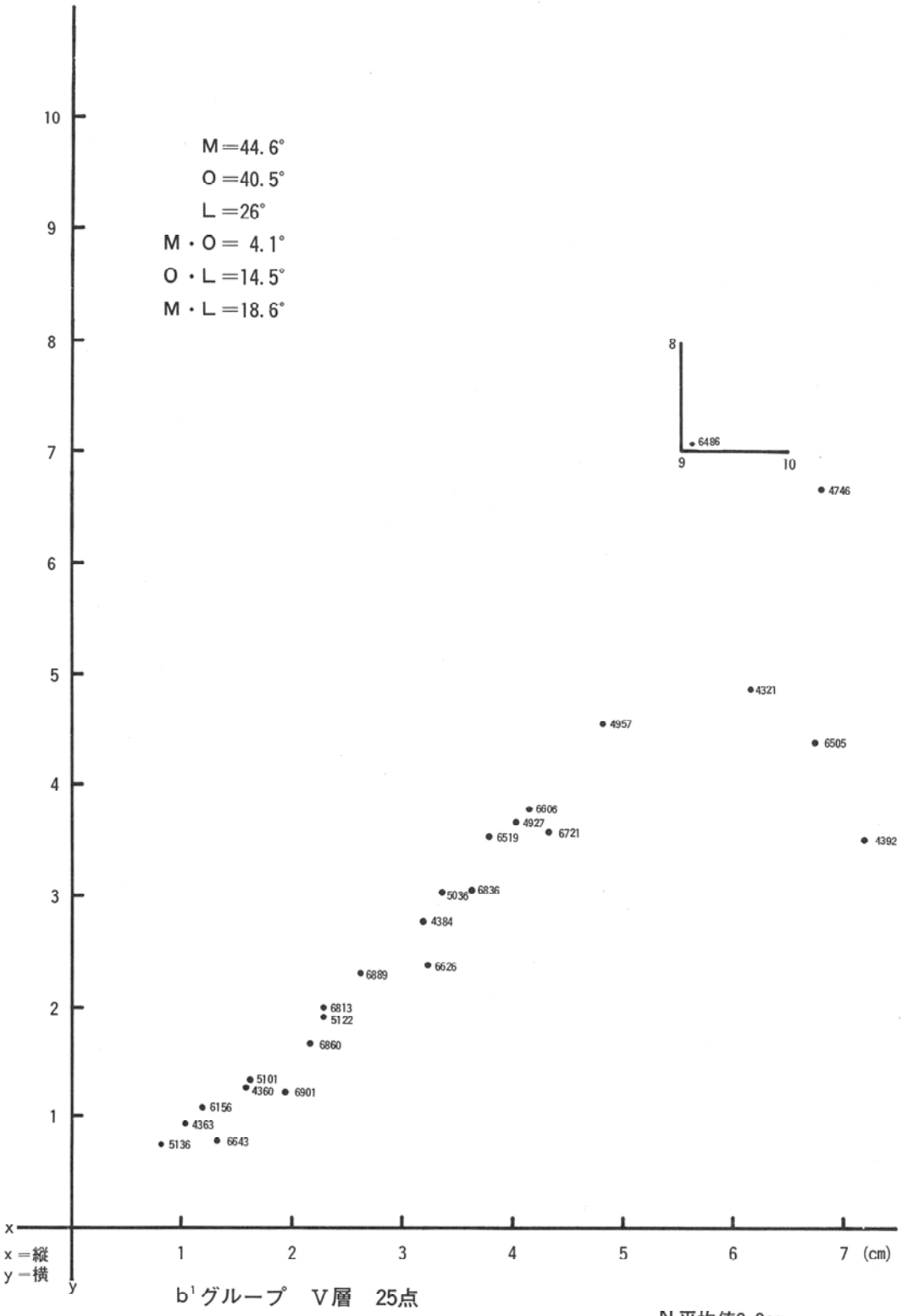


第65表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器a11グループ計測表

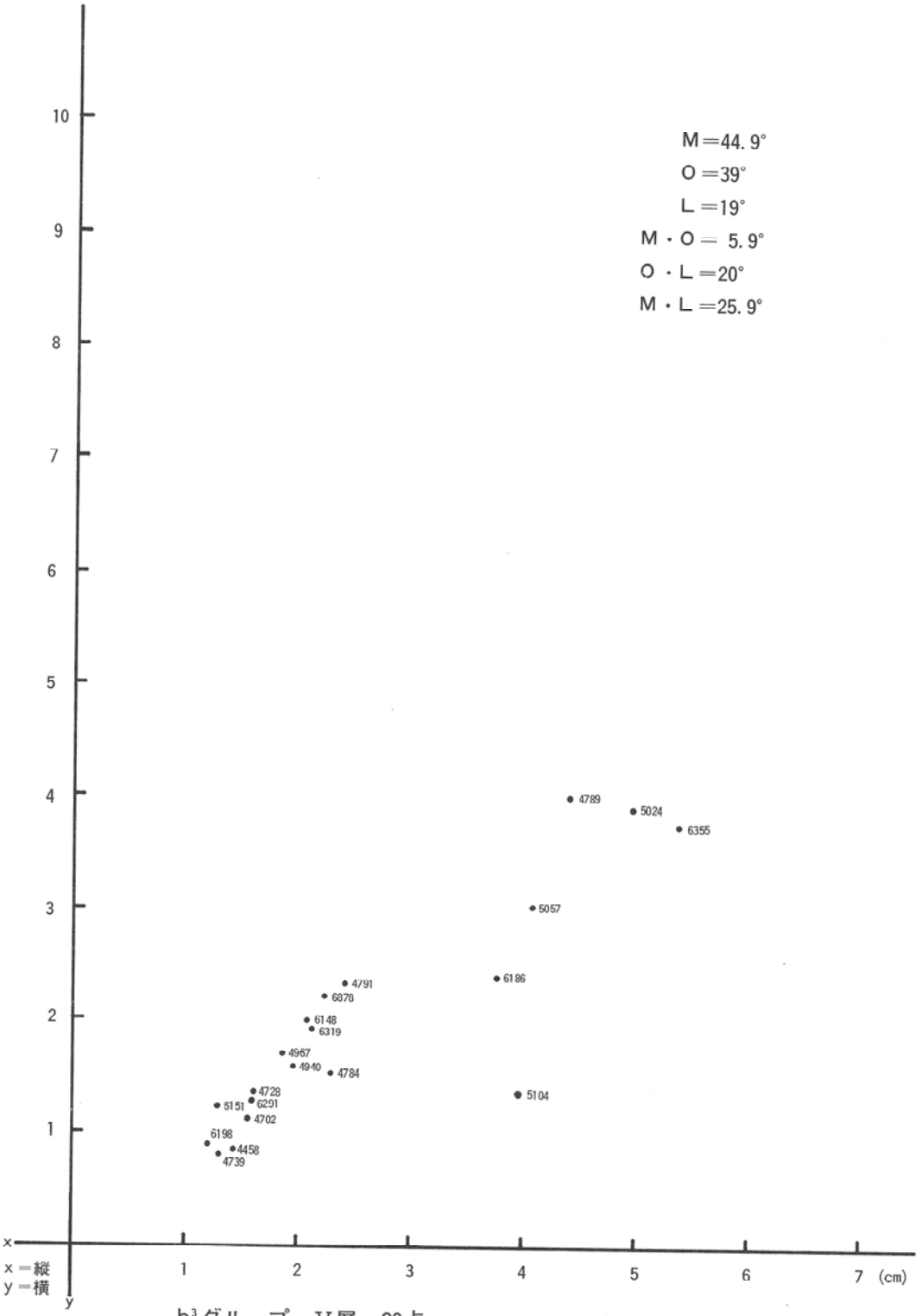


N 平均値3.3cm
S 平均値2.1cm

第66表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器a12グループ計測表



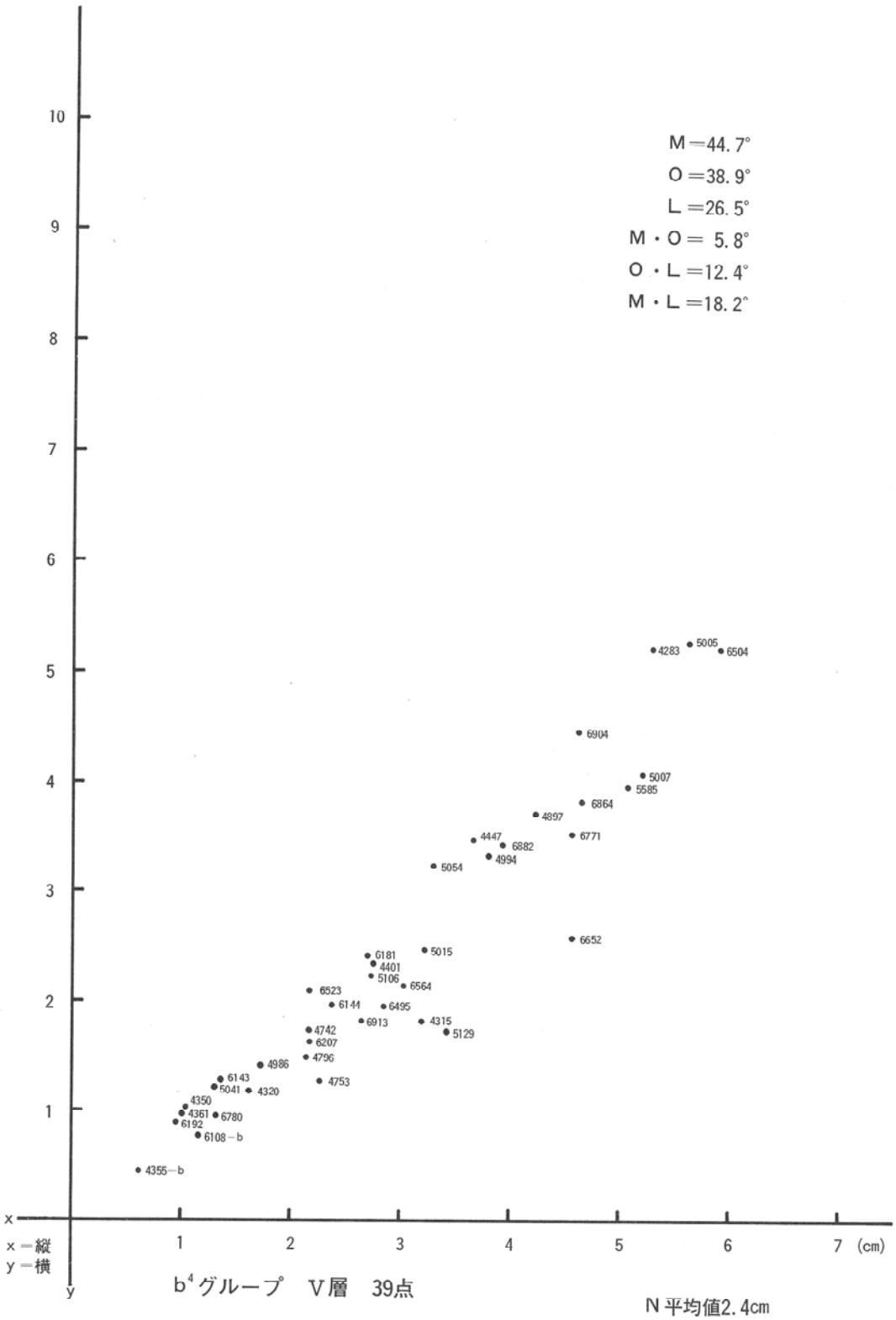
第67表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器b¹グループ計測表



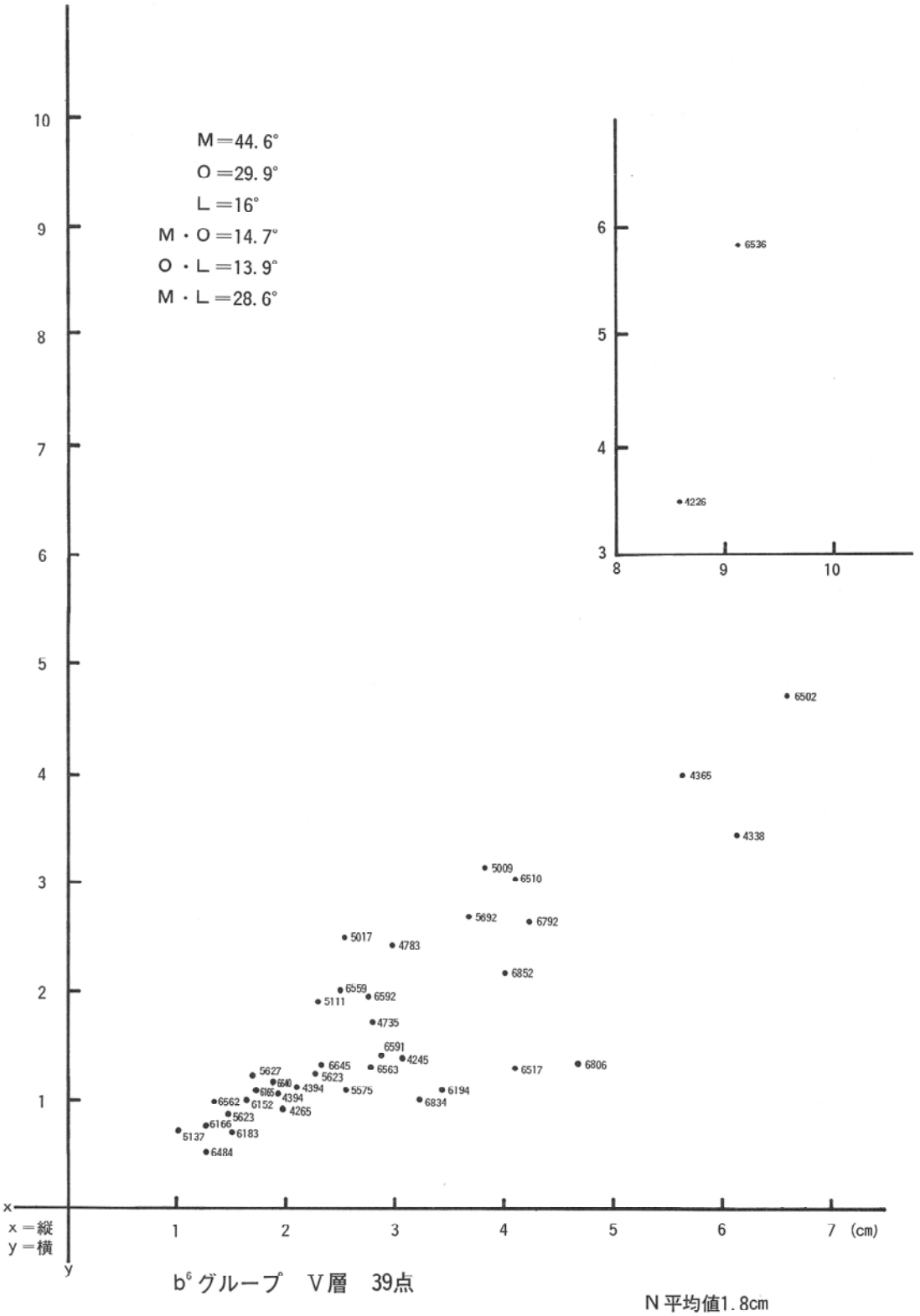
b³グループ　Ⅴ層　20点

N 平均値2.0cm
S 平均値2.5cm

第68表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器b³ グループ計測表



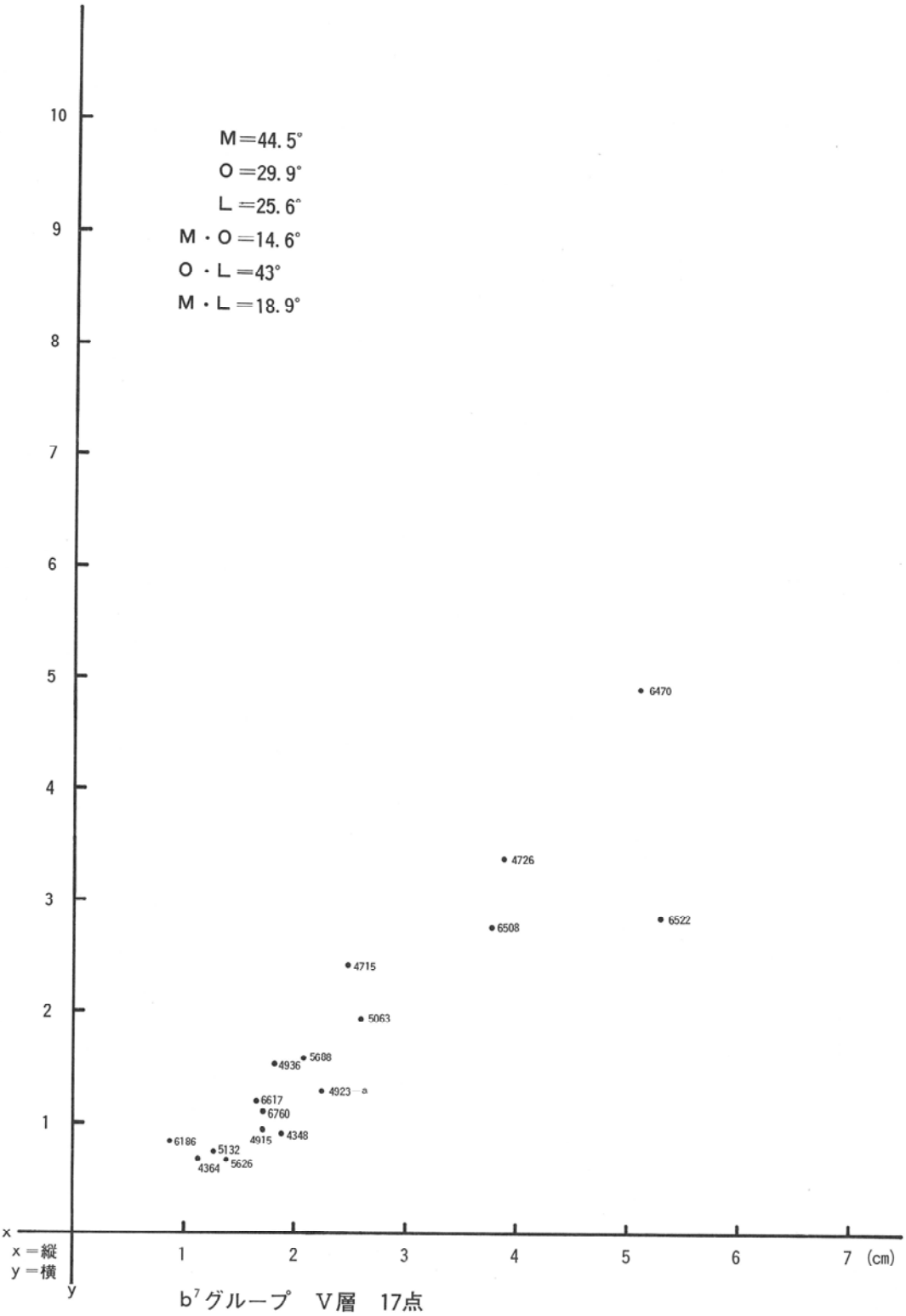
第69表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器b⁴ グループ計測表



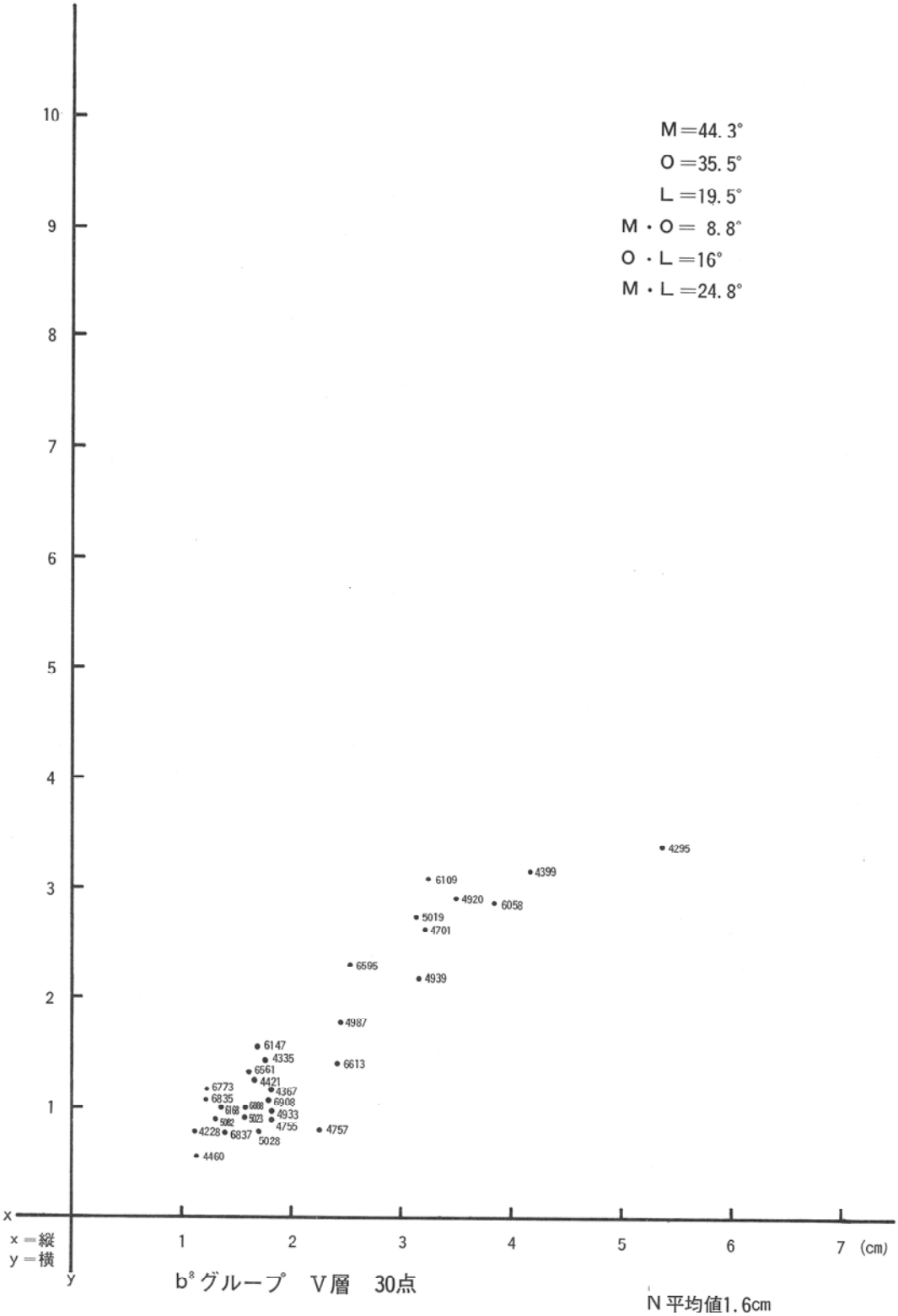
b^6 グループ　Ⅴ層　39点

N 平均値1.8cm
S 平均値3.1cm

第70表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器b^6 グループ計測表



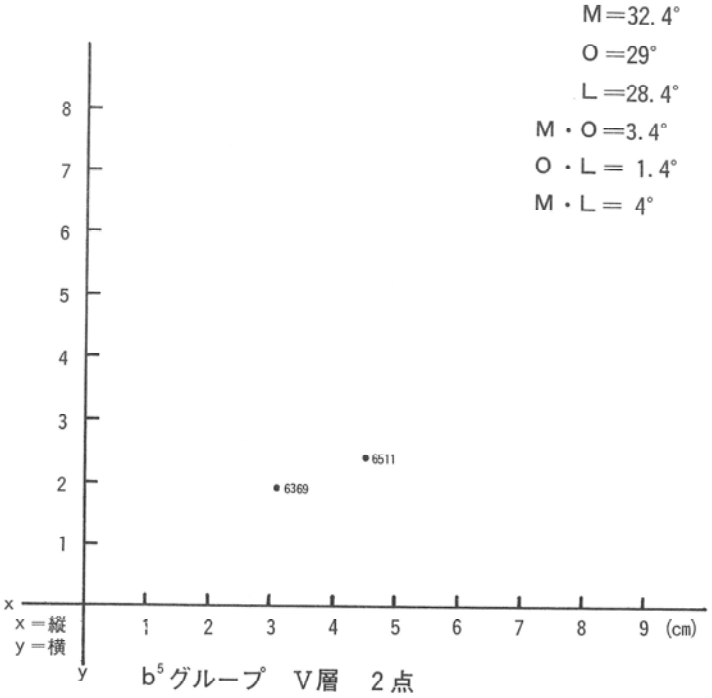
第71表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器b7 グループ計測表



b⁸グループ　V層　30点

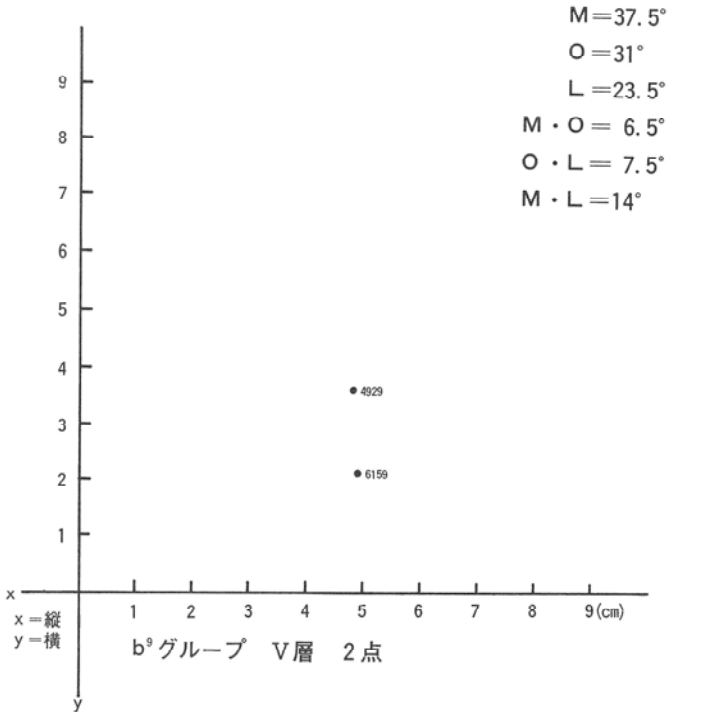
N 平均値1.6cm
S 平均値2.2cm

第72表八幡原No.4 遺跡第V層出土石器b⁸ グループ計測表



N 平均値2.1cm
S 平均値3.8cm

第73表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器b5 グループ計測表



N 平均値2.9cm
S 平均値4.9cm

第74表八幡原No.4 遺跡第Ⅴ層出土石器b9 グループ計測表

Ⅲ　石器の年代

今回検出された完成石器Ⅰ群～Ⅻ群がどの様な年代的位置に属するかを層位を参考にして検討する。既に完成石器（以下石器とする）はそれぞれ石器の形状および，剝離技法等の分類において18形態に類別し，その概要に触れたが，前項では層位は別とし，形状に主点を置いたものである。ここで次に述べようとする石器のうち，年代吟味の困難な石器群（破損，不定形，各層に平均的に認められるもの）Ⅴ群・Ⅶ群，Ⅷ群，Ⅸ群，Ⅺ群，Ⅻ群・Ⅻ群・Ⅻ群・Ⅺ群・Ⅻ群・Ⅻ群・Ⅻ群らは概要にとどめ，Ⅰ群・Ⅱ群・Ⅲ群・Ⅳ群・Ⅵ群・Ⅹ群の６群を中心として進める。

1）石鏃

Ⅰ群a～ｊの形態となるが，Ⅴ群の大半も同類に求めることが妥当である。第Ⅳ層を中心として80点が検出しており，縄文前期に置く。ただし第Ⅳ層の中でも同下層ないし第Ⅴ層から検出された72図11～20・73図１～３と60図１～７・69図１～７・67図１・２・５・８・15らⅠ群a類・b類・c類・h類・ｊ類・Ⅴ群a類の大半は縄文前期の古い方（初頭）から縄文早期中葉期に求めることができそうである。一方Ⅰ群b類の一部とd類，e類，g類は大方を縄文前期末～同初頭に中心を置くものとみられる。特にe類は縄文前期末，b類は縄文前期初頭の所産と言ってよい。[1] 第Ⅲ層出土の縄文中期後葉から縄文後期初頭に位置づけられるものであるが，出土数が少なく，基部の大湾する68図11や同13・小形の69図３は明らかに新しい要素を含んでいる。[2]

2）石　槍

先端部の欠損した有舌尖頭器であり，縁片からの明瞭な押圧剝離は山形県内の戸沢村津谷遺跡，高畠町の日向他洞窟遺跡，[3] 西川町弓張平遺跡，[4] 新潟県小瀬ヶ沢[5]に類似する。草創期に位置するものとみられる。

3）石　匙

第Ⅳ層を主に認められ，第Ⅴ層からのa類（71図11）は横形をなす両面加工石匙で，縄文早期の新しい時期に多くみられるものである。ｂ類71図１～3･5・10は主要剝離を片面に有する縦形の石匙で，米沢の松原遺跡，[6] 八幡原No.26遺跡[7]の前期初に主体的にみられる形態である。c類の71図4は両面加工のつまみ部分で，八幡原No.25遺跡の縄文前期末に伴う刃部が尖状を有する形態とみられる。[8] 同じ両面加工を呈する偏平な71図６は縄文中期～後期初頭の遺跡でみられる特徴を示す。[9] d類の71図７・８とも前期と考えられる。

4）石　錐

第Ⅳ層を中心に認められたものであり，72図２～５・８Ⅳ層前期末期，同１・７・10はⅣ層下，縄文前期初頭，同６・９はⅢ層で縄文後期初頭～中期後葉期とそれぞれ分けられ

る。特に上端の広いb類は，前期末の所産とみられる。

5）打製石斧

Ⅵ群石器のa～j類の10形態に類別しているが，この中には形態の相似で類別したため打製石斧と石篦の二者が含まれていることはⅠで述べた通りである。前者の打製石斧は，a類の74図1～5，75図1・2，b類の1～4の二者は第Ⅴ層，第Ⅳ層下部から出土し，形態的にも古い要素をもつ。縄文前期初頭～早期中葉の範疇でとらえることができる打製石斧である。[10] c類に含まれる77図1・2は所謂『トランシュ』様石器[11]に類するもので，従来から縄文早期～前期初頭に位置付けられてきた石器類であり，1は第Ⅴ層のⅠ群e類土器と併なって検出され，2は前期初頭であるからして基本的に本類も一致していることになる。

d類～h類も同様で，明らかに打製石斧として認められる77図7，78図1・2・3・4・5，79図6・7・81図1～3・5・6，82図1・6～9は第Ⅳ層下部～第Ⅴ層に多く認められた。縄文早期～前期初頭（前期末に属する可能性も数点ある）に求められる。

一方石篦もしくは篦状石器は第Ⅴ層に加わる（早期）石器は本遺跡に認められない。主に第Ⅳ層の上部を最多とし，第Ⅲ層～第Ⅳ層下部に集中していた。代表的なものを上げると第Ⅳ層下出土の縄文前期初頭に位置するもの75図3，77図5，79図1，80図6があり同前期末は82図1～4，79図5，縄文中期後葉期～同後期初頭に類するものは，74図6・77図6・78図4，79図4，80図5らがある。

これによると打製石斧が縄文前期初～早期に多く存在するのに対し，石篦は縄文前期初から打製石斧が減少するに従って多くなる傾向がみられる。

打製石斧は基部が尖状を示すものが比較的早期に多く，平坦な特徴は前期初頭の特徴としてとらえることが可能であった。

6）サイド・スクレーパー類

縦形と横形に分けられるサイド・スクレーパーは，第Ⅲ～第Ⅳ層に等しく検出されていることから，年代区分を行うことは若干無理がある。

ただ，第Ⅴ層から第Ⅳ層下部の早期に求められる縦形サイド・スクレーパー類の多くは刃部が尖状を示すものが多く，86図2・3・5，第87図7，85図1～3・5・6はその代表と言える。

7）磨製石斧

第Ⅳ層より7点と第Ⅲ層1点の8点を呈し，小形をなす98図1・2・4・7は局部磨製石斧であり第Ⅳ層下部に認められ，縄文早期前半に位置付けられる。[12] 98図3・5・6は縄文前期初頭から同末期頃に，98図―9は縄文中期後葉期にそれぞれ伴出土器の年代より求めることができそうである。その中でもa類に属する局部磨製石斧はⅠ群e類の土器が伴な

って検出されることなどからすると若干年代が下る可能性がある。

8）まとめ

今回検出された石器群においては第Ⅳ層を主体にしたⅠ～Ⅻ群の石器が多量に認められ特にⅥ群と称した打製石斧，石篦状石器の仲間に貴重な成果を得ることができた。Ⅰに考察した使用痕に関する本稿は最も顕著であり，Ⅱで述べた剝片石器についても，従来より時期区分〔年代的把握〕の対象外であったが，形態や計測値によって年代（Ⅲ～Ⅴ）的に相異が生じることが判明，より詳しい分析を実施することによっては，大方の時期区分の可能性の一端を示唆したといえる。

注記

1．柏倉亮吉，加藤稔，手塚孝他（1975～1977）　『米沢市八幡原中核工業地造成予定内埋蔵文化財調査報告書』第1集～第3集，No.24，No.25，No.26，米沢市教育委員会

2．佐藤禎宏，佐藤鎮雄（1972）『神矢田遺跡』遊佐町教育委員会

3．佐々木洋治（1971）『高畠町史』別巻　考古資料編

4．加藤稔　（1978）『弓張平遺跡―第1・2次調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第15集
阿部明彦（1980）『弓張平A遺跡発掘調査報告書』西川町教育委員会

5．中村孝三郎（1960）『小瀬が沢洞窟』長岡市立科学博物館

6．秦昭繁他（1977）『松原遺跡』置賜考古学会

7．手塚孝（1977）　「No.26八幡原B遺跡」　『八幡原中核工業造成予定内埋蔵文化財調査報告書』第3集，米沢市教育委員会

8．手塚孝（1977）　「No.25八幡原A遺跡」『八幡原中核工業造成予定内埋蔵文化財調査報告書』第3集　米沢市教育委員会

9．佐藤鎮雄　（1975）「No.31竹井境B遺跡調査の概要」『八幡原中核工業造成予定内埋蔵文化財調査報告書』第1集

10．注4と同じ。阿部明彦他（1981）　石田遺跡調査報告書　西改町教育委員会

11．富樫泰時（1976）「トランシュ様石器について」『東北考古学の諸問題』所収

12．杉原荘介，芹沢長介，（1959）「神奈川県夏島における縄文文化初頭の具塚」明治大学

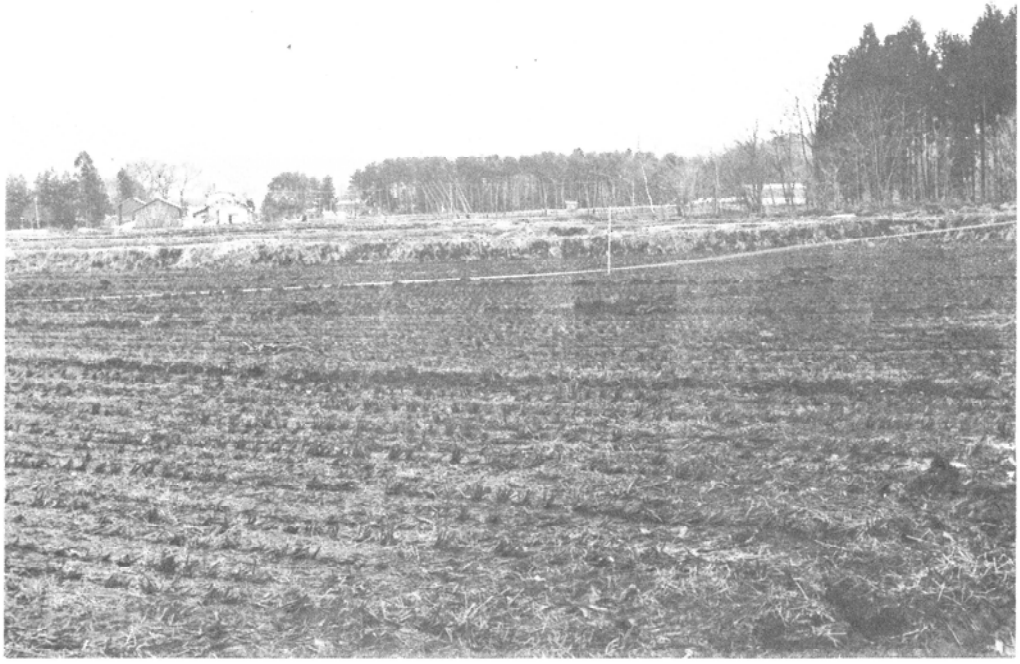
図　　版

▲No.2遺跡発掘前状況

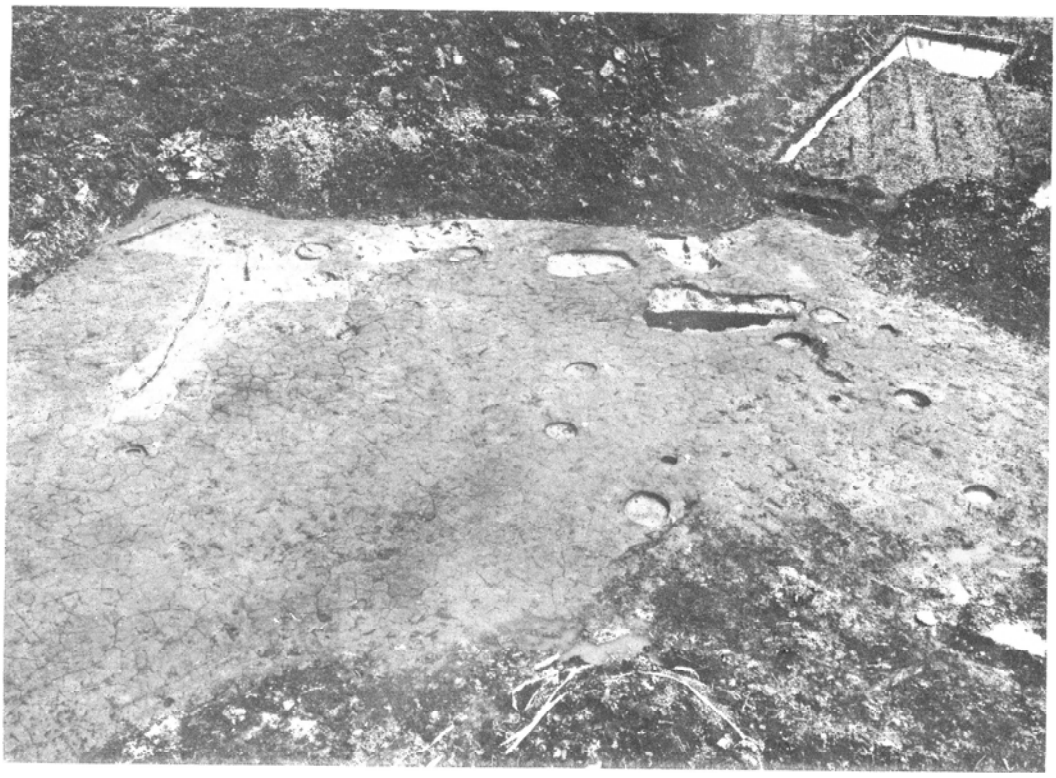
▲同上遺構全景

第二図版八幡原No.2遺跡の発掘(2)No.6遺跡の発掘(1)

▲ No.2遺跡ST1全景



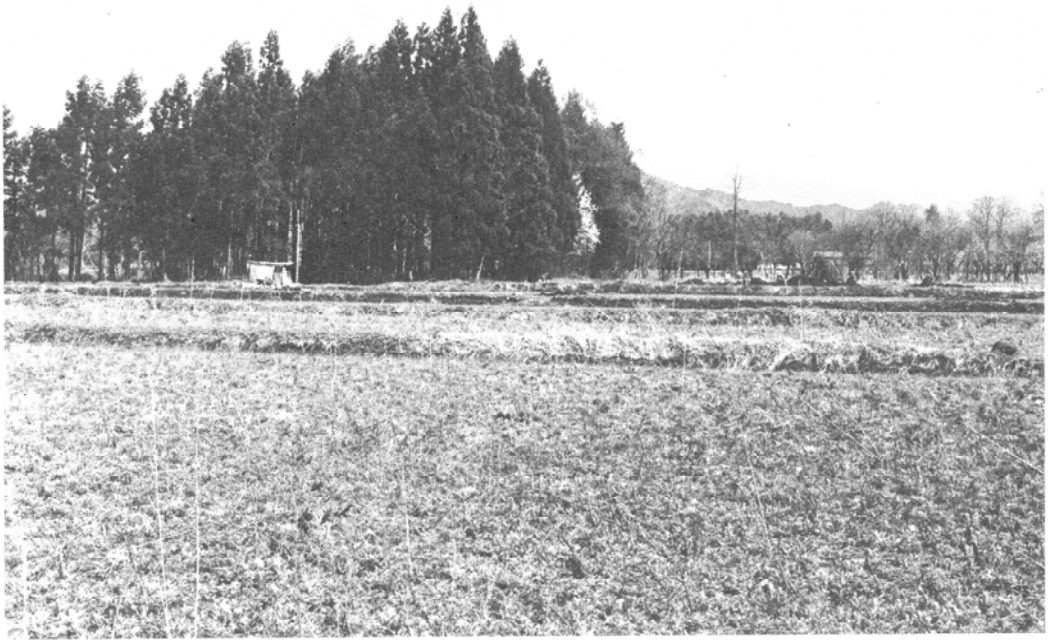
▲ No.6遺跡発掘前状況



▲ 遺構全景(1)

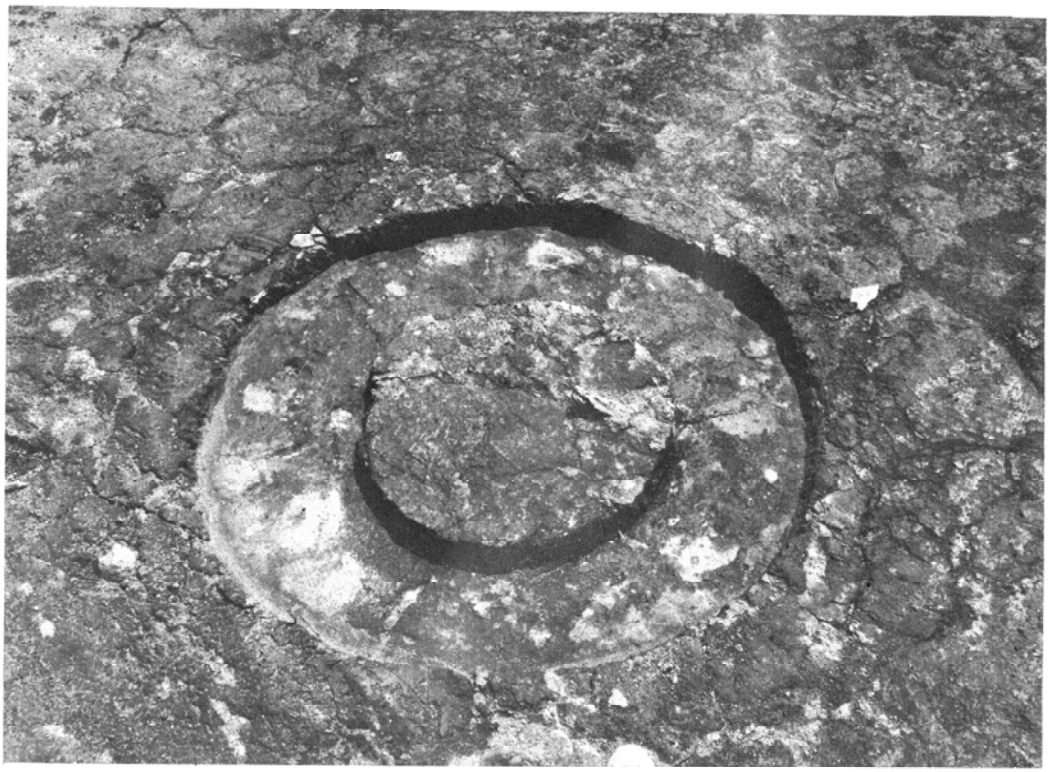
▲ 遺構全景(2)

第四図版八幡原No.4遺跡の発掘(1)

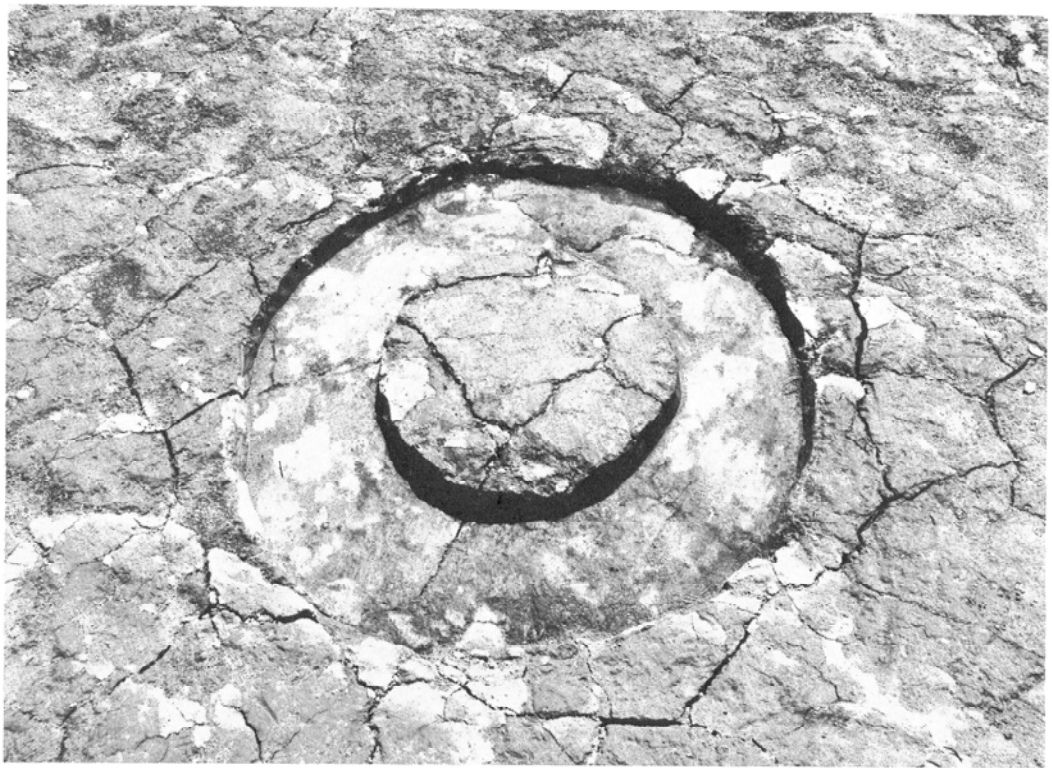


▲ 発掘前状況

▲ SR全景

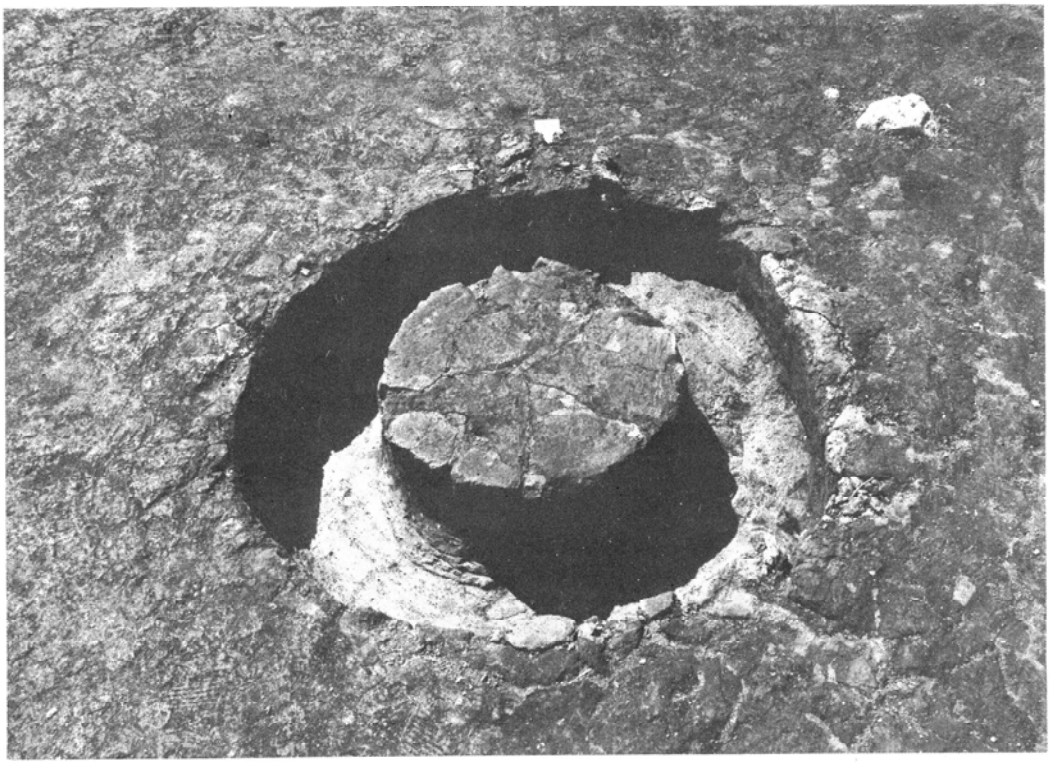


▲ SR確認状況その1



▲同 上 その2

▲SR断面状況

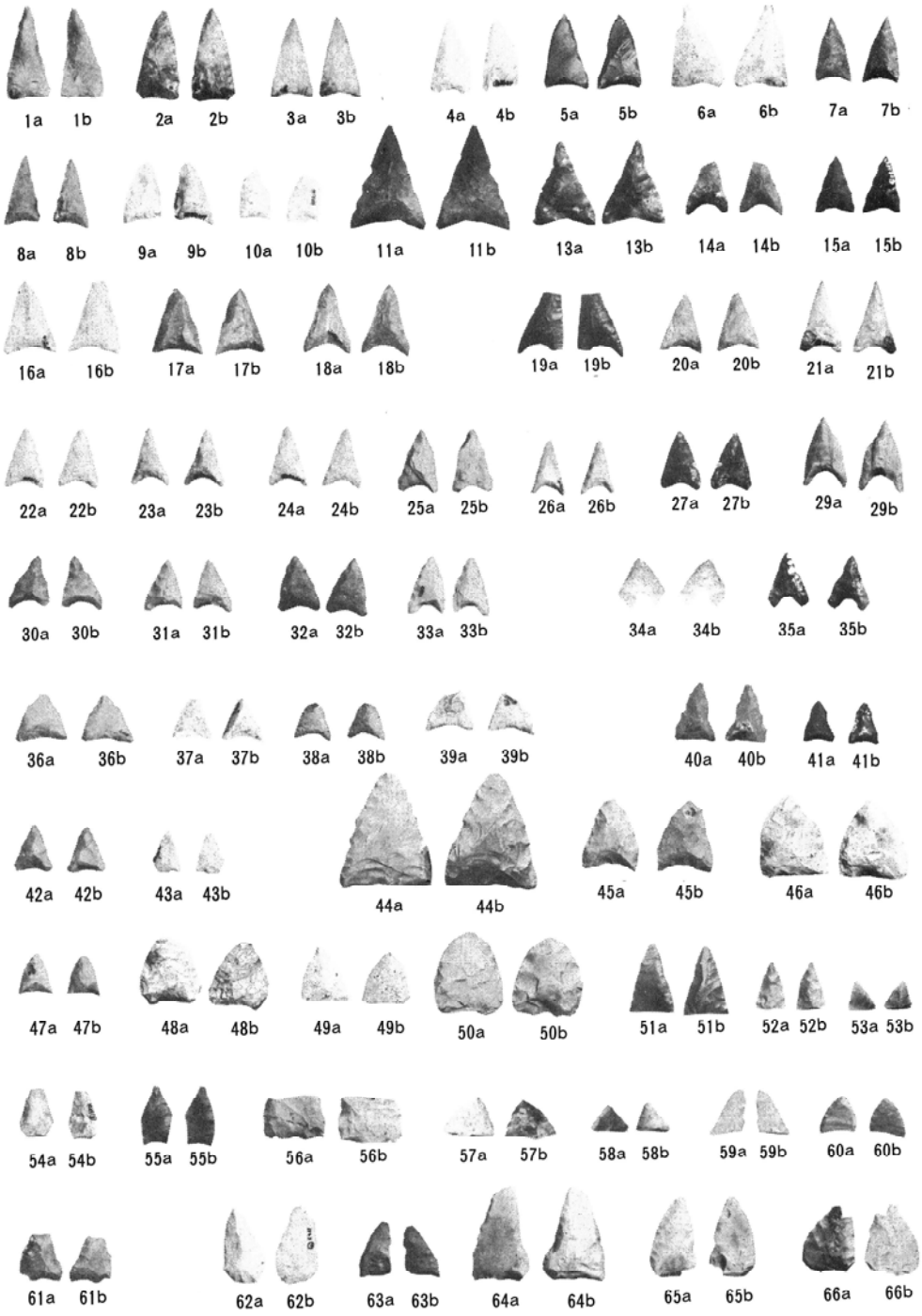


▲ SR完掘状況

▲畠跡全景　その1

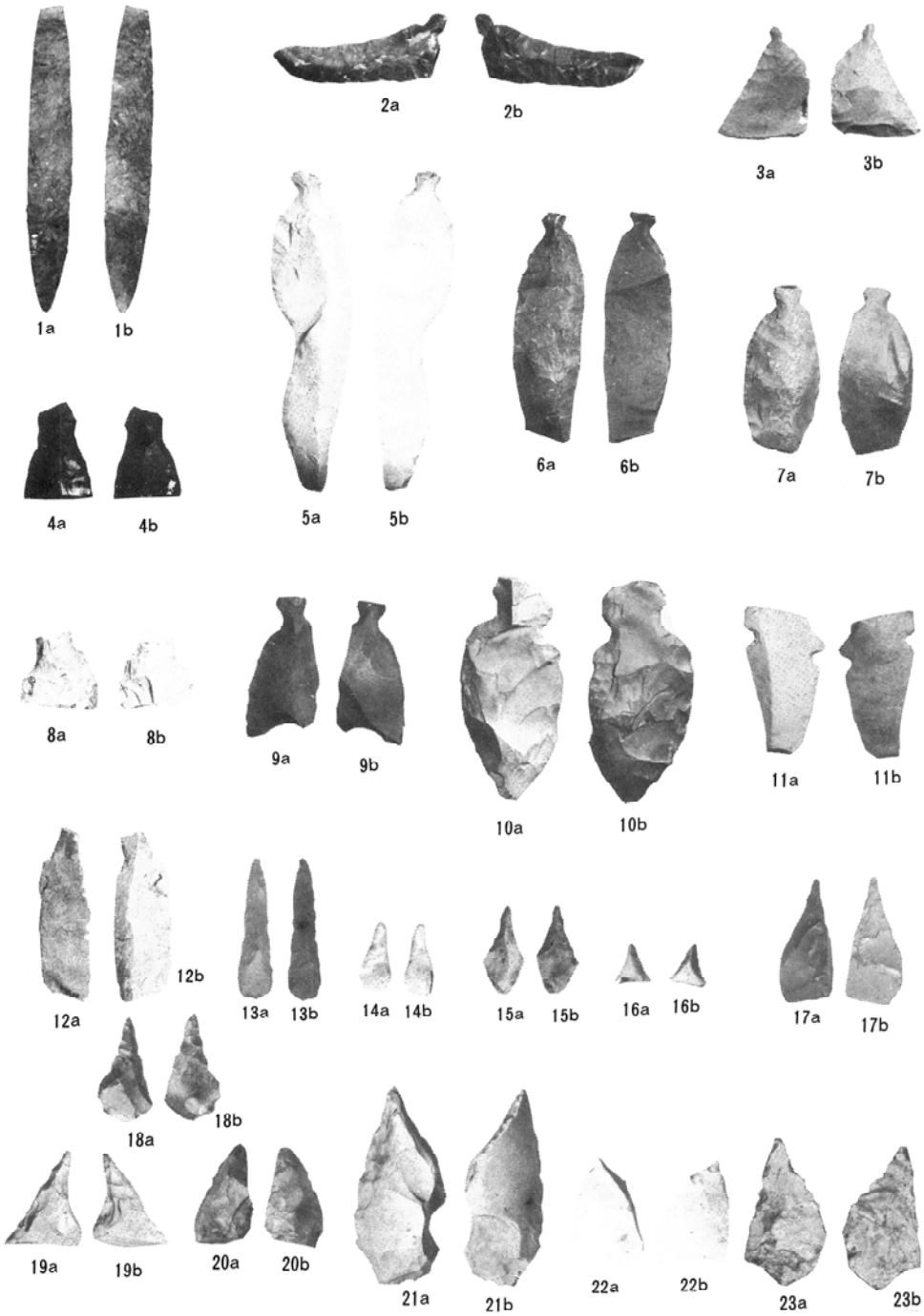
▲畠跡全景　その2

第八図版八幡原No.4遺跡出土の石器（一）



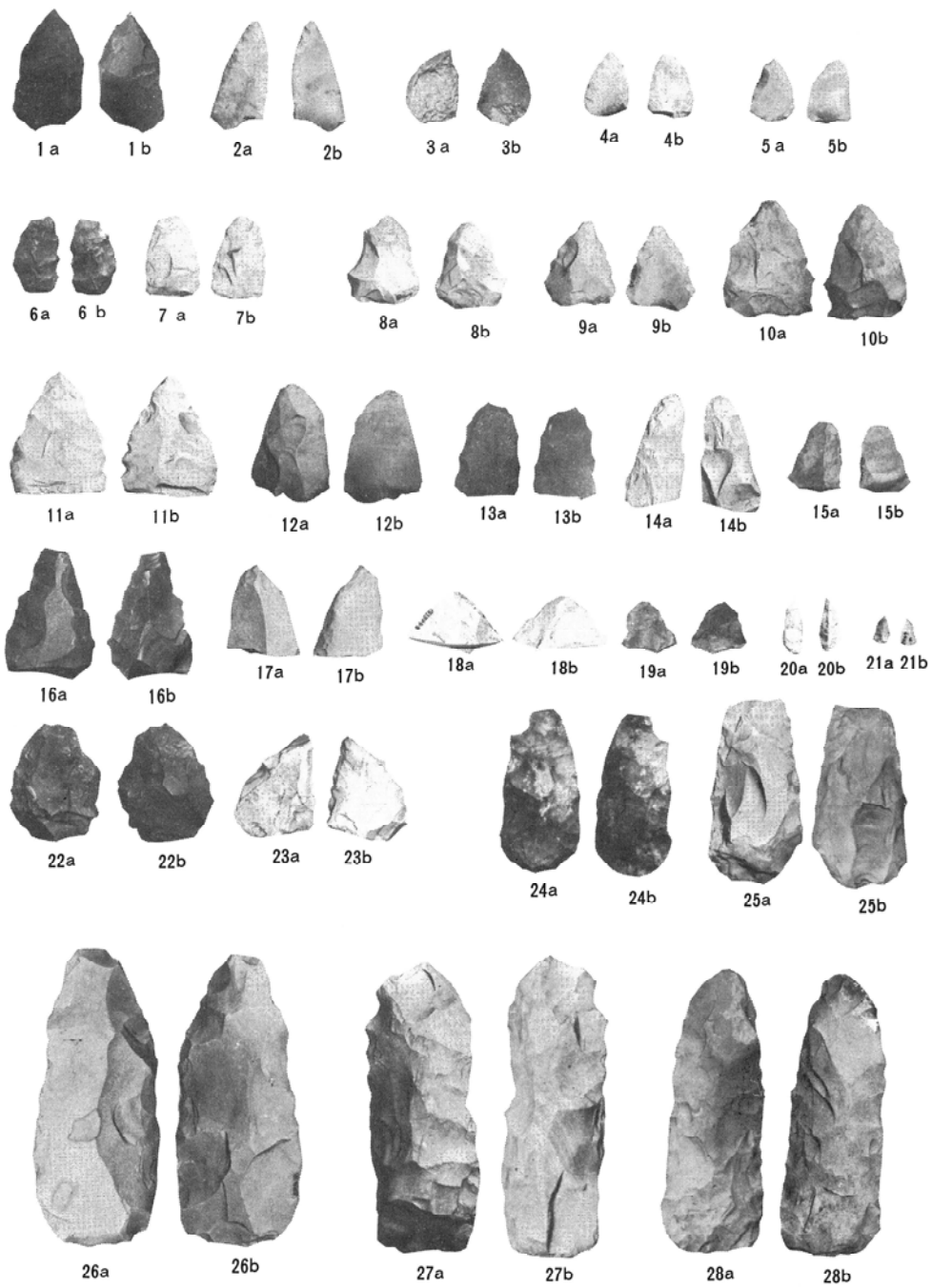
Ⅰ群石器a類～j類　縮尺２分の１

第九図版　八幡原No.4遺跡出土の石器（二）



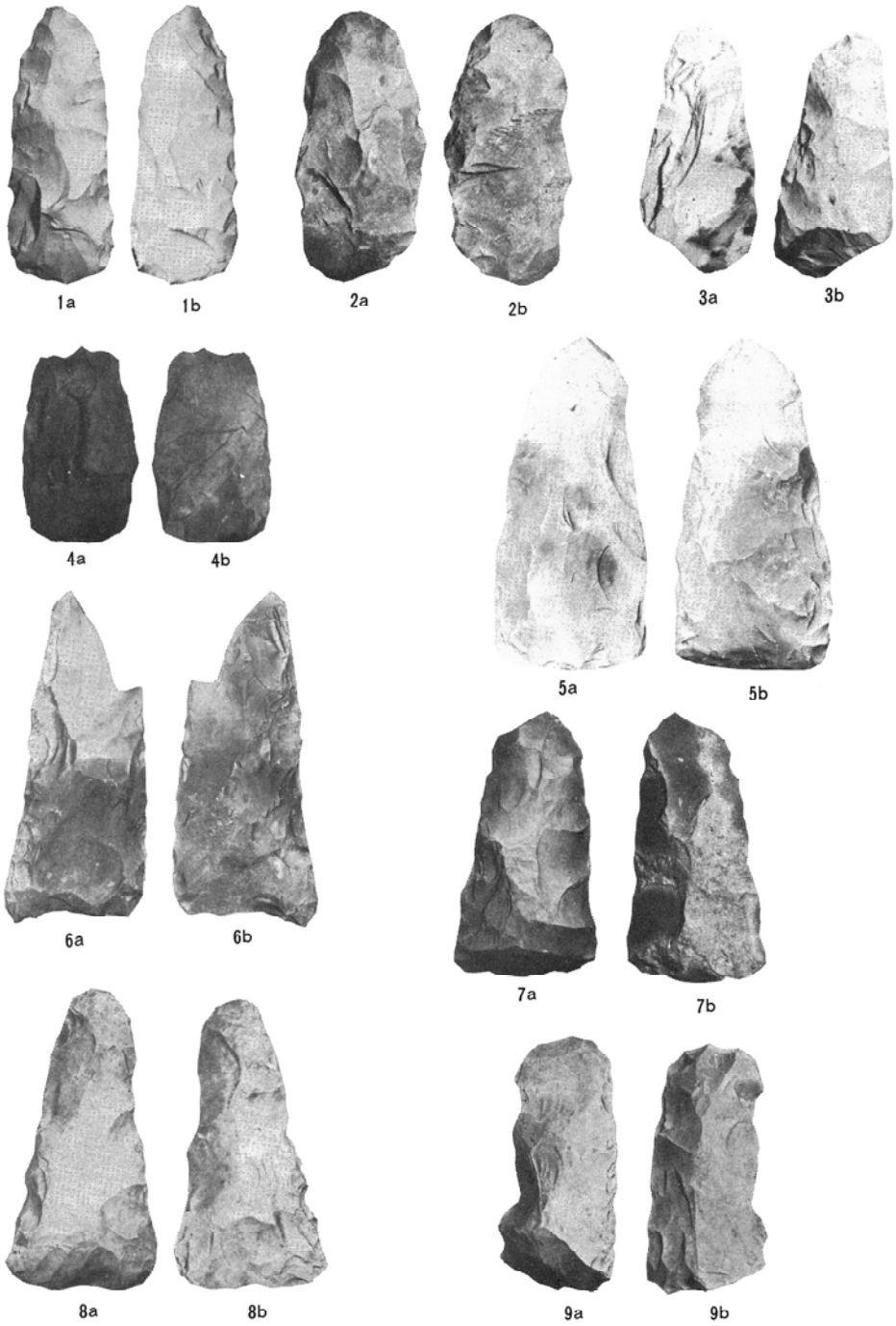
Ⅱ群石器i，Ⅲ群石器a類～d類（2～12）Ⅳ群石器a類～e類（13～23）　縮尺2分の1

第十図版第十図版八幡原No.4遺跡出土の石器（三）



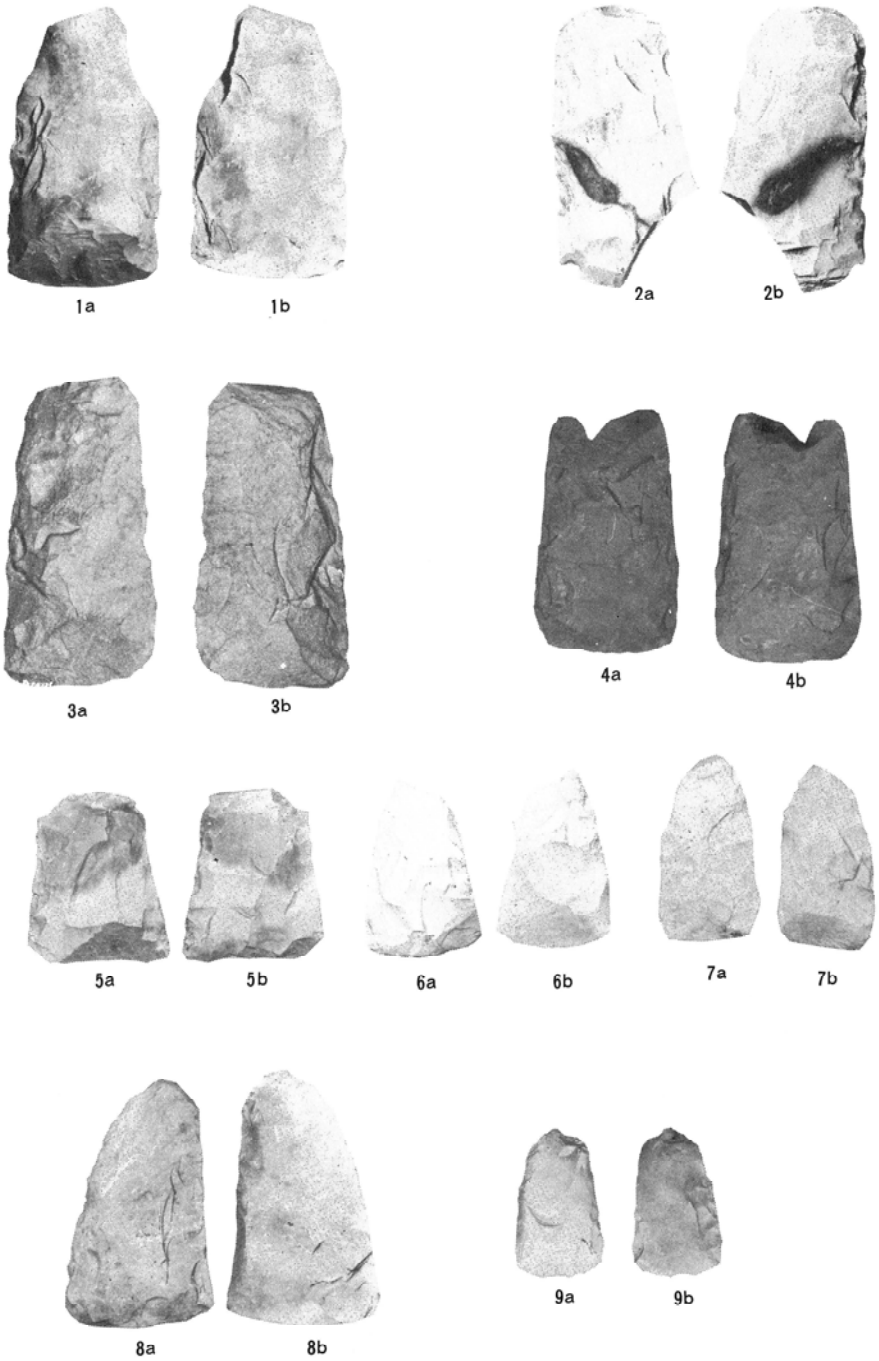
Ⅴ群石器a類～e類（1～23）　Ⅵ群石器a類（24～28）

第十一図版八幡原No.4遺跡出土の石器（四）



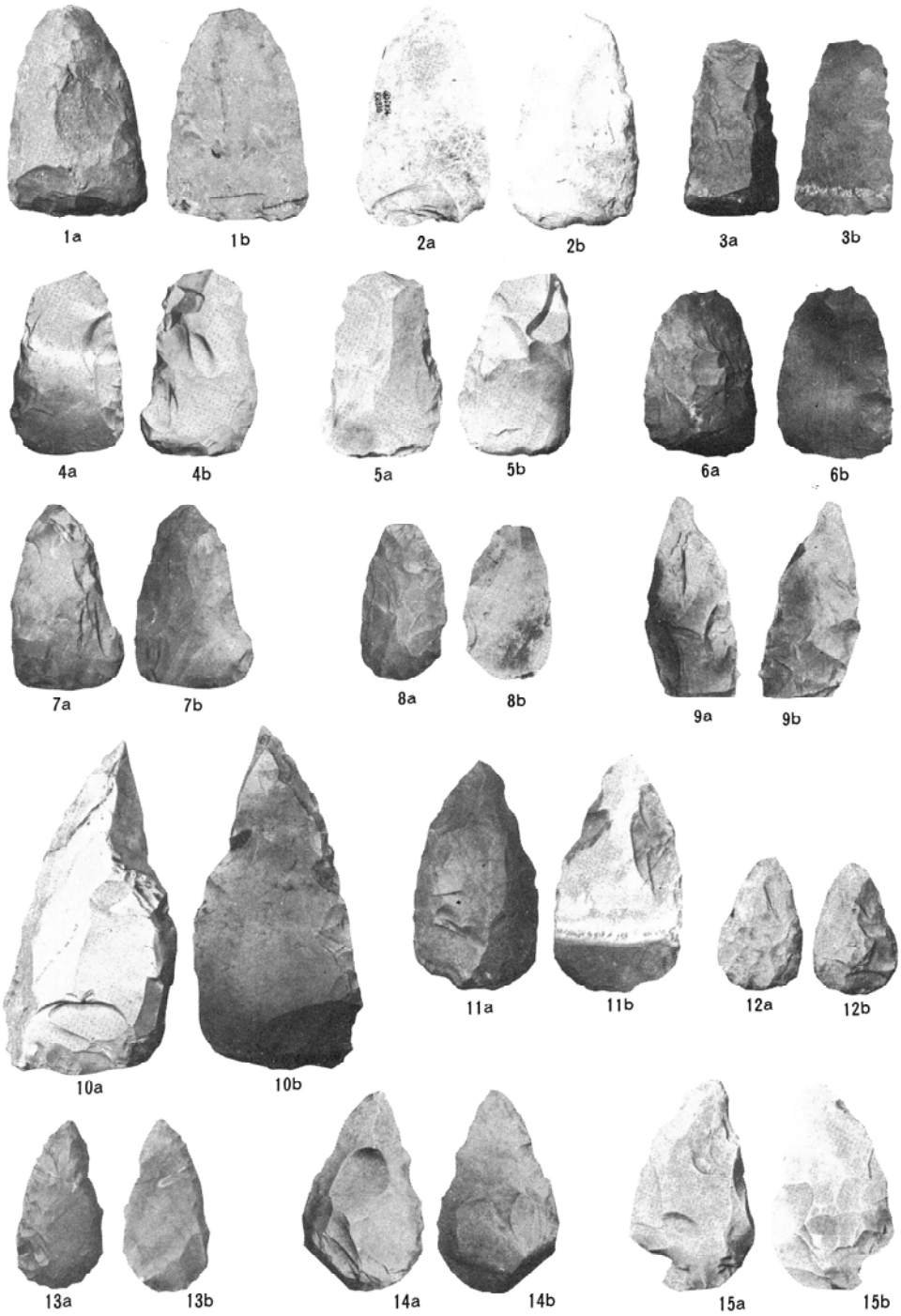
Ⅵ群石器a類～b類　縮尺２分の１

第十二図版八幡原No.4遺跡出土の石器（五）



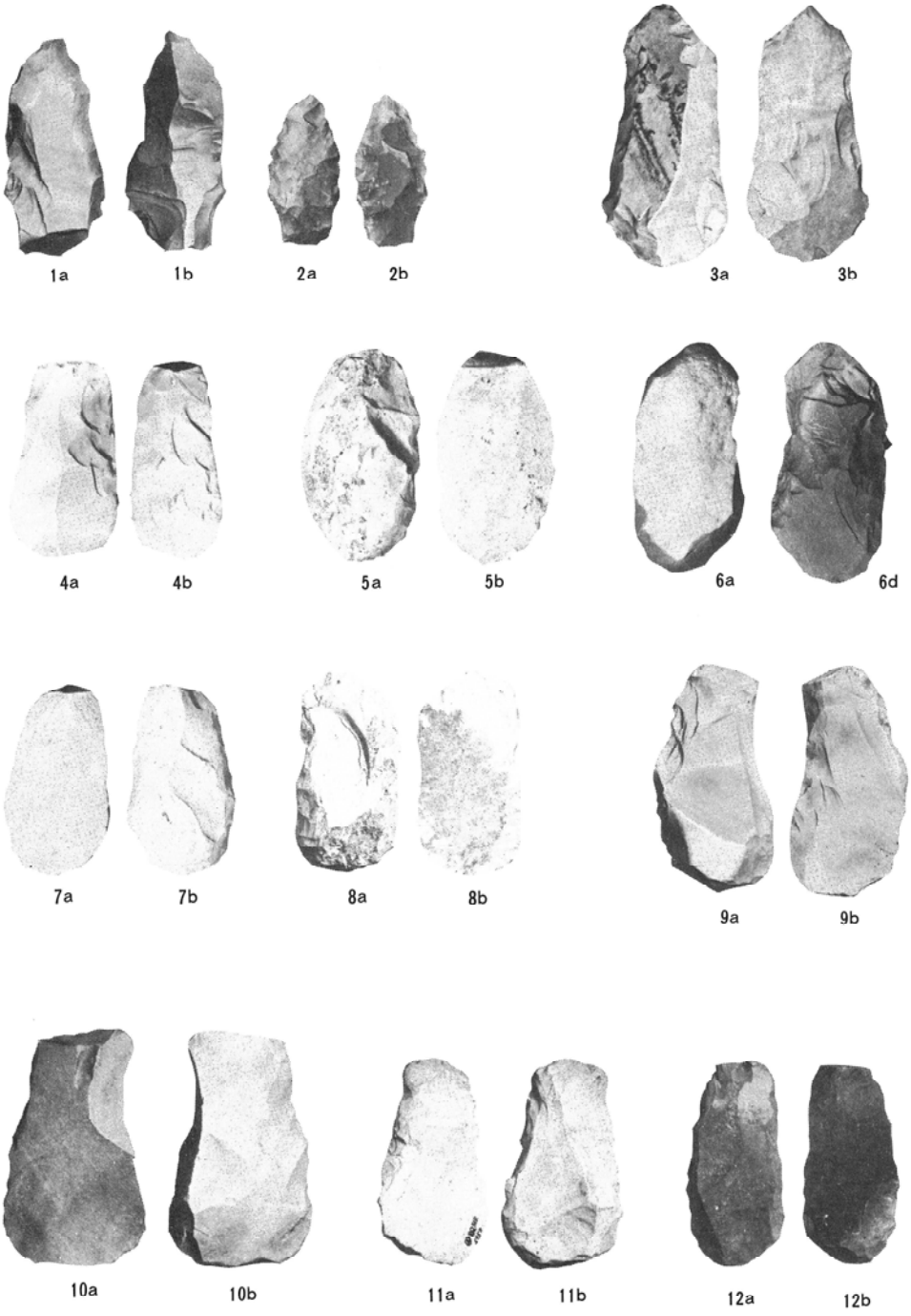
Ⅵ群石器b類～d類　縮尺２分の１

第十三図版八幡原No.4遺跡出土の石器（六）



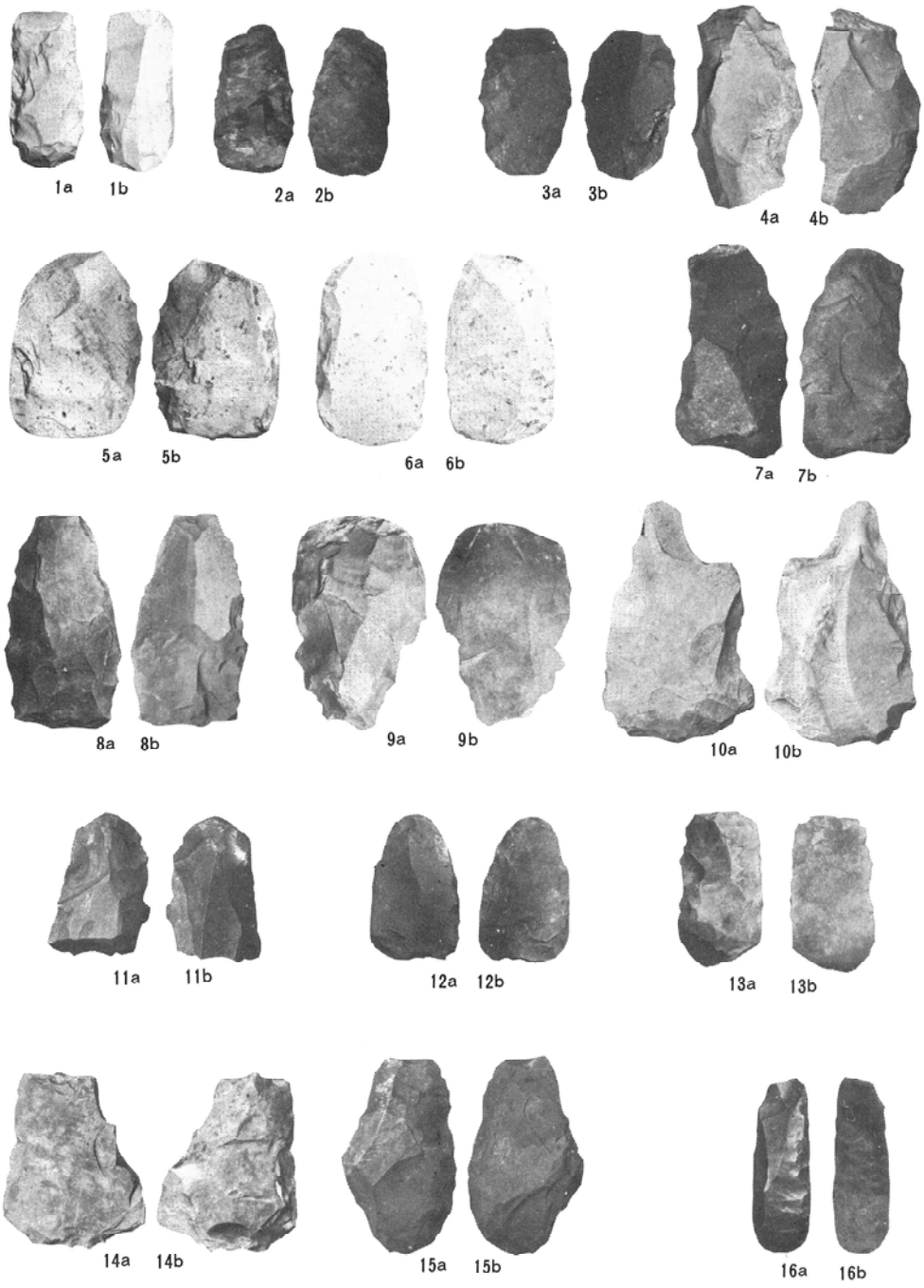
Ⅵ群石器d類～e類　縮尺２分の１

第十四図版八幡原No.4遺跡出土の石器（七）



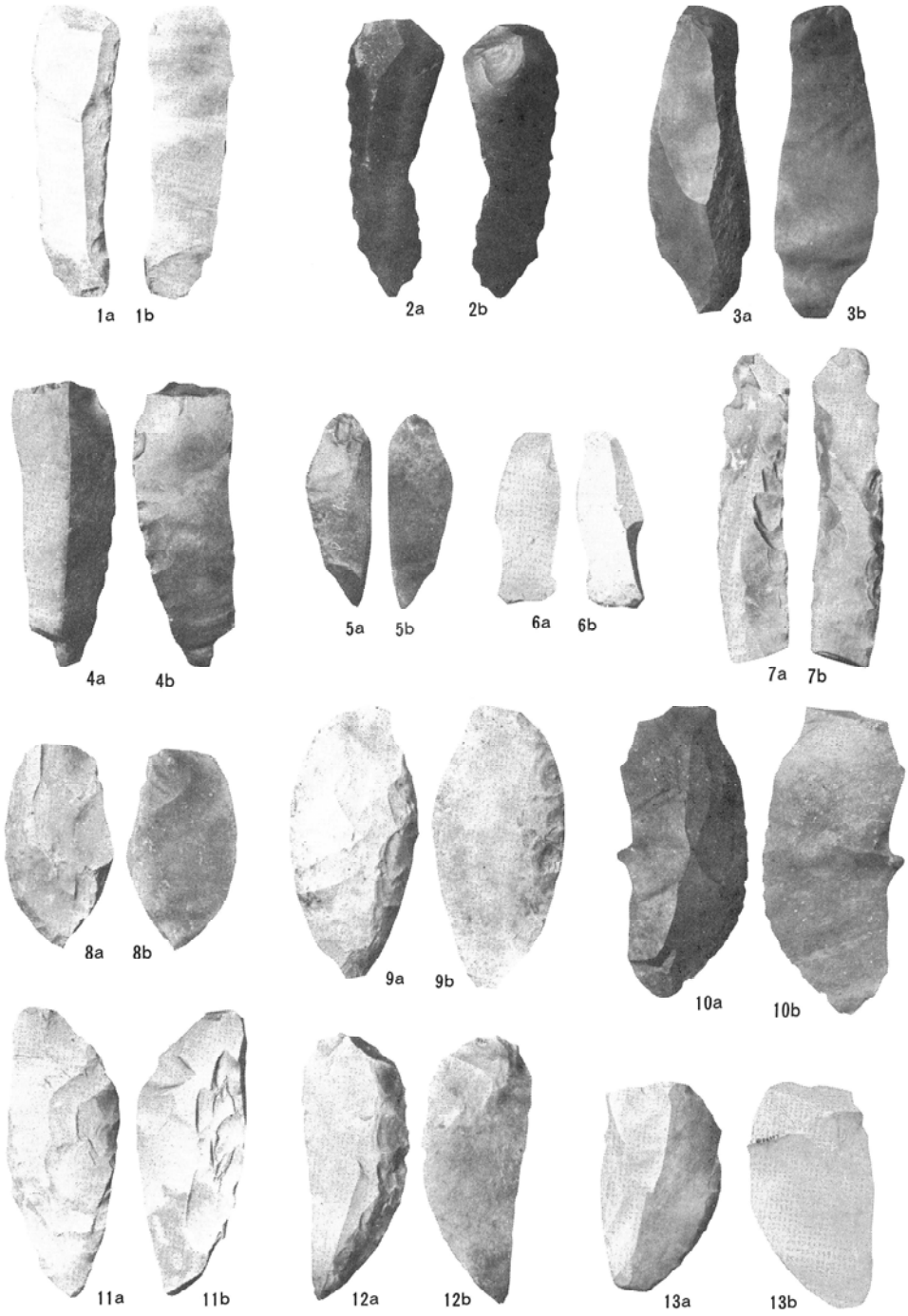
Ⅵ群石器d類～g類　縮尺２分の１

第十五図版八幡原No.4遺跡出土の石器（八）



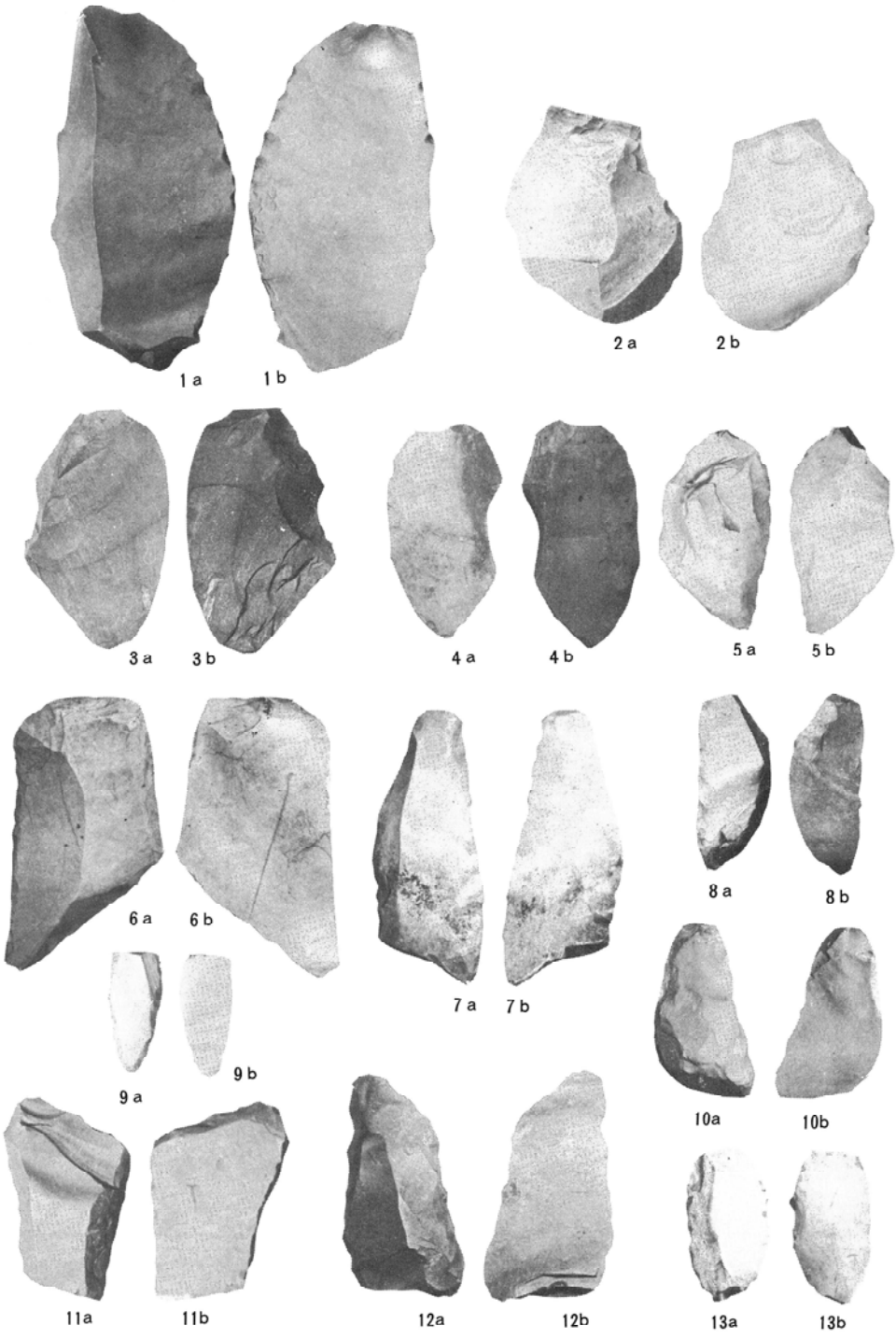
Ⅵ群石器h類～k類　縮尺２分の１

第十六図版八幡原No.4遺跡出土の石器（九）



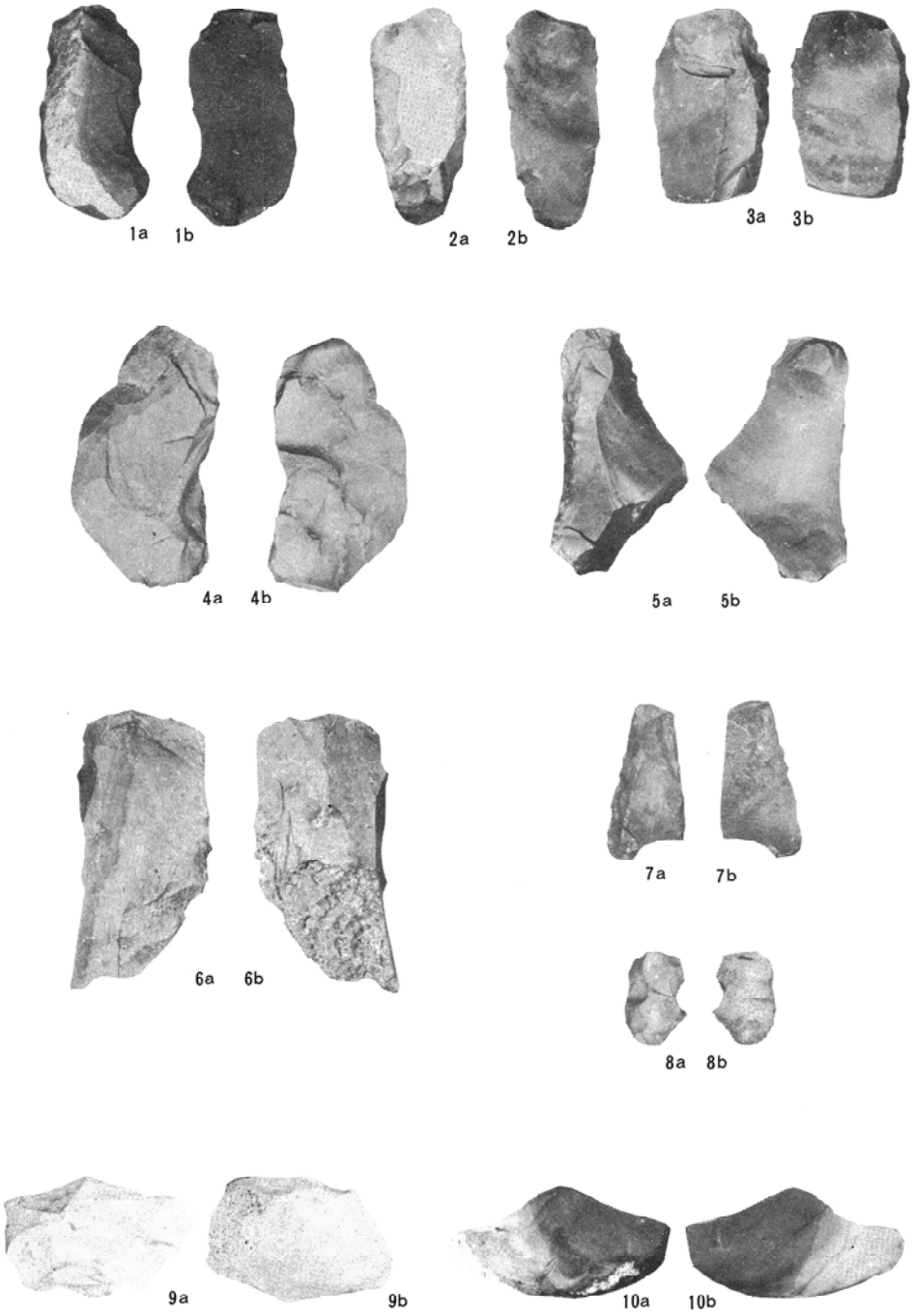
Ⅶ群石器a類～b類　縮尺２分の１

第十七図版八幡原No.4遺跡出土の石器（十）



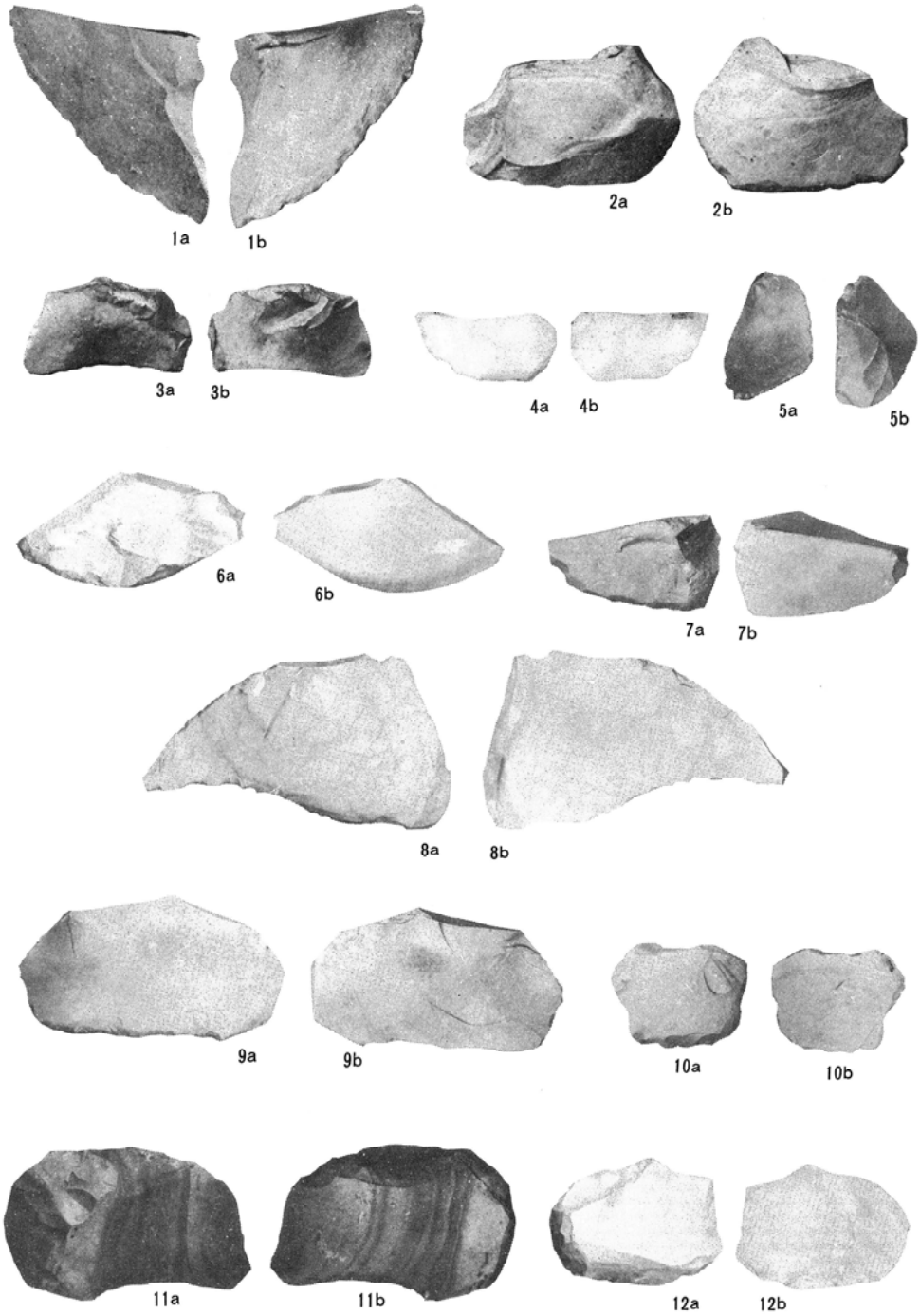
Ⅶ群石器b類～c類　縮尺２分の１

第十八図版八幡原No.4遺跡出土の石器（十一）



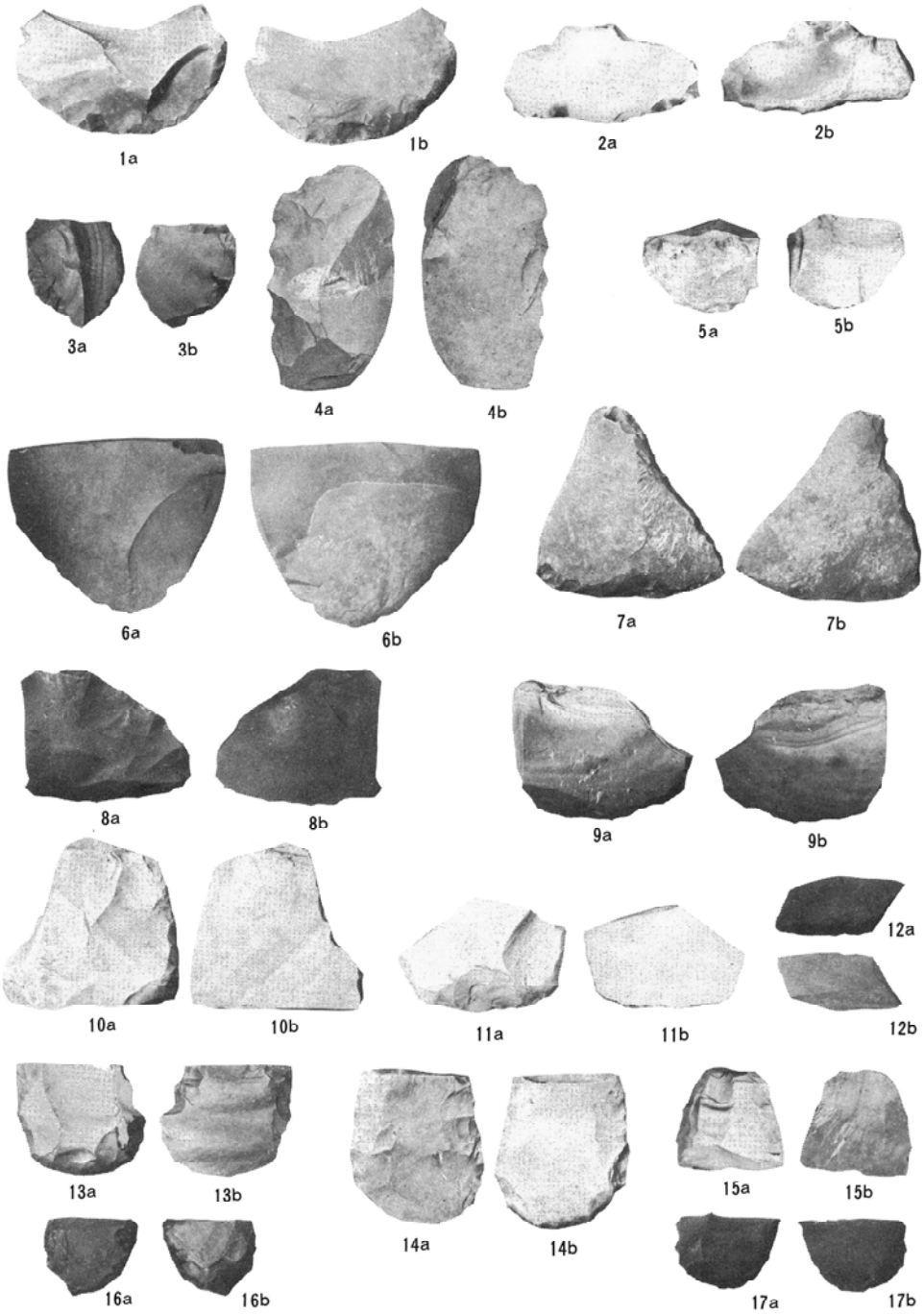
Ⅶ群石器c類，Ⅷ群石器a類　縮尺２分の１

第十九図版八幡原No.4遺跡出土の石器（十二）

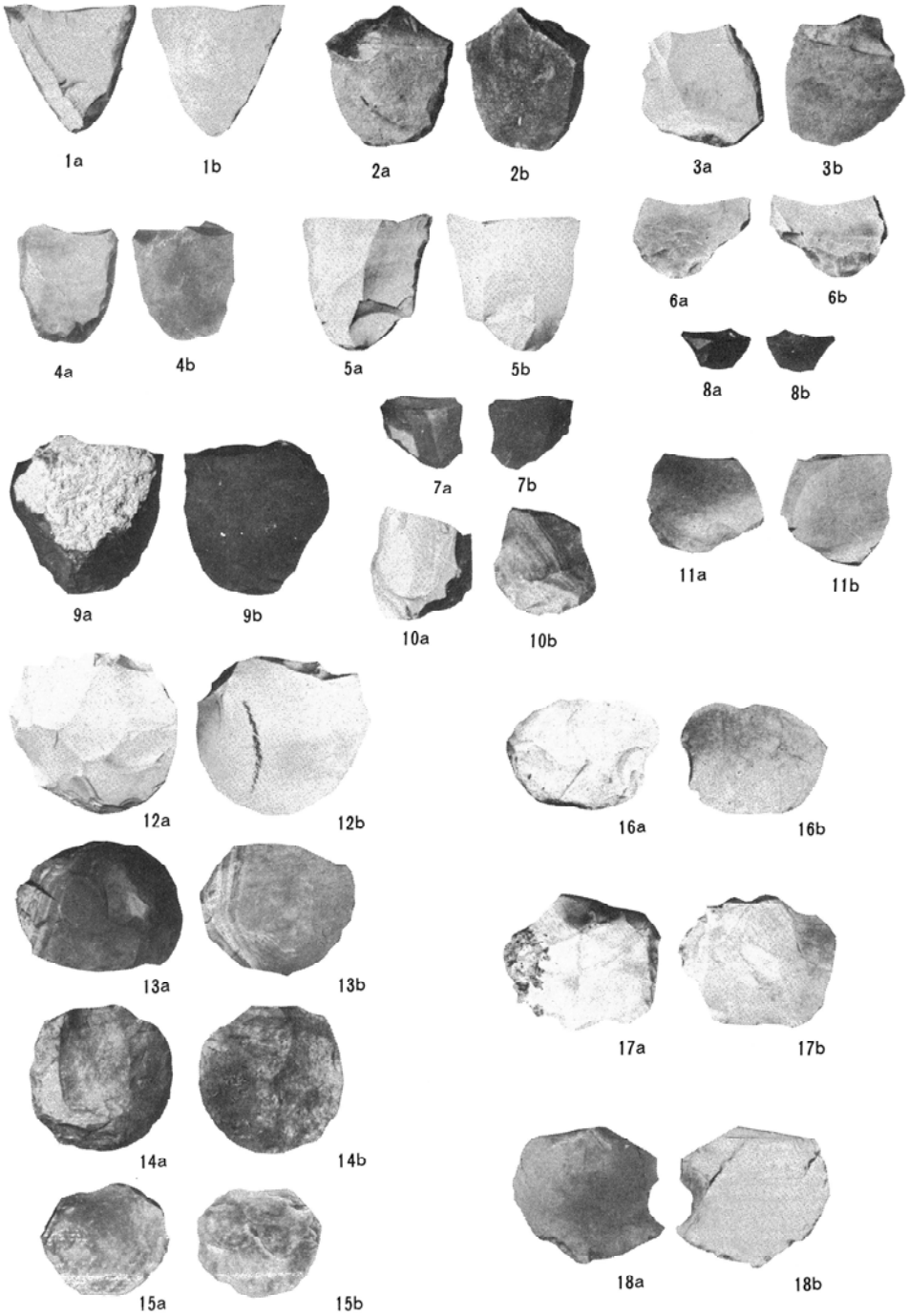


Ⅷ群石器a類，b類　縮尺２分の１

第二十図版八幡原No.4遺跡出土の石器（十三）

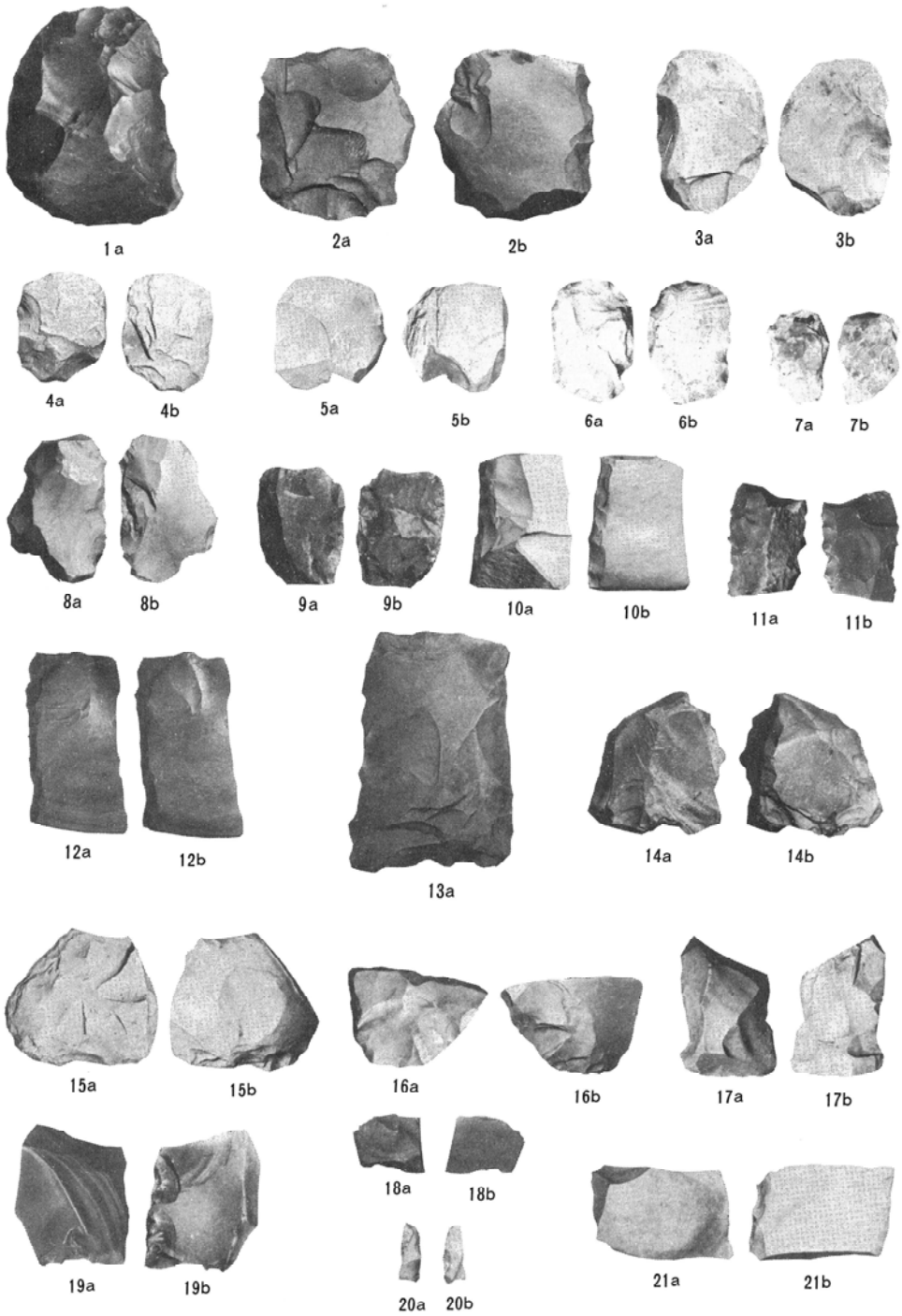


Ⅷ群石器b類～c類，Ⅸ群a類　縮尺 2分の1

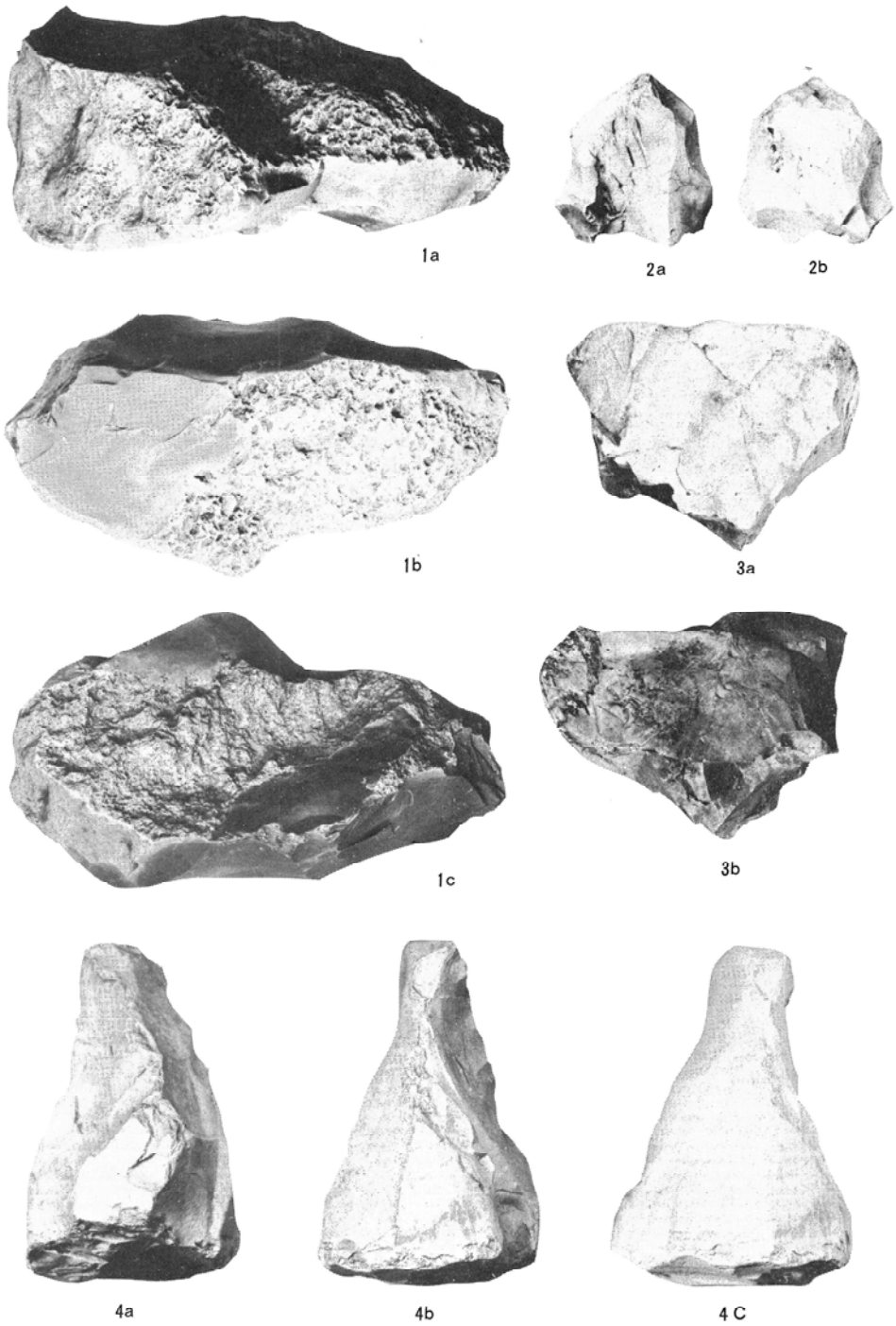


Ⅸ群石器b類～c類，Ⅹ群石器a類～b類　縮尺２分の１

第二十二図版八幡原No.4遺跡出土の石器（十五）

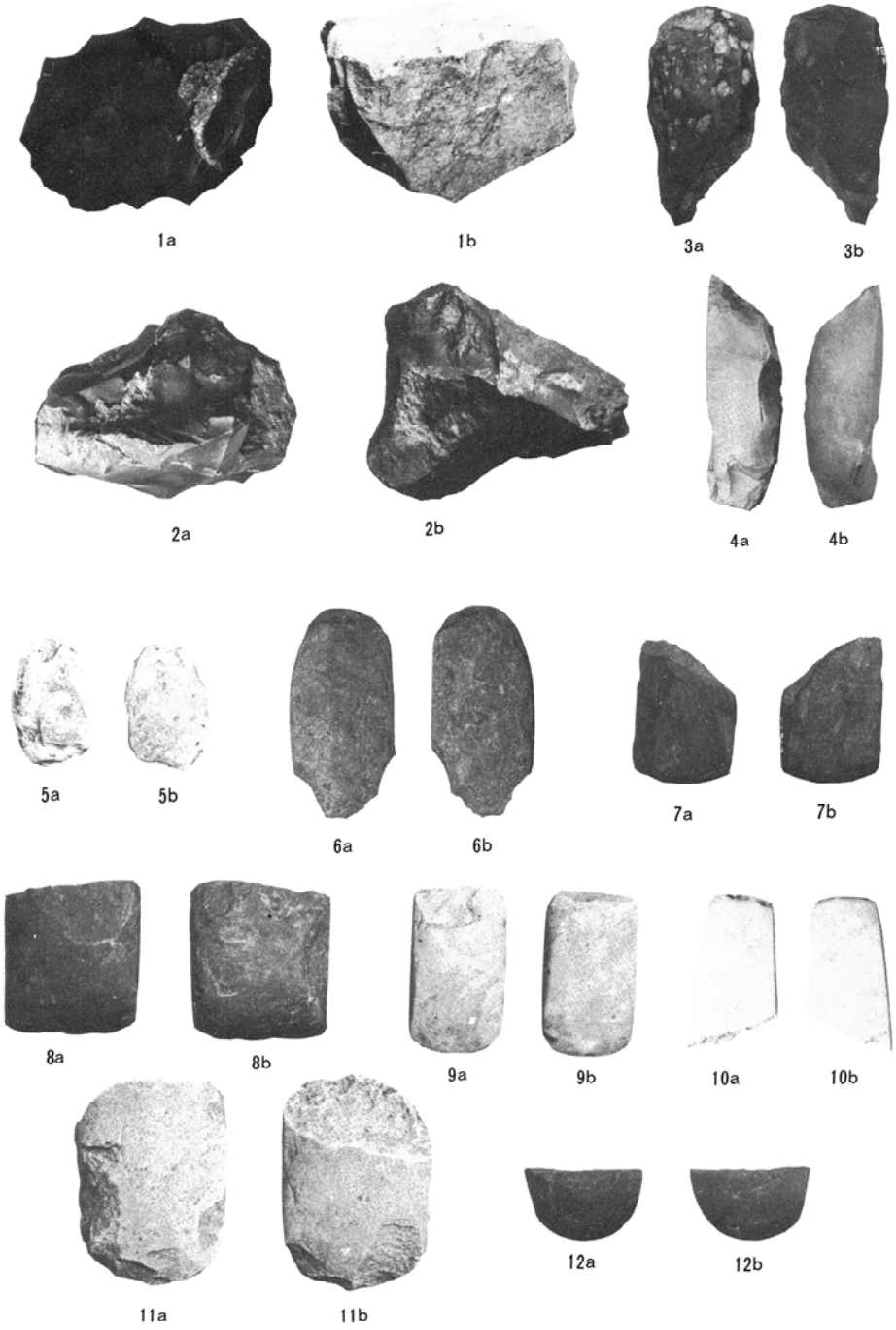


XI群石器a類～d類　縮尺２分の１



XII群石器a類～c類　縮尺２分の１

第二十四図版八幡原No.4遺跡出土の石器（十七）



XI群石器d類，XII群石器b類，XIII群石器a類，b類　縮尺２分の１

1a

1b

2a

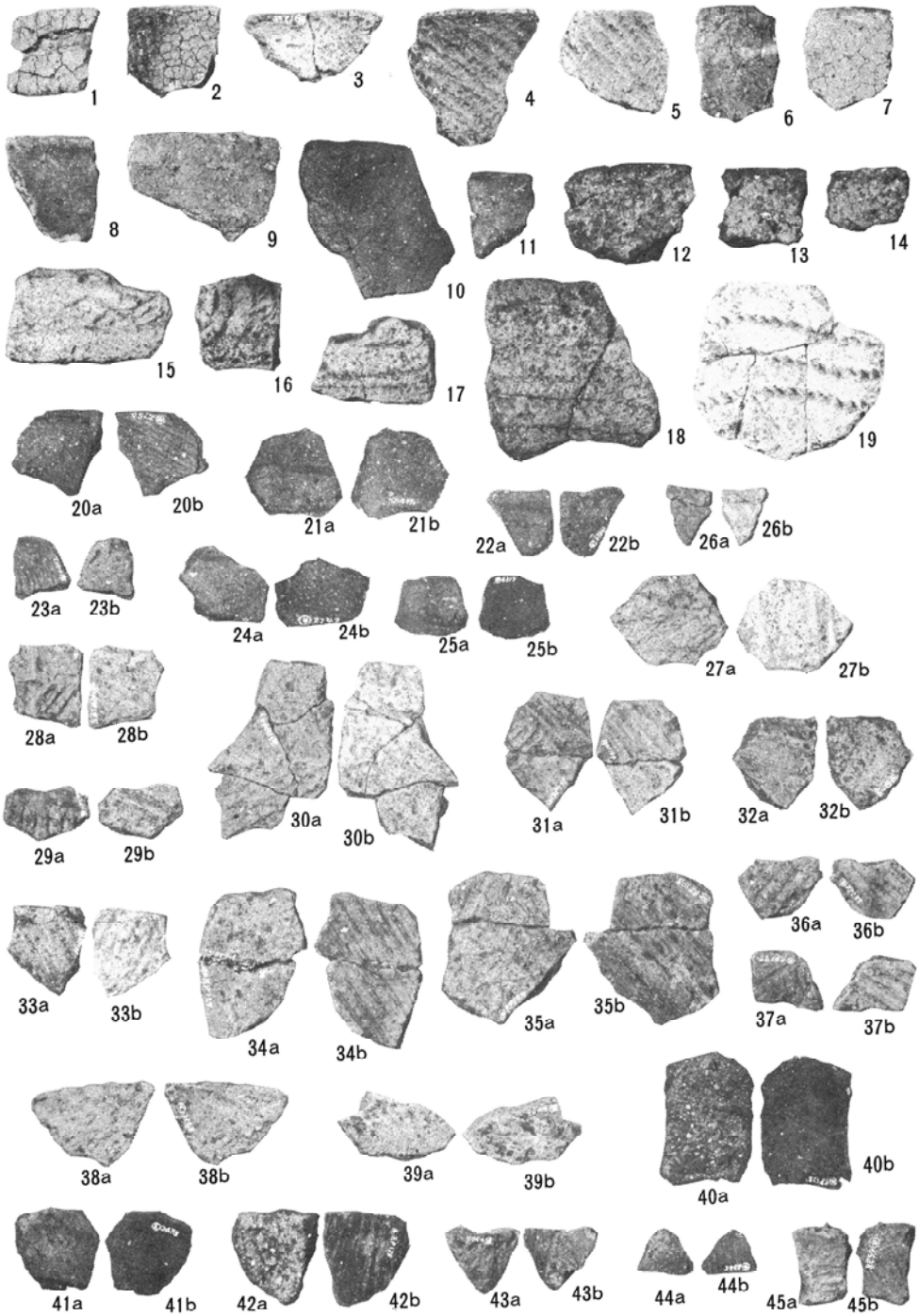
2b

3a

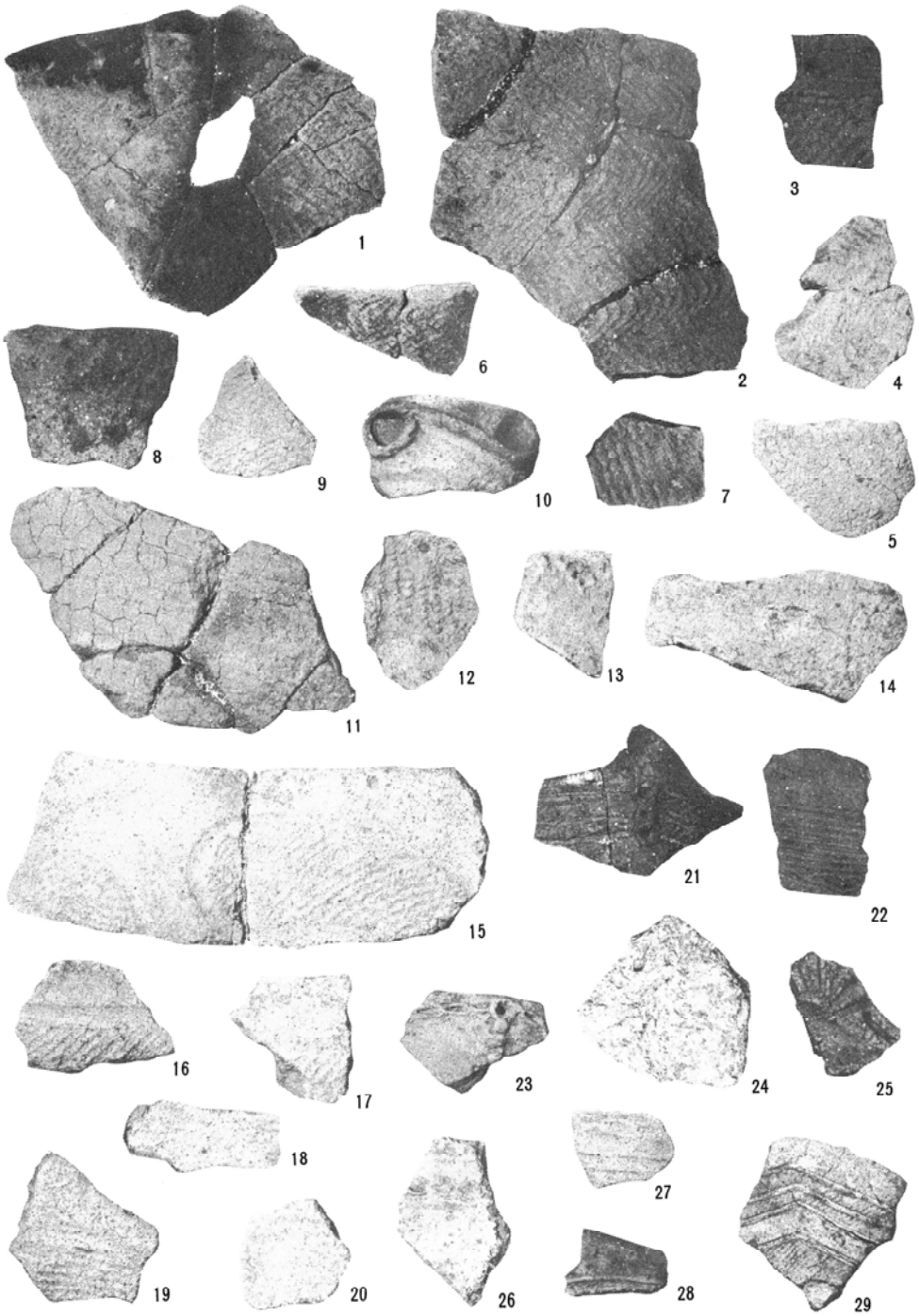
3b

XIV群石製品a類～c類　縮尺2分の1

第二十六図版八幡原No.4遺跡出土の土器（一）

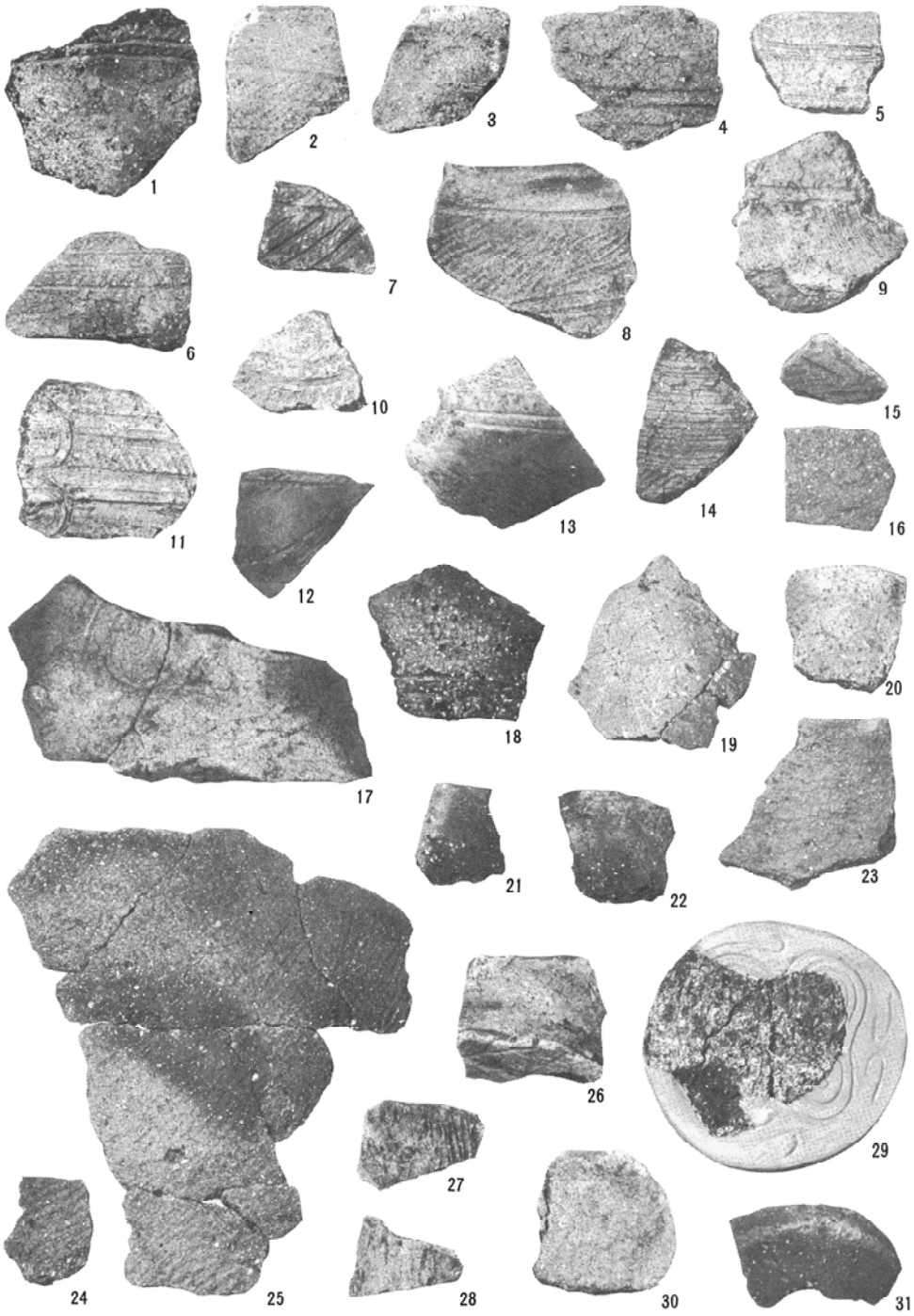


Ⅰ群土器a類～i類　縮尺２分の１



Ⅱ群土器a類・b類・Ⅲ群土器・Ⅳ群土器　縮尺２分の１

第二十八図版八幡原No.4遺跡出土の土器（三）



Ⅳ群土器　縮尺２分の１

完形土器(1)　縮尺不同

第三十図版八幡原No.4遺跡出土の土器（五）

完形土器(2)　縮尺不同

昭和57年３月31日発行

米沢市万世町桑山団地造成地内

埋蔵文化財調査報告書　第Ⅰ集

水神前遺跡
柿の木遺跡
ニタ俣Ｂ遺跡

発行・編集　米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目１―14
印　　刷　株式会社　よねざわ印刷
米沢市城西二丁目３―72
ＴＥＬ21―1212㈹